松山市文化財調査報告書73

船ヶ谷遺跡

― 3次調査地 ―

1999

松山市教育委員会

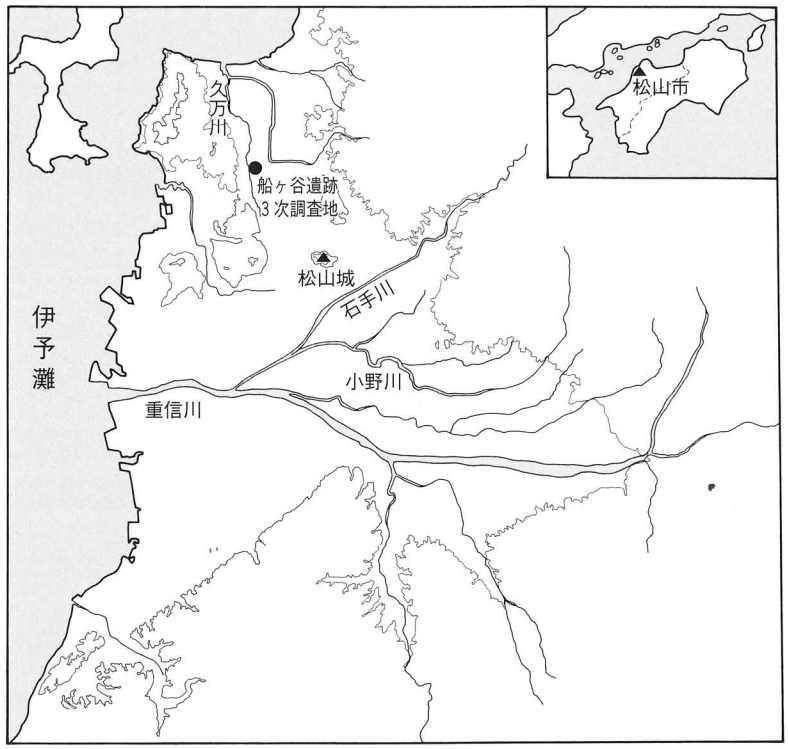
財団法人松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

ふながたに

船ヶ谷遺跡

― 3次調査地 ―



1999

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

巻頭図版１　ＳＥ301の構造（西より）

序

松山市は、古代より瀬戸内海航路の要地として、西日本地方の交通・交易に深く係わってきました。松山市には、市のシンボルとして市民の方々に親しまれております松山城をはじめとして、数多くの文化財が残されていることでも知られ、愛媛県下を代表する縄文時代晩期から古代にかけての遺跡が多く発掘されています。

船ヶ谷遺跡は、松山平野西北の低地帯に位置する遺跡です。発掘調査は既に３次を数え、縄文時代晩期から中世までの複合遺跡であることが明らかになってきています。

今回の調査では、南北朝から室町時代の建物群、柵列や井戸、これらを囲む様に区画された溝等を確認することができました。さらに、縄文時代晩期から弥生時代終末の自然流路を調査しました。これらは、当時の集落の景観を復元する上で貴重な資料となりました。

こうした成果をあげられましたのは、関係各位の埋蔵文化財に対する深いご理解とご協力のたまものであり、厚くお礼を申し上げます。今後とも埋蔵文化財の発掘調査に対する一層のご協力をお願い申しあげます。

本書が、埋蔵文化財の調査・研究の一助となり、文化財保護・生涯教育の向上に寄与できれば幸いです。

平成11年９月30日

財団法人　松山市生涯学習振興財団
理事長　中　村　時　広

例　　言

1．本書は、財団法人松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センターが平成10年度に実施した愛媛県松山市安城寺町592-1外6筆所在遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書で使用した標高数値は海抜標高を示し、方位は国土座標を基準とした真北で、磁北から東偏6度21分を測る。

3．遺構は、呼称を略号で記述した。自然流路：ＳＲ、掘立柱建物：掘立、井戸：ＳＥ、溝：ＳＤ、土坑：ＳＫ、柵列：ＳＡ、柱穴：ＳＰ、性格不明遺構：ＳＸである。さらに、遺構の呼称は、Ⅱ区ＳＥ１はＳＥ201、Ⅲ区ＳＥ１はＳＥ301とし、算用数字の左側は区名をあらわし、右側は各調査区内における遺構番号をあらわす。

4．遺構測量図･遺物実測図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。

5．本書で使用した遺構実測図は、主に加島次郎･大森一成･伊藤健司（現、福井県埋蔵文化財センター）が作成した。浄写は加島･大森･伊藤･大野裕子がおこなった。

6．本書で使用した遺物実測図の作成と浄写は、加島･大野･伊藤･田崎真理･森田利恵がおこなった。

7．本書で使用した遺構写真は、大西朋子･加島が撮影し、遺物写真は大西が撮影した。

8．調査においては、愛媛大学 下條信行･松原弘宣･川岡勉･田崎博之･吉田広･三吉秀充、愛媛県埋蔵文化財調査センター 大山正風･中野良一･柴田昌児･柴田圭子･西川真美の諸先生方から貴重なご指導を賜った。記して感謝申し上げます。

9. 本書の執筆は第Ⅶ章Ｉを山本健一、他を加島次郎が担当した。

10. 保存処理と科学分析では、井戸から出土した曲物の保存処理は（財）元興寺文化財研究所出土木製品保存処理室、樹種同定は同研究所研究開発室に調査を委託した。

11. 土の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』(1967) に準拠した。

12. 本書の編集は、梅木謙一･水口あをいの協力のもと、加島がおこなった。

13. 本書にかかわる図面･遺物は、松山市立埋蔵文化財センターで収蔵保管している。

14. 製版　カラー図版－175線、白黒図版－175線
　　印刷　オフセット印刷
　　用紙　カラー図版－ニューＶマット菊〈93〉５使用
　　白黒図版－ニューＶマット菊〈93〉５使用

本　文　目　次

第Ⅰ章　はじめに
1　調査に至る経緯 …… 1
2　調査･刊行組織 …… 1
第Ⅱ章　遺跡の概要
1　遺跡の立地 …… 3
2　歴史的環境 …… 3
第Ⅲ章　調査の概要
1　調査の経過 …… 6
2　調査区の設定 …… 7
3　層位 …… 9
4　遺構と遺物 …… 21
第Ⅳ章　縄文時代～弥生時代の記録
1　自然流路 …… 22
第Ⅴ章　中世の記録
1　掘立柱建物址 …… 27
2　井戸 …… 37
3　溝 …… 45
4　柵列 …… 52
5　土坑 …… 54
6　性格不明遺構 …… 58
7　柱穴 …… 59
8　包含層 …… 61
第Ⅵ章　近世以降の記録
1　掘立柱建物址 …… 62
第Ⅶ章　ＳＥ301における保存処理
Ⅰ　曲物の取り上げ ――――〔山本〕…… 74
Ⅱ　保存処理 ――――〔㈶元興寺文化財研究所〕…… 76
第Ⅷ章　ＳＥ301における科学分析
1　樹種同定 ――――〔㈶元興寺文化財研究所〕…… 81
第Ⅸ章　調査の成果と課題…… 84

挿　図　目　次

第１図　調査地位置図(1)（縮尺１／5,000）…… 2
第２図　周辺遺跡分布図（縮尺１／50,000）…… 4
第３図　現地説明会 …… 7
第４図　調査地位置図(2)（縮尺１／2,000）…… 7
第５図　調査地区割り図（縮尺１／800）…… 8
第６図　Ⅰ区西壁土層図（縮尺縦１／40　横１／60）…… 11
第７図　Ⅱ区北壁・東壁土層図（縮尺縦１／40　横１／60）…… 15
第８図　Ⅱ区南壁・Ⅲ区東壁土層図（縮尺縦１／40　横１／60）…… 17
第９図　遺構配置図（縮尺１／400）…… 19
第10図　ＳＲ201測量図（縮尺１／200　縦１／60　横１／100）…… 23
第11図　ＳＲ201出土遺物実測図(1)（縮尺１／３）…… 24
第12図　ＳＲ201出土遺物実測図(2)（縮尺１／３・２／３）…… 25
第13図　ＳＲ301測量図（縮尺１／200・１／100）…… 25
第14図　ＳＲ301出土遺物実測図（縮尺２／３）…… 26
第15図　掘立202測量図（縮尺１／60）…… 28
第16図　掘立204測量図（縮尺１／60）…… 29
第17図　掘立204・炉（ＳＫ202）測量図及び出土遺物実測図（縮尺１／10・１／３）…… 30
第18図　掘立205・ＳＡ202測量図及び掘立205出土遺物実測図（縮尺１／60・１／３）…… 32
第19図　掘立206・ＳＡ203・ＳＡ204測量図（縮尺１／60）…… 33
第20図　掘立206・貯蔵穴(ＳＫ204)測量図及び出土遺物実測図（縮尺１／10・１／３・１／４）…… 34
第21図　掘立207測量図（縮尺１／60）…… 35
第22図　掘立208測量図（縮尺１／60）…… 36
第23図　掘立301・掘立302測量図（縮尺１／60）…… 38
第24図　ＳＥ201測量図（縮尺１／20）…… 39
第25図　ＳＥ201断面測量図及び出土遺物実測図（縮尺１／20・１／３・１／２）…… 40
第26図　ＳＥ301測量図（縮尺１／20）…… 41
第27図　ＳＥ302測量図及び出土遺物実測図（縮尺１／20・１／３）…… 43
第28図　ＳＥ303測量図及び出土遺物実測図（縮尺１／20・１／３）…… 44
第29図　ＳＥ304測量図（縮尺１／20）…… 45
第30図　ＳＤ201測量図（縮尺１／160・１／20）…… 46
第31図　ＳＤ201出土遺物実測図(1)（縮尺１／３・１／２）…… 47
第32図　ＳＤ201出土遺物実測図(2)（縮尺１／３）…… 48
第33図　ＳＤ202・ＳＡ201測量図（縮尺１／60）…… 49
第34図　ＳＤ202出土遺物実測図（縮尺１／３・２／３）…… 50
第35図　ＳＤ203測量図（縮尺１／60）…… 51
第36図　ＳＤ203出土遺物実測図（縮尺１／３）…… 52

第37図　ＳＤ204測量図（縮尺１／160・１／20）…… 53
第38図　ＳＡ301測量図及び出土遺物実測図（縮尺１／100・１／３）…… 55
第39図　ＳＫ201測量図（縮尺１／60）…… 56
第40図　ＳＫ201出土遺物実測図（縮尺１／３）…… 57
第41図　ＳＫ203測量図及び出土遺物実測図（縮尺１／20・１／３）…… 57
第42図　ＳＸ201測量図（縮尺１／60）…… 58
第43図　ＳＸ201出土遺物実測図（縮尺１／３・１／２）…… 59
第44図　ＳＰ231測量図及び出土遺物実測図（縮尺１／10・１／３）…… 60
第45図　Ⅰ区包含層出土遺物実測図（縮尺１／３）…… 61
第46図　Ⅱ区包含層出土遺物実測図(1)（縮尺１／３）…… 62
第47図　Ⅱ区包含層出土遺物実測図(2)及びⅢ区包含層出土遺物実測図（縮尺１／２・１／３）…… 63
第48図　掘立201測量図（縮尺１／60）…… 64
第49図　遺構の半裁掘削状況 …… 74
第50図　遺構半裁後の曲物検出状況 …… 74
第51図　曲物Ａの梱包作業 …… 75
第52図　曲物Ｂ・Ｃの梱包状況 …… 75
第53図　曲物Ｂ・Ｃ搬入時 …… 77
第54図　曲物Ｂ分離後 …… 78
第55図　曲物Ｃ分離後 …… 78
第56図　曲物Ｂクリーニング後 …… 78
第57図　曲物Ｂケビキの様子 …… 79
第58図　曲物Ｃクリーニング後 …… 79
第59図　曲物Ｃケビキの様子 …… 79
第60図　曲物Ｃ変色部分 …… 80
第61図　養生 …… 80
第62図　徒手による切片作製 …… 82
第63図　曲物Ａ・Ｂ・Ｃの木材組織 …… 83

表　目　次

表１　船ヶ谷遺跡３次調査の土層対応関係 …… 9
表２　自然流路一覧 …… 65
表３　掘立柱建物址一覧
表４　井戸一覧
表５　溝一覧 …… 66
表６　柵列一覧
表７　土坑一覧
表８　性格不明遺構一覧
表９　ＳＲ201出土遺物観察表　土製品
表10　ＳＲ201出土遺物観察表　土製品 …… 67
表11　ＳＲ201出土遺物観察表　石製品
表12　ＳＲ301出土遺物観察表　石製品
表13　掘立204出土遺物観察表　土製品
表14　掘立205出土遺物観察表　土製品
表15　掘立206出土遺物観察表　土製品 …… 68
表16　ＳＥ201出土遺物観察表　土製品
表17　ＳＥ201出土遺物観察表　鉄製品
表18　ＳＥ302出土遺物観察表　土製品
表19　ＳＥ303出土遺物観察表　土製品 …… 69
表20　ＳＤ201出土遺物観察表　土製品
表21　ＳＤ201出土遺物観察表　鉄製品 …… 70
表22　ＳＤ202出土遺物観察表　土製品
表23　ＳＤ202出土遺物観察表　石製品
表24　ＳＤ203出土遺物観察表　土製品
表25　ＳＡ301出土遺物観察表　土製品
表26　ＳＫ201出土遺物観察表　土製品 …… 71
表27　ＳＫ203出土遺物観察表　土製品
表28　ＳＸ201出土遺物観察表　土製品
表29　ＳＸ201出土遺物観察表　鉄製品
表30　ＳＰ231出土遺物観察表　土製品 …… 72
表31　Ⅰ区包含層出土遺物観察表　土製品
表32　Ⅱ区包含層出土遺物観察表　土製品
表33　Ⅱ区包含層出土遺物観察表　鉄製品 …… 73
表34　Ⅲ区包含層出土遺物観察表　土製品

写真図版目次

巻頭図版	1	ＳＥ301の構造（西より）
図版１	1	調査地遠景（南西上空より）
	2	調査前（南東より）
図版２	1	Ⅰ区完掘状況（南東より）
	2	Ⅰ区西壁（南東より）
図版３	1	Ⅱ区完掘状況（南東より）
	2	ＳＲ201南北ベルト（西より）
図版４	1	ＳＲ201における中層・下層遺物出土状況（北より）
	2	ＳＲ201完掘状況（北東より）
図版５	1	Ⅱ区北半部における中世期の遺構完掘状況（南より）
	2	掘立204・炉（ＳＫ202）における土鍋出土状況（西より）
図版６	1	Ⅱ区北西部掘立柱建物群検出状況（西より）
	2	掘立206・土坑（ＳＫ204）における大甕出土状況（南より）
	3	掘立206を構成するＳＰ251の根石検出状況（北より）
図版７	1	掘立202・ＳＥ201・ＳＤ201・ＳＤ203の配置（南東より）
	2	ＳＥ201検出状況（南より）
図版８	1	ＳＥ201完掘状況（南より）
	2	ＳＥ201貿易陶磁器出土状況（西より）
	3	ＳＥ201の構造（東より）
図版９	1	ＳＤ201遺物出土状況（東より）
	2	ＳＤ201遺物出土状況（南西より）
	3	ＳＤ203遺物出土状況遠景（南西より）
	4	ＳＤ203遺物出土状況近景（南より）
図版10	1	ＳＸ201完掘状況（南より）
	2	ＳＰ231遺物出土状況（南東より）
	3	ＳＰ231炭化材検出状況（南より）
図版11	1	Ⅲ区完掘状況（南西より）
図版12	1	ＳＥ301曲物出土状況（南より）
	2	ＳＥ301完掘状況（西より）
	3	ＳＥ301断面土層（西より）
図版13	1	ＳＥ302完掘状況（西より）
	2	ＳＥ303完掘状況（東より）
	3	ＳＥ303断面土層（東より）
図版14	1	ＳＲ201出土遺物①
図版15	1	ＳＲ201出土遺物②・ＳＲ301出土遺物

図版16　1　掘立204出土遺物・ＳＫ202出土遺物・掘立205出土遺物
図版17　1　掘立206出土遺物・ＳＫ204出土遺物・ＳＥ201出土遺物
図版18　1　ＳＤ201出土遺物①
図版19　1　ＳＤ201出土遺物②・ＳＤ202出土遺物・ＳＤ203出土遺物
図版20　1　ＳＫ201出土遺物・ＳＫ203出土遺物・ＳＸ201出土遺物
図版21　1　ＳＰ231出土遺物
図版22　1　Ⅰ区包含層出土遺物・Ⅱ区包含層出土遺物・Ⅲ区包含層出土遺物

第Ⅰ章　はじめに

1．調査に至る経緯

1997（平成９）年11月18日、えひめ生活協同組合より、松山市安城寺町592-1外６筆における店舗建設にあたり、当該地の埋蔵文化財の確認願いが、松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課と呼称する）に提出された。

申請地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の「154　久枝遺物包含地」内にある。周知の遺跡として知られる申請地周辺は、これまでに発掘調査が数多く実施されている（第１・２図）。北西500mには、1975年に愛媛県教育委員会によって発掘調査が実施された船ヶ谷遺跡１次調査地（阪本1984）がある。自然流路からは流木とともに縄文時代晩期の土器、石器、編み物が出土している。

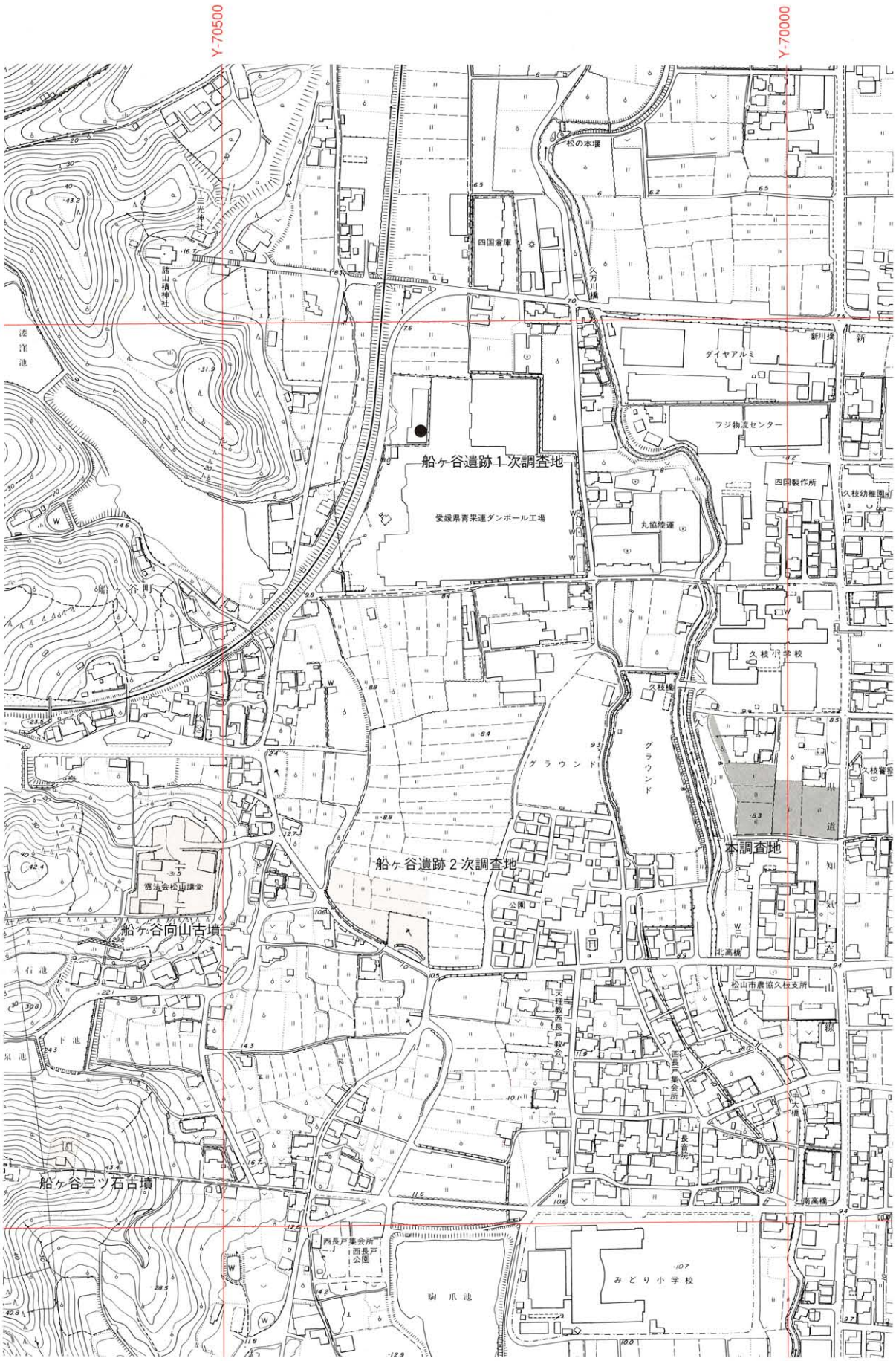
そこで、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲とその性格を確認する目的で、文化教育課では、1997（平成９）年12月10日～12日に試掘調査を実施した。その結果、遺構と遺物が確認され、縄文土器、須恵器、土師器が出土するとともに、自然流路、土坑、柱穴を検出した。

えひめ生活協同組合･文化教育課･（財）松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター（以下、埋蔵文化財センターと呼称する）の三者は、確認された遺跡に対して協議をおこない、土地開発で失われる遺構･遺物について記録保存のために発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、調査地及び周辺地域の集落構造の解明を主目的とし、埋蔵文化財センターが主体となり、えひめ生活協同組合の協力のもと、1998（平成10）年４月１日に開始した。

2．調査･刊行組織

本調査の調査･刊行組織は以下の通りである。（平成11年９月30日現在）

松山市教育委員会	教育長	池田尚郷
事務局	局長	團上和敬
	次長	森脇　將
	次長	赤星忠男
文化教育課	課長	松平泰定
（財）松山市生涯学習振興財団		
	理事長	中村時広
	事務局長	二宮正昌
	事務局次長	河口雄三
埋蔵文化財センター		
	所長	河口雄三
	次長	田所延行
	調査係長	田城武志
	調査主任	栗田正芳（文化教育課職員）
	調査担当	高尾和長　加島次郎　大西朋子



第1図　調査地位置図(1)（S＝1：5,000）

第Ⅱ章　遺跡の概要

1．遺跡の立地

本調査地は、松山市安城寺町に所在する。松山市の位置する松山平野（道後平野）は、四国北西部の高縄半島の南西基部に開けた複合扇状地性の平野である。平野の中央南よりを重信川が西流する。右岸側からは石手川・小野川・悪社川が、左岸側からは表川・拝志川・砥部川などの支流が合流し、重信川は伊予灘に注いでいる。平野の北西部には太山寺山塊が展開しており、この山塊の東には和気・堀江の海岸にかけて北北西に細長い地溝性の低地帯がのびている。太山寺山塊よりの低地帯には、久万川が蛇行しながら北流して堀江湾に注いでいる。調査地は久万川右岸の標高８ｍに立地する。

2．歴史的環境

本調査地周辺の歴史的環境を概観する（第１・２図）。資料が多く検出されるのが、縄文時代晩期後半段階である。船ヶ谷町の船ヶ谷遺跡（阪本1984）と太山寺町の大渕遺跡（栗田1989）からは、多量の突帯文土器が出土しており、当該期の土器編年を考える上で重要な資料として位置付けられている。大渕遺跡では沼沢地縁辺部に形成された遺物包含層から突帯文土器とともに、壺・石庖丁・石鎌が出土しており、当地周辺で水田遺構を含めた生産遺跡が展開するものと理解されている。

弥生時代以降、低地部に展開した集落遺跡は現在のところ確認例が少ない。弥生期の遺物が出土した遺跡は、低地部や低地部を東方に上がった河岸段丘上、丘陵緩斜面において散見される。低地部に立地する山越遺跡２次調査地（梅木・武正1993）では、弥生前期中葉の木製鍬と柳葉形磨製石鏃が出土した。丘陵緩斜面に立地する鶴が峠遺跡（西尾1986）は前期後半の土坑群が検出された遺跡で、土坑からは一括性の高い土器資料が出土している。また、地溝性の低地帯を挟んで東に展開する高縄山系の分岐丘陵南裾の微高地では、吉藤宮ノ谷遺跡（栗田1989）から後期の壺棺が出土している。これらの調査成果からは、弥生時代における居住域と墓域の主体は微高地上に、生産域は低地部に展開していたことがうかがえる。

古墳時代では、船ヶ谷遺跡２次調査地（高尾1999）では、前期～中期の自然流路が検出され、完形品を含む多量の土師器が出土している。さらに、近年調査された大渕遺跡３次調査地では、前期初頭の集落が確認され、竪穴住居址７棟、土坑２基、土器溜まり１基、自然流路１条が検出された。太山寺山塊南東端では５世紀末～６世紀初頭の古墳が調査されている。船ヶ谷向山古墳（池田・宮崎1989）では全長30ｍをこえる前方後円形で、墳丘に円筒埴輪と形象埴輪が伴う。西側括れ部で出土した埴輪と須恵器は墳丘上で実施された葬送儀礼を示す遺物群として理解できる。船ヶ谷三ツ石古墳（梅木・平岡1993）では、周溝内からは高坏・甕・短頸壺が良好な状態で出土し、供献土器に関わる資料になっている。太山寺山塊北端に近い勝岡町の高月山古墳群（宮崎1988）は、４世紀末～５世紀初頭の古墳群で、箱式石棺を内部主体とする小型長方墳で構成される。１号墳は、墓坑掘り方内から鉄剣・鍬先・鉄斧が、周溝内から底部穿孔の土師器壺と鉄鏃が出土し、当地域では古い段階の古墳として認識されている。また、山塊の南端には鶴が峠古墳群（西尾1986）、北山古墳群、東山古墳群が分布する。なお、太山寺山塊に展開する古墳に関連した集落は稀薄であり、集落と墳墓との関係は不明な部分が多い。

古代の遺構は、調査例が数少なく、座拝坂遺跡（松村他1993）で10世紀の土坑墓が確認されている

第２図　周辺遺跡分布図（Ｓ＝１：50,000）

にすぎない。中世の遺跡には、14～15世紀の姫原遺跡（相原1998）があり、溝や土坑が確認されているにとどまる。

このように、松山平野北西部における遺跡の展開を概観すると、縄文時代晩期～古墳時代後期の資料には土器の編年研究の基準資料として位置付けられるものが数多くあり、一方、古代以降は調査事例が少ないことが分かる。

参考文献

阪本安光　1984『松山市･船ヶ谷遺跡』愛媛県教育委員会

栗田茂敏　1989「大渕遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会

梅木謙一･武正良浩　1993「山越遺跡２次調査」『山越･久万ノ台の遺跡』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

西尾幸則　1986「鶴が峠遺跡」『愛媛県史資料編考古』愛媛県史編さん委員会

栗田茂敏　1989「吉藤宮ノ谷遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会

松村淳･梅木謙一･宮内慎一　1993「座拝坂遺跡の調査」『和気･堀江の遺跡』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

高尾和長　1998『船ヶ谷遺跡２次調査』松山市教育委員会･財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

栗田茂敏･吉岡和哉　1998『大渕遺跡３次調査地』現地説明会資料　松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

池田学･宮崎泰好　1989「船ヶ谷向山古墳」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会

梅木謙一･平岡直美　1993「船ヶ谷三ツ石古墳の調査」『和気･堀江の遺跡』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

宮崎泰好　1988『高月山古墳群調査報告書』松山市教育委員会

西尾幸則　1986「鶴が峠古墳群」『愛媛県史資料編考古』愛媛県史編さん委員会

相原浩二　1998「姫原遺跡の調査」『和気･堀江の遺跡Ⅱ』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

第Ⅲ章　調査の概要

1．調査の経過

船ヶ谷遺跡３次調査地の調査地、調査面積等は、以下の通りである。

調 査 地　松山市安城寺町592-1外６筆

調査面積　5,730㎡

調査期間　1998(平成10)年４月１日～1998(平成10)年８月31日〔屋外調査〕
1998(平成10)年９月１日～1999(平成11)年６月30日〔室内整理〕

調査委託　えひめ生活協同組合

発掘調査（屋外調査）は、平成10年４月１日から開始した。調査地は現在の久万川の下流右岸に隣接し、標高８ｍを測る。調査前は水田として利用されていた。調査の進行上、調査地をⅠ～Ⅲ区に区分した。試掘調査で得られた資料を基に、地表下20～30㎝までの現水田に関わる土層は、重機を用いて掘削し、廃土は場外に搬出した。掘削後は、人力により掘り下げをおこない、遺物の確認と遺構の検出を試みた。なお、Ⅰ区は、重機を用いて地表下1.5ｍまで掘削をおこない、土層の堆積を観察し、記録をおこなった。Ⅰ区の調査は５月29日に終えた。

Ⅱ区は、遺構の検出を５月21日までおこない、自然流路･掘立柱建物･溝･土坑･柵列･井戸･柱穴等多数の遺構を確認した。そして、土層壁面を検討した結果、遺構の多くは第Ⅵ層上面から掘り込まれたものであることが明らかとなった。遺構の調査は、配置図の作成と埋土の記録からとりかかり、その後は遺構の精査を進めた。７月下旬までに検出した遺構の帰属時期とその性格を把握することにつとめた。８月１日には『現地説明会』を開催した（第３図）。当日は天候にも恵まれ、100名を超える市民の参加があった。８月上旬は、実測の補足と写真撮影を実施し、18日にⅡ区の調査を終えた。

Ⅲ区の調査は、８月３日から本格的におこない、18日には遺構の検出、20日には遺構配置図の作成と埋土の確認をした。その後は、遺構の精査を進め、南北方向の柵列と素掘りの井戸を検出した。井戸は、遺存が良好で、三段の曲物が出土した。井戸の調査は、実測と写真撮影をおこない、最終的には曲物に簡易な保存処理を実施し、取り上げをおこなった。29日には出土遺物、記録図面･写真、発掘機材、道具の搬出をはじめ、屋外調査は31日に終了した。

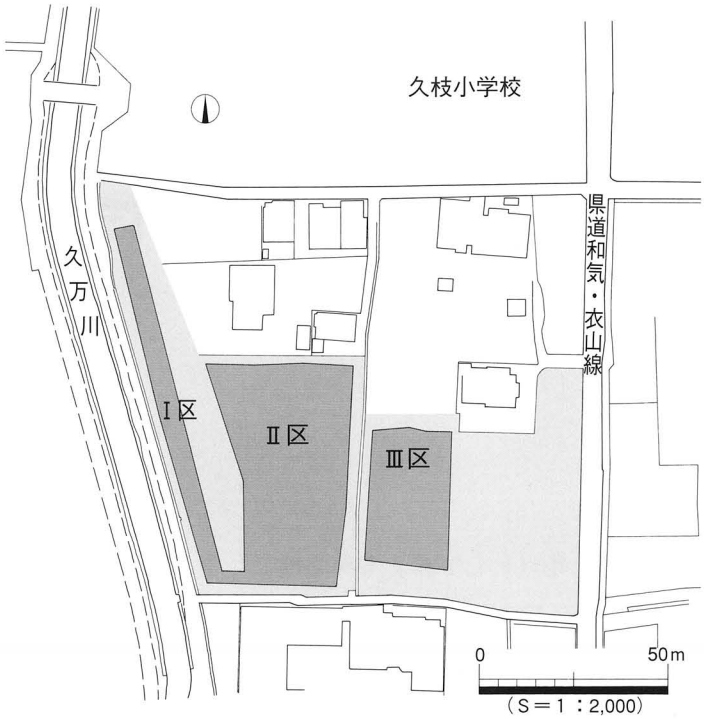
９月１日からは、埋蔵文化財センターにて報告書作成に向けての整理作業をする。まず、記録図面と写真の台帳作成からとりかかった。続いて、遺物の洗浄と注記をおこなった後、接合作業を進めた。11月からは、遺物実測図を作成する。平成11年１月からは、遺構･遺物の実測図を浄写し、並行して原稿執筆をする。４月には報告書の割り付けをおこない、遺物の写真を撮影する。

第３図　現地説明会

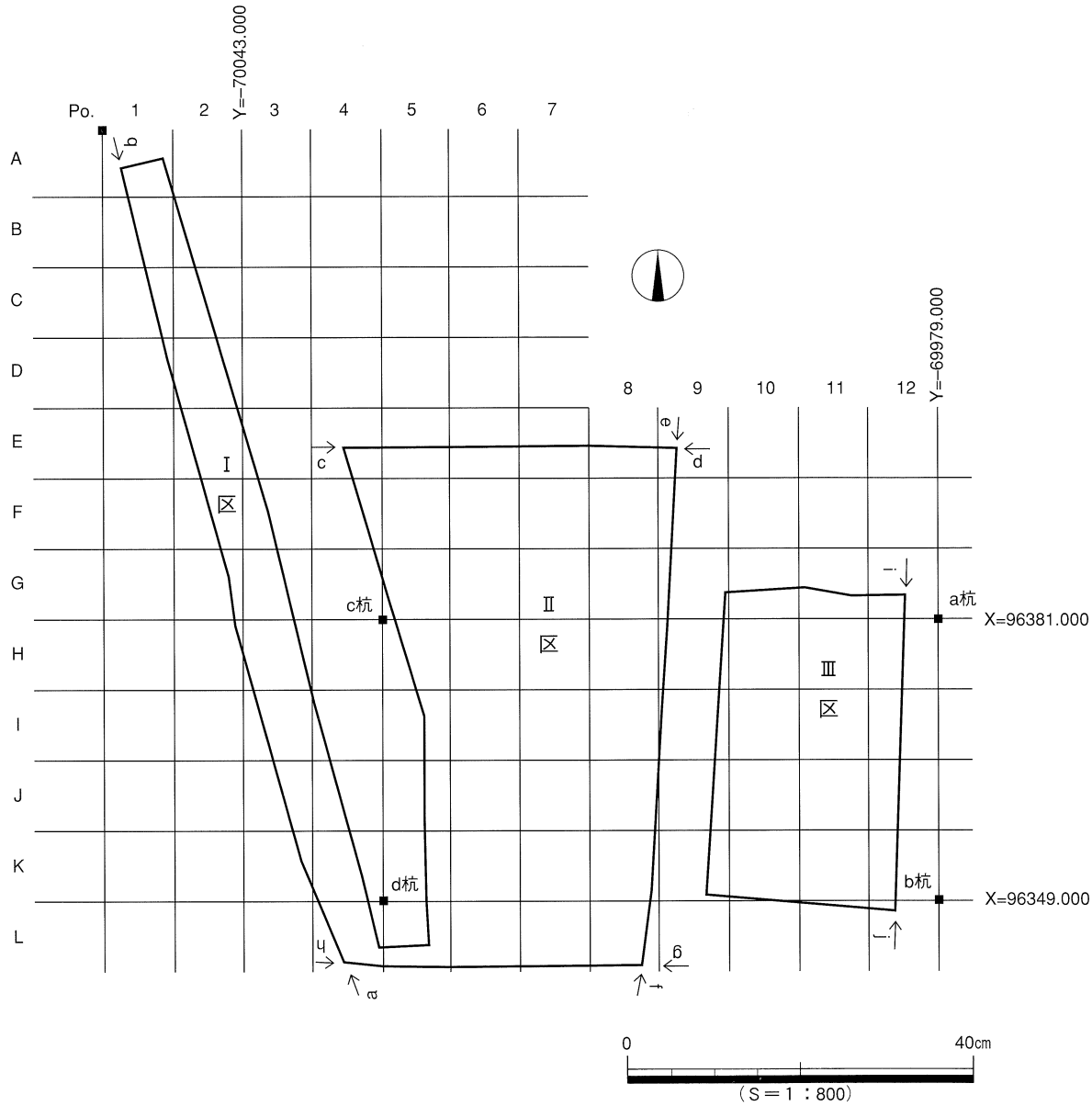
２．調査区の設定

今回の調査では表土の掘削後に、業者に委託して４点の４級基準点を設定した（第５図）。座標は以下のとおりである。

a杭　X＝96381.000　Y＝－69979.000　H＝8.662m
b杭　X＝96349.000　Y＝－69979.000　H＝8.074m
c杭　X＝96381.000　Y＝－70043.000　H＝8.068m
d杭　X＝96349.000　Y＝－70043.000　H＝8.071m



第４図　調査地位置図(2)



第５図　調査地区割り図

調査に際しては、座標点Ｐ0を基点として真北方向を軸として８ｍ方眼区画を設定した。

Ｐ0　　Ｘ＝96437.000　Ｙ＝－70027.000

方眼区画は北から南へ向かってＡ・Ｂ・Ｃ…Ｊ・Ｋ・Ｌ区、西から東へ向かって１・２・３…10・11・12と呼び、これらを組み合わせて呼称することにした。なお、調査の進行上、調査区は３つに区分し、西から東へＩ区・Ⅱ区・Ⅲ区とした。

3．層　位

調査地は、調査以前が東西に３枚続く水田であった。現地表面の標高は、Ⅰ区が北端で7.8m、Ⅱ区が8.4m、Ⅲ区が8.5mを測る。現地表面は東から西へ傾斜しており、比高差70cmを測る。

基本層位は第Ⅰ層から第XII層までを検出した。第Ⅰ層表土、第Ⅱ層粘質土と砂質土の互層、第Ⅲ層灰色粘土、第Ⅳ層粘土･砂質土･砂礫の互層、第Ⅴ層灰色土、第Ⅵ層黒褐色土、第Ⅶ層灰黄褐色粘質土、第Ⅷ層橙色砂質土、第Ⅸ層青灰色砂礫、第Ⅹ層明緑灰色粘質土、第XI層灰白色砂礫、第XII層灰白色砂質土である。第Ⅰ層は調査地全域にみられる。第Ⅱ層以下は調査地全域にみられず、調査区によって堆積に違いがある。第Ⅱ層はⅠ・Ⅱ区、第Ⅲ・Ⅳ層はⅠ区、第Ⅴ～Ⅷ・Ⅹ層はⅡ区・Ⅲ区、第Ⅸ・XI・XII層はⅡ区で検出した。なお、Ⅰ区では深くなったため、第Ⅳ層までの検出にとどめた。第Ⅴ・Ⅵ層は遺物包含層であり、遺物の遺存は第Ⅵ層が良い。遺構は第Ⅵ層上面で検出した。第Ⅵ層が堆積していないところでは、遺構は第Ⅶ層上面で検出した。各層は色調や粘性等で細分した。基本層位と各調査区における土層の堆積状況は以下のとおりである。

表１　船ヶ谷遺跡３次調査の土層対応関係

基本層位	Ⅰ区	Ⅱ区	Ⅲ区	色調	備考
第Ⅰ層	a層	a層	a層	黄灰色土	現代の水田耕作土
	b層	b層	b層	橙色土	現代の水田床土
	c層	c層	－	黄灰色土	現代の旧水田耕作土
	d層	－	－	真砂土	現代の造成土
	e層	－	－	黄灰色土	現代の造成土
第Ⅱ層	a～f層	a～e層	－	粘質土と砂質土の互層	自然流路か
第Ⅲ層	第Ⅲ層	－	－	灰色粘土	自然流路か
第Ⅳ層	a～f層	－	－	粘土・砂質土・砂礫の互層	自然流路か
第Ⅴ層	未	第Ⅴ層	第Ⅴ層	灰色土	中世の包含層
第Ⅵ層		第Ⅵ層	第Ⅵ層	黒褐色土	中世の包含層（遺構検出面）
第Ⅶ層		a～c層	a・b層	灰黄褐色粘質土	（遺構検出面）
第Ⅷ層		a～c層	第Ⅷ層	橙色砂質土	
第Ⅸ層	調	第Ⅸ層	－	青灰色砂礫層	
第Ⅹ層		第Ⅹ層	a・b層	明緑灰色粘質土	
第XI層		a・b層	－	灰白色砂礫層	
第XII層	査	第XII層	－	灰白色砂質土	

Ⅰ区（第６図、図版２）

調査区の北と南では堆積状況が大きく異なる。第Ⅰ～Ⅳ層が検出された。

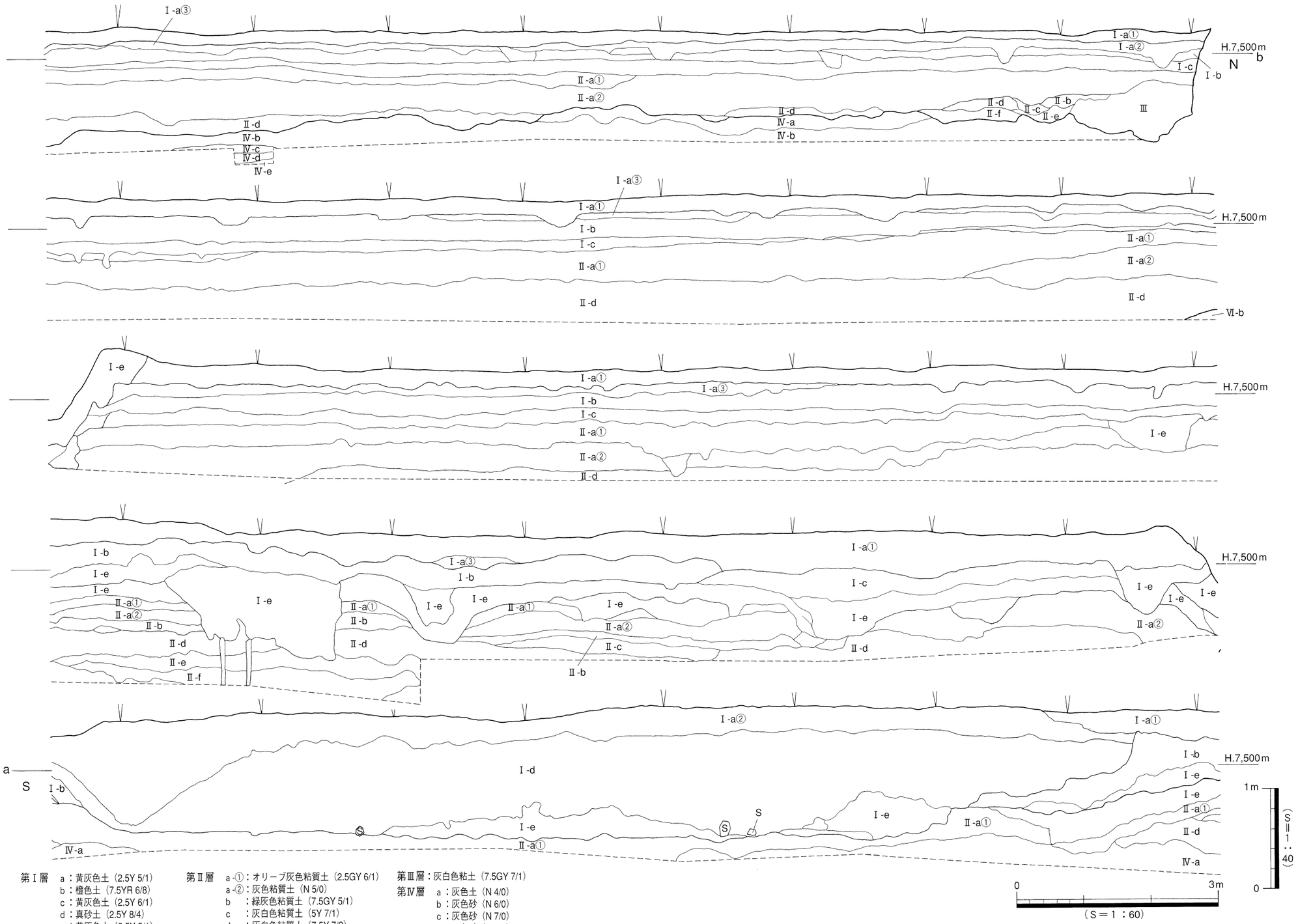
第Ⅰ層：五層に細分される。Ⅰ-ａ①層は黄灰色土（2.5Ｙ5/1）。全域に分布する。現代の水田耕作土である。層厚10～40cmを測る。Ⅰ-ａ②層は黄灰色土（2.5Ｙ4/1）である。調査区の北部と南部に分布する。現代の水田耕作土である。層厚10～30cmを測る。南部では局部的に厚く堆積しており、１ｍを測るところがある。Ⅰ-ａ③層は黄灰色土（2.5Ｙ4/1）。調査区北部に分布する。層厚10cmを測る。Ⅰ-ｂ層は橙色土（7.5ＹＲ6/8）である。全域に分布する。層厚15cmを測る。鉄分を多く含む。現代の水田にかかわる床土である。Ⅰ-ｃ層は黄灰色土（2.5Ｙ6/1）。調査区北半部に分布する。層厚10～30cmを測る。硬くしまっており、下部には黒色の細ブロックが散在する。旧耕作土と考えられる。Ⅰ-ｄ層は真砂土（2.5Ｙ8/4）である。調査区の南半部に分布する。層厚80～100cmを測る。現代の水田を形成する際の造成土である。Ⅰ-ｅ層は黄灰色土（2.5Ｙ5/1）である。コンクリートブロックや大型の角礫を多量に含む。調査区の南半部に分布する。層厚20～80cmを測る。造成土と考えられる。

第Ⅱ層：六層に細分される。Ⅱ-ａ①層はオリーブ灰色粘質土（2.5ＧＹ6/1）。全域に分布する。層厚10～20cmを測る。Ⅱ-ａ②層は灰色粘質土（N5/0）。１～２cm大の角がとれた礫と、0.2～0.5cm大の角がある砕礫を含む。層厚5～30cmを測る。縦方向に鉄分の帯が認められる。中世末期の鍋片が出土している。Ⅱ-ｂ層は緑灰色粘質土（7.5ＧＹ5/1）。大変硬くしまっている。Ⅱ-ｂ層以下の堆積は安定しておらず、局部的に堆積する。Ⅱ-ｃ層は灰白色粘質土（5Ｙ7/1）。Ⅱ-ｄ層は灰白色粘質土（7.5Ｙ7/2）。１～２cmの角がとれた礫を少量含む。Ⅱ-ｅ層はオリーブ色砂質土（2.5ＧＹ6/1）。土にはややしまりがある。Ⅱ-ｆ層はオリーブ灰色砂質土（2.5ＧＹ6/1）。柔らかく、局部的に灰オリーブ色粘質土（7.5Ｙ5/2）が認められる。

第Ⅲ層：灰白色粘土（7.5ＧＹ7/1）。調査区北端に分布する。大変硬くしまっており、きめ細かい。縦方向に鉄分の帯が走る。層厚15～30cmを測る。

第Ⅳ層：五層に細分される。遺物を少量含むが、器面に磨滅が認められる。Ⅳ-ａ層は灰色土（N4/0）である。層厚10cmを測る。調査区の北半部に分布する。Ⅵ-ｂ層は灰色砂（N6/0）である。よくしまっている。北から南へ堆積している。土師器の碗片が出土した。Ⅳ-ｃ層以下は深掘りをおこなった所で観察された土層である。Ⅳ-ｃ層は灰色砂（N7/0）である。下部には灰色粘質土（N5/0）が層厚10cmで堆積している。Ⅳ-ｄ層は灰色砂（N3/0）である。Ⅳ-ｅ層は青灰色砂礫（５Ｂ5/1）である。１mmの砂、５mmの礫が混在する。弥生土器の高坏が出土した。Ⅳ-ｆ層以下は、深くて危険のため未調査である。

調査区西壁中央部ではコンクリート塀を構築するための掘り方が確認されている。この掘り方から西側で造成土（Ⅰ-ｄ・Ⅰ-ｅ層）がみられる。



第Ⅰ層　a：黄灰色土（2.5Y 5/1）
b：橙色土（7.5YR 6/8）
c：黄灰色土（2.5Y 6/1）
d：真砂土（2.5Y 8/4）
e：黄灰色土（2.5Y 5/1）
コンクリートブロック・
大型の角礫を多量に含む。

第Ⅱ層　a-①：オリーブ灰色粘質土（2.5GY 6/1）
a-②：灰色粘質土（N 5/0）
b　：緑灰色粘質土（7.5GY 5/1）
c　：灰白色粘質土（5Y 7/1）
d　：灰白色粘質土（7.5Y 7/2）
e　：オリーブ色砂質土（2.5GY 6/1）
f　：オリーブ灰色砂質土（2.5GY 6/1）

第Ⅲ層：灰白色粘土（7.5GY 7/1）

第Ⅳ層　a：灰色土（N 4/0）
b：灰色砂（N 6/0）
c：灰色砂（N 7/0）
d：灰色砂（N 3/0）
e：青灰色砂礫（5B 5/1）

第６図　Ⅰ区西壁土層図

Ⅱ区（第７・８図）

第Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ～Ⅻ層が検出された。

第Ⅰ層：Ⅰ層は三層に大別される。さらにⅠ-ａ層は三層に細分される。

Ⅰ-ａ層は黄灰色土（2.5Ｙ5/1）である。色調と粘性によって①～③層に分けられる。Ⅰ-ａ①層は調査区の南に分布する。層厚10～15cmを測る。②層は全域に分布する。層厚５～25cmを測る。Ⅰ-ａ③層も全域に分布する。層厚５～15cmを測る。いずれも現代の水田にかかわる耕作土である。Ⅰ-ｂ層は橙色土（7.5ＹＲ6/8）である。調査区東部に分布する。層厚10～15cmを測る。鉄分を多く含む。現代の水田の床土である。Ⅰ-ｃ層は黄灰色土（2.5Ｙ6/1）である。調査区の南西部に分布する。層厚５～20cmを測る。

第Ⅱ層：調査区南西部に分布する。Ⅱ-ａ①からⅡ-ｅ層は、層厚５～15cmを測り、東から西へ傾斜して堆積する。Ⅱ-ｆ層は層厚10～15cmを測る。

第Ⅴ層：灰色土（7.5Ｙ6/1）。調査区北東部に分布する。層厚５cmを測る。土は硬くしまっている。中世段階の遺物包含層である。土師器･須恵器･鉄器が出土した。

第Ⅵ層：黒褐色土（7.5ＹＲ3/1）。調査区北東部に分布する。層厚10～20cmを測る。中世の遺物包含層である。土師器･須恵器･瓦器･鉄器が出土した。本層上面で遺構を検出した。本層が分布しない範囲においては、遺構はⅦ層上面で検出した。

第Ⅶ層：三層に分層される。Ⅶ-ａ層は灰黄褐色粘質土（10ＹＲ6/2）である。調査区の広い範囲に分布する。非常に硬くガチガチした質感をもつ。層厚10～30cmを測る。Ⅶ-ｂ層は灰黄褐色砂質土（10ＹＲ6/2）である。粒が細かい砂である。調査区東半部に分布する。層厚５～20cmを測る。Ⅶ-ｃ層は灰黄褐色粘質土（10ＹＲ6/2）である。調査区の広範囲に分布する。ａ層より柔らかい。層厚30cmを測る。Ⅶ-ａ層上面は、北東から南西に向けて傾斜しており、比高差80cmを測る。

第Ⅷ層：三層に分層される。第Ⅷ-ａ層が橙色砂質土（7.5ＹＲ6/8）。調査区北西部に分布する。鉄分の細ブロックを多量に含み、ガチガチした質感をもつ。層厚10～15cmを測る。局部的に色調が異なるが、灰白色砂質土（５Ｙ7/2）、灰白色粗砂（Ｎ8/0）がみられる。前者を第Ⅷ-ａ①層、後者を第Ⅷ-ａ②層と呼称する。この二層はＳＥ201の調査時に確認された堆積層である。Ⅷ-ｂ③層は橙色砂質土で鉄分の細ブロックは含まない。調査区北半部に帯状に分布する。断面では台形状に堆積している。層厚30～40cmを測る。Ⅷ-ｃ層は青灰色砂質土（５Ｂ5/1）。層厚20cmを測る。

第Ⅸ層：青灰色砂礫層（５Ｂ5/1）。調査区のほぼ全域に分布するものと考えられる。調査区東壁で、大きく盛り上がって堆積する。硬くしまっており、角がとれた小さい礫と砂によって構成される。層厚40～70cmを測る。

第Ⅹ層：明緑灰色粘質土（7.5ＧＹ7/1）。非常に硬くしまっている。局部的に色調が異なり、青灰色（５ＢＧ6/1･10ＢＧ5/1）、灰オリーブ色（５Ｙ6/2）を呈する土層がみられる。これらの層の下（第Ⅹ-ｂ層）は、青灰色粘土（10ＢＧ5/1）である。ＳＥ201の調査時に検出した（第25図、図版８）。地下の水脈に関連する層であり、湧水がみられる。

第Ⅺ層：ＳＥ201の調査時に検出した。二層に分層される。第Ⅺ-ａ層は灰白色砂礫層（Ｎ8/0）である。0.5～１cm大の角のとれた丸い礫を多量に含む比較的しまりのある砂礫層である。

層厚25cmを測る。第XI-b層は灰白色粗砂層（N8/0）である。層厚10～30cmを測る。

第XII層：ＳＥ201の調査時に検出した。灰白色砂質土（N8/0）である。比較的しまりがある。鉄分を多量に含む層厚１～２cmの層が四層認められる。

第VII層以下では遺物の出土はない。

Ⅲ区（第８図）

第Ⅰ・Ⅴ～VII層が検出された。

第Ⅰ層：二層に分層される。Ⅰ-a層は黄灰色土（2.5Y5/1）。調査区の全域に分布する。層厚10～20cmを測る。現代の水田にかかわる耕作土である。Ⅰ-b層は橙色土（7.5ＹＲ6/8）。調査区の全域に分布する。層厚5～20cmを測る。鉄分を多く含む。現代の水田の床土である。

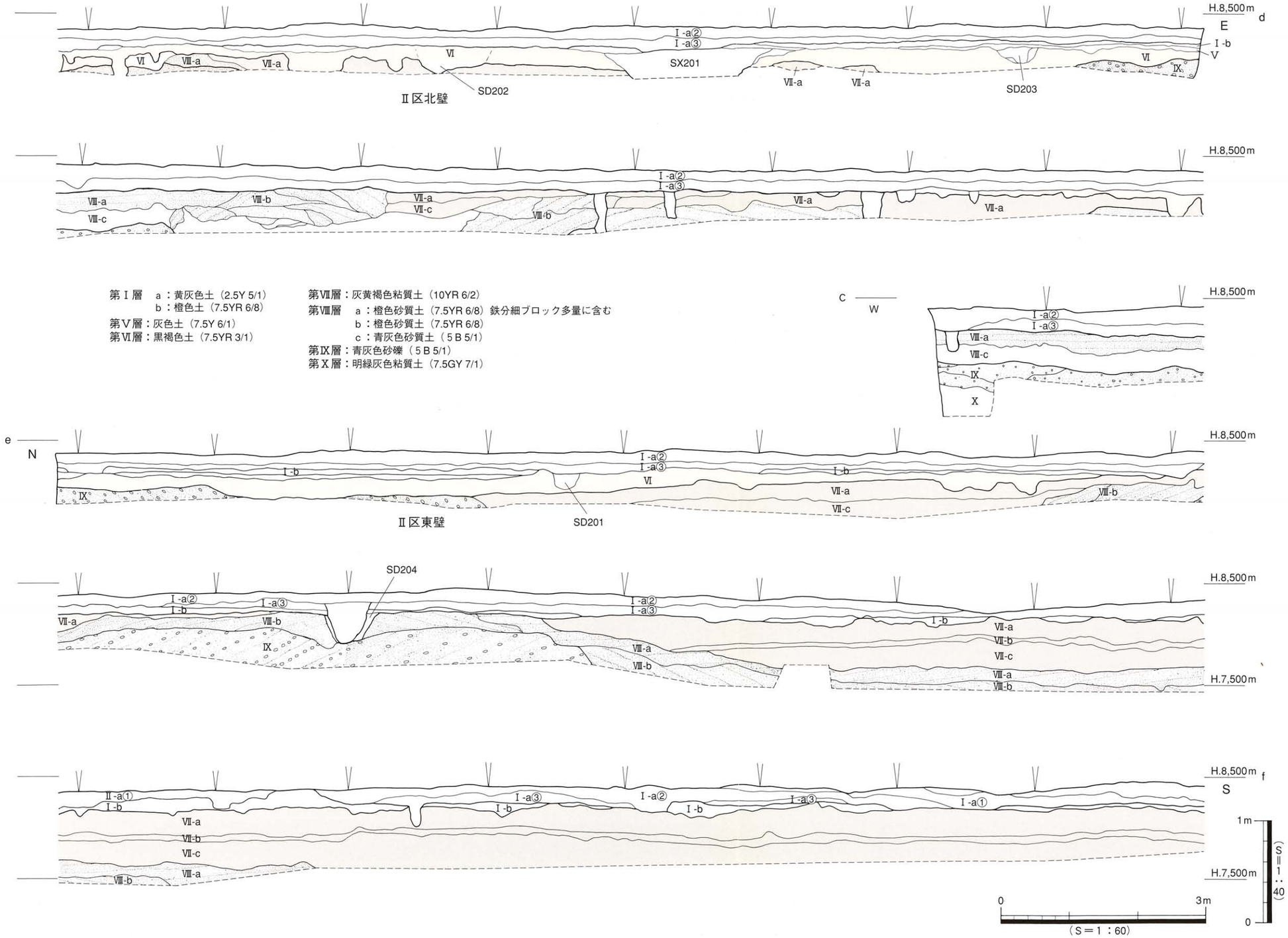
第Ⅴ層：灰色土（7.5Y6/1）。調査区の南半部に分布する。層厚5～25cmを測る。中世の遺物包含層である。土師器･須恵器などが少量出土した。

第VI層：黒褐色土（7.5Y3/1）。調査区の北西部と東部に局部的に分布する。層厚10～50cmを測る。中世段階の遺物包含層である。土師器･須恵器などが少量出土した。

第VII層：三層に分層される。VII-a層は灰黄褐色粘質土（10ＹＲ6/2）である。調査区の全域に分布する。非常に硬くガチガチした質感をもつ。層厚20～60cmを測る。VII-b層は灰黄褐色砂質土（10ＹＲ6/2）である。やや硬さに欠ける。層厚20～40cmを測る。VII-c層は灰黄褐色粘質土（10ＹＲ6/2）である。a層に比べ柔らかい。層厚30cmを測る。VII-a層上面は、北から南へ向けて緩傾斜しており、比高差40cmを測る。

第VIII層：灰白色粘質土（N8/0）。層厚30cmを測る。ＳＥ301の調査時に検出した（第26図）。

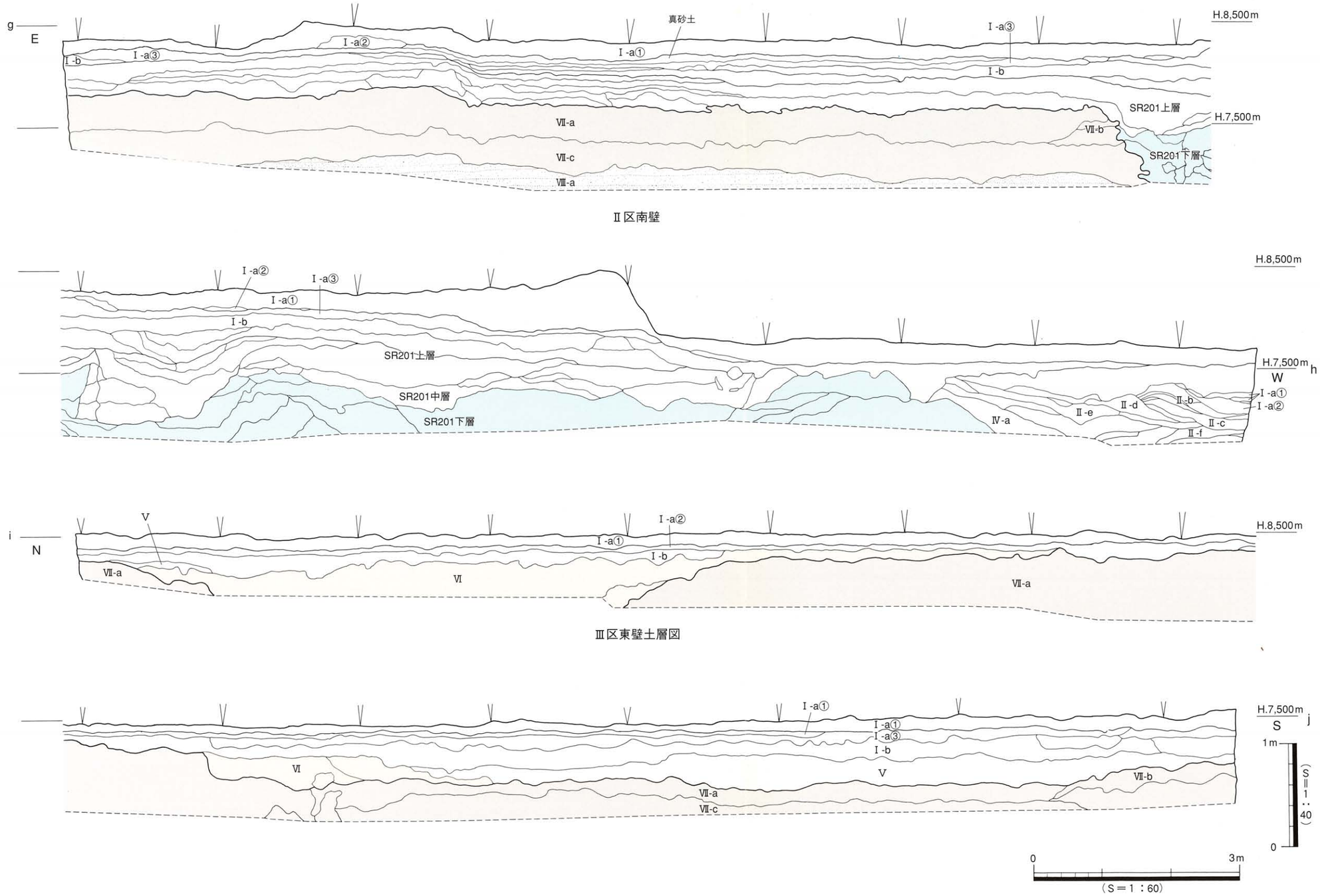
第Ⅹ層：二層に分層される。第Ⅹ-a層は灰オリーブ粘質土（５Y6/2）である。非常に硬くしまっている。層厚10～30cmを測る。第Ⅹ-b層は青灰色粘土（10ＢＧ5/1）である。ＳＥ301の調査時に検出した（第26図、巻頭図版１）。



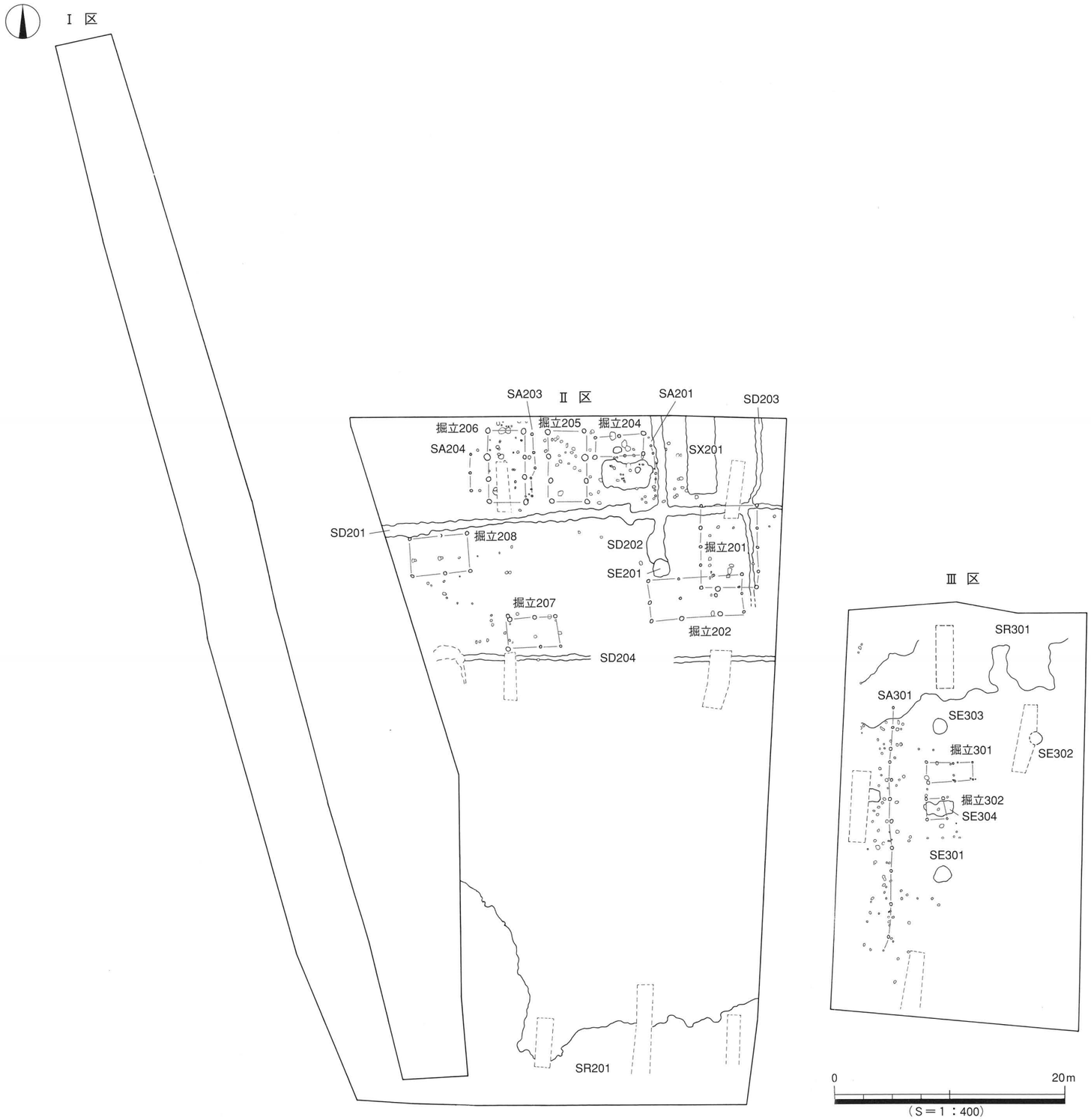
第Ⅰ層　a：黄灰色土（2.5Y 5/1）
　　b：橙色土（7.5YR 6/8）
第Ⅴ層：灰色土（7.5Y 6/1）
第Ⅵ層：黒褐色土（7.5YR 3/1）

第Ⅶ層：灰黄褐色粘質土（10YR 6/2）
第Ⅷ層　a：橙色砂質土（7.5YR 6/8）鉄分細ブロック多量に含む
　　b：橙色砂質土（7.5YR 6/8）
　　c：青灰色砂質土（5B 5/1）
第Ⅸ層：青灰色砂礫（5B 5/1）
第Ⅹ層：明緑灰色粘質土（7.5GY 7/1）

第７図　Ⅱ区北壁・東壁土層図



第8図　Ⅱ区南壁・Ⅲ区東壁土層図


Ⅰ区
Ⅱ区
Ⅲ区
SA203
SA201
SD203
掘立206
掘立205
掘立204
SA204
SX201
SD201
掘立208
SD202
掘立201
SE201
掘立207
掘立202
SD204
SR201
SR301
SA301
SE303
掘立301
SE302
掘立302
SE304
SE301
0
20m
（S＝1：400）

第９図　遺構配置図

4．遺構と遺物

今次調査では、縄文時代晩期～弥生後期と中世の遺物・遺構を検出した（第９図）。遺構の種別と検出数は次のとおりである。

Ⅱ区検出遺構

縄文晩期～弥生後期	流路	（ＳＲ201）	1
中　　世	掘立柱建物	（掘立202・204～208）	6
	溝	（ＳＤ201～204）	4
	井戸	（ＳＥ201）	1
	柵列	（ＳＡ201～204）	4
	土坑	（ＳＫ201～204）	4
	性格不明遺構	（ＳＸ201）	1
	小穴	（ＳＰ１～257）	257
近世以降	掘立柱建物	（掘立201）	1

Ⅲ区検出遺構

縄文晩期	流路	（ＳＲ301）	1
中　　世	掘立柱建物	（掘立301・302）	2
	井戸	（ＳＥ301～304）	4
	柵列	（ＳＡ301）	1
	小穴	（ＳＰ300～430）	131

出土遺物は、包含層と遺構出土の遺物とに大別される。

包含層出土遺物は、主として第Ⅴ層と第Ⅵ層から出土した。第Ⅵ層出土の遺物は13世紀後半～14世紀前半に帰属するものが多い。

遺構出土の遺物は、縄文時代晩期・弥生時代後期・中世の三時期に大別され、中世の遺物が多くを占める。縄文時代晩期の遺物には、深鉢、浅鉢、打製石鏃、礫石錘などがあり、弥生後期の遺物には、甕、壺、鉢などがある。中世の遺物は、14世紀前半に帰属し、土師器のⅢ・坏・土鍋・三足付羽釜、亀山焼の大甕、東播系須恵器のこね鉢、龍泉窯系の青磁などがある。中世の遺物は、Ⅱ区の北半部で検出されたＳＤ201から出土したものが多い。なお、Ⅲ区で検出されたＳＥ301からは曲物が出土した。

第Ⅳ章　縄文時代～弥生時代の記録

1．自然流路

ＳＲ201（第10図、図版３・４）

Ⅱ区南端部のＪ５～Ｌ８区に位置する。検出流路の北岸部を検出し、規模は検出長23.5m、検出幅19.5m、深さ0.2～1.1mを測る。南岸部は調査区外へ続く。流路は緩やかに蛇行し、埋土は３層に大きく分層される。上層は黒褐色粘質土（7.5ＹＲ3/1、10ＹＲ1.7/1、10ＹＲ3/1）である。層厚20～90cmを測り、炭化物粒を多量に含む土層である。中層は灰白色砂質土（10ＹＲ7/1）である。５mm大の砕礫を含みしまりがある。本層はＬ５区を中心に分布し、分布範囲は長さ５m、幅３～4.5m、深さ５～20cmである。下層は黒褐色粘質土（5ＹＲ2/1）である。土にしまりがあり、層厚20～60cmを測る。

遺物は、中層と下層で出土している。中層からは弥生土器が出土し、器種は甕形土器（以下、「形土器」は略する）、壺、鉢がある。下層からは縄文土器と打製石器が出土した。縄文土器はＬ６区北西部に集中しており、多量の炭化物粒とともに出土した。土器には深鉢と浅鉢があり、石器には石鏃とスクレイパーがある。

出土遺物（第11･12図、図版14･15）

１～５は縄文土器である。１・２は深鉢で、胴部で屈曲し口縁部が外反する形態である。１は口唇に接して刻目突帯文が付けられる。３～５は浅鉢で、３と４は同一個体の可能性がある。口縁部が二重で屈曲し、口唇部が内面に肥厚する。内外面はいずれも丁寧なミガキが施される。

６～11は弥生土器である。６～８は甕で、６・７は口縁部を欠き、６はミニチュアの可能性がある。９･10は壺である。９は複合口縁壺の口縁部で、一次と二次の口縁接合部は「コ」字状の接合によって仕上げられ、二次口縁部外面には波状文が組み合う。11は鉢である。

12･13はサヌカイト製の石器である。12は平基無茎式の打製石鏃で、細部調整は両面のほぼ全面に及ぶ。長さ21mm、幅14mm、厚さ３mm、重量0.63ｇである。13は横長剥片を素材としたスクレイパーである。粗い細部調整により周縁に刃部が作出される。

時期：下層出土遺物が縄文時代晩期後半、中層出土遺物が弥生時代後期後半に比定される。よって、本遺構は縄文時代晩期後半～弥生時代後期後半に機能していたと判断される。ＳＲをⅣ-ａ層が覆うことから、最終的に埋没したのが中世段階と考えられる。

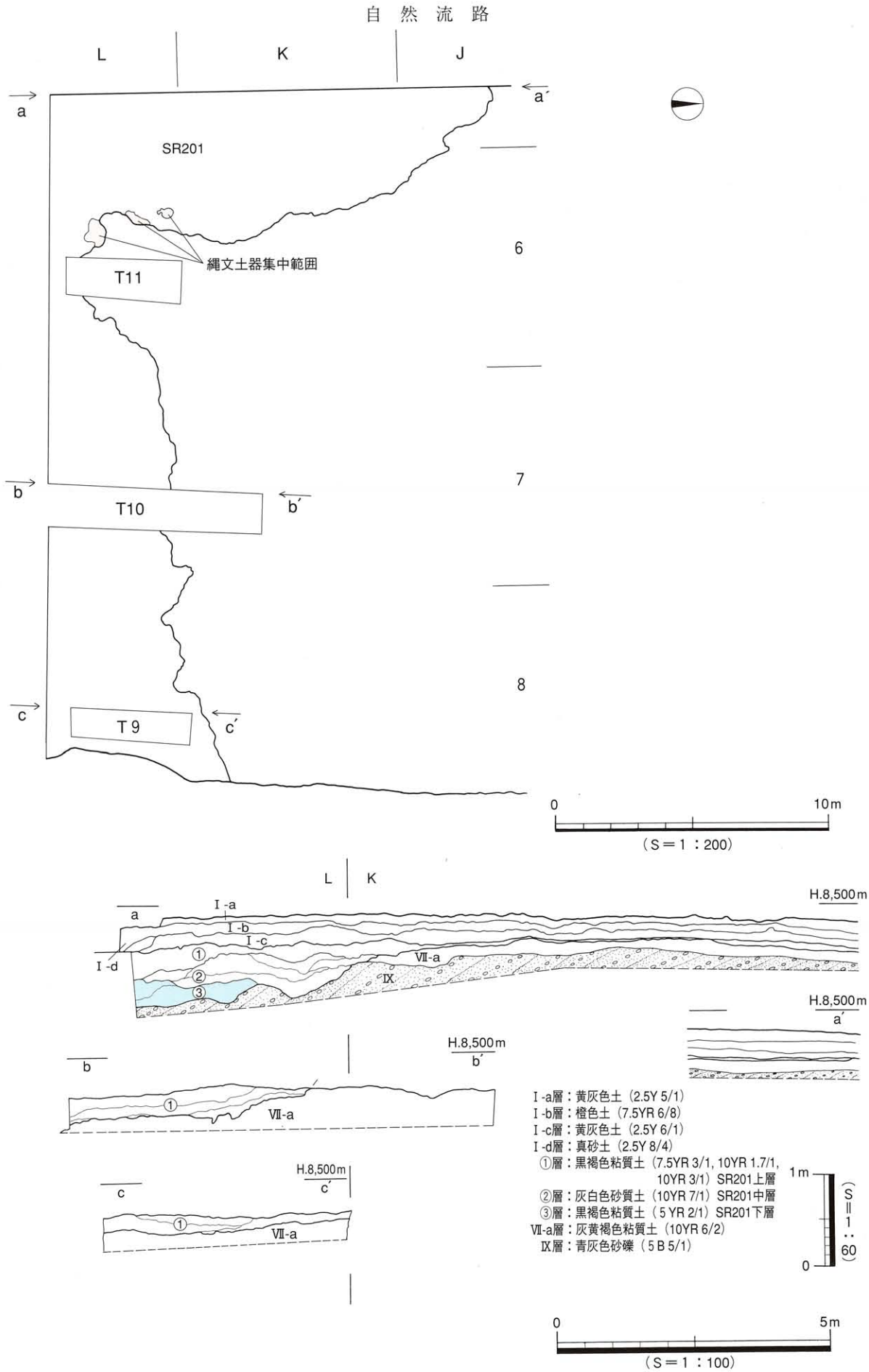
ＳＲ301（第13図、図版11）

Ⅲ区北半部のＧ11～Ｈ12区に位置する。北東部では蛇行しているため、流路幅は一定ではない。流路は後世の削平により途切れるが、Ⅱ区に続くものと想定される。規模は、検出長10m、検出幅4.5m、深さ20cmを測る。流路の底は緩やかに北東から南西に向かって傾斜し、北東部と南西部との比高差は20cmを測る。埋土は黒褐色粘質土（10ＹＲ3/1）である。先述したＳＲ201埋土の下層に対応する。

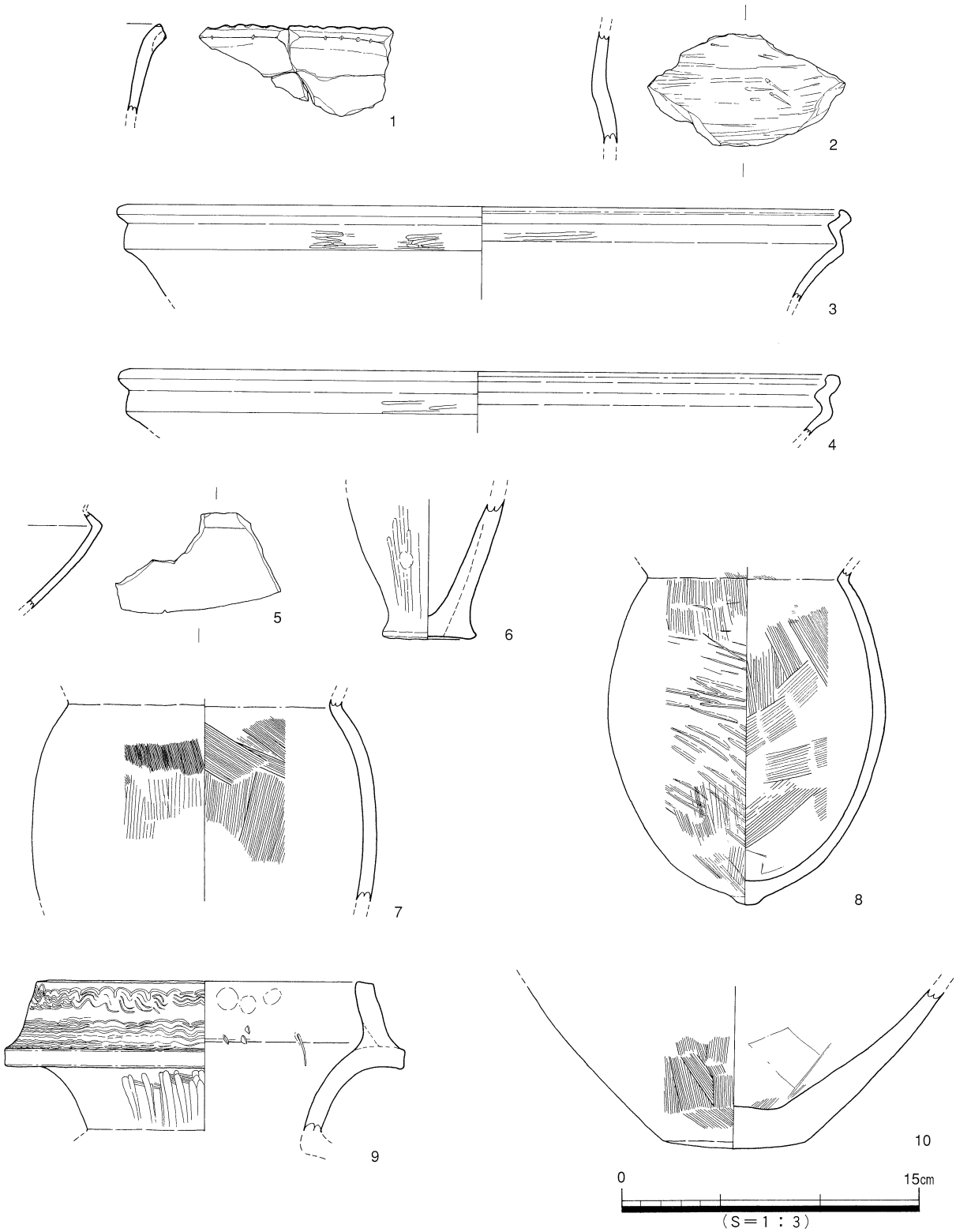
遺物は縄文土器、打製石鏃、石核、礫石錘、敲石がある。このうち、縄文土器は砕片のため図化できない。

出土遺物（第14図、図版15）

14は打製石鏃。縦長剥片を素材とした長さ50mmの大型品である。基部の抉りは浅く、長さの９％を



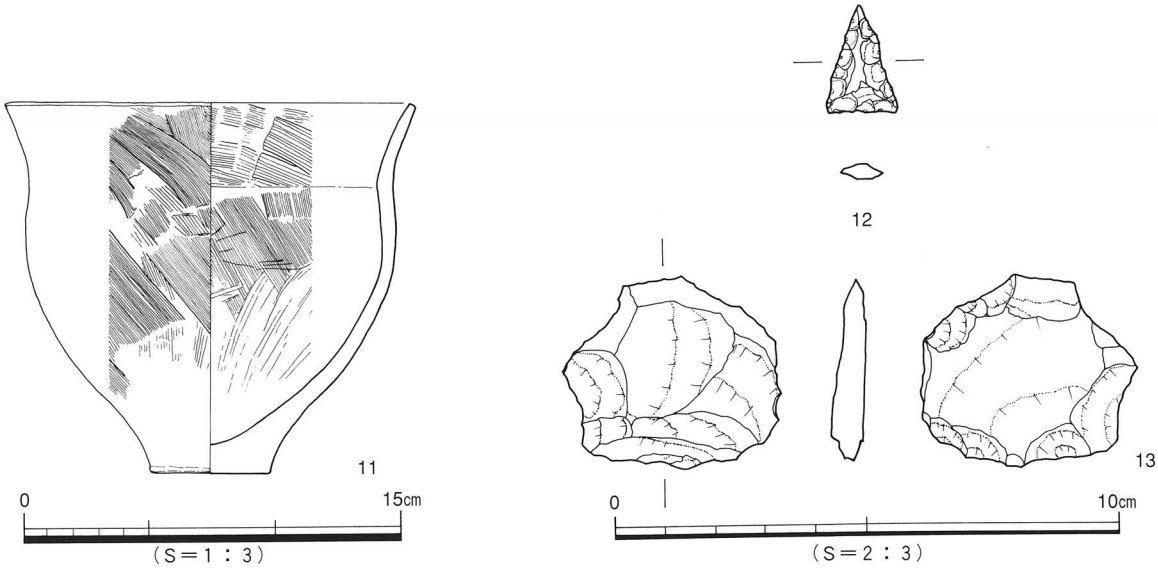
第10図　SR201測量図



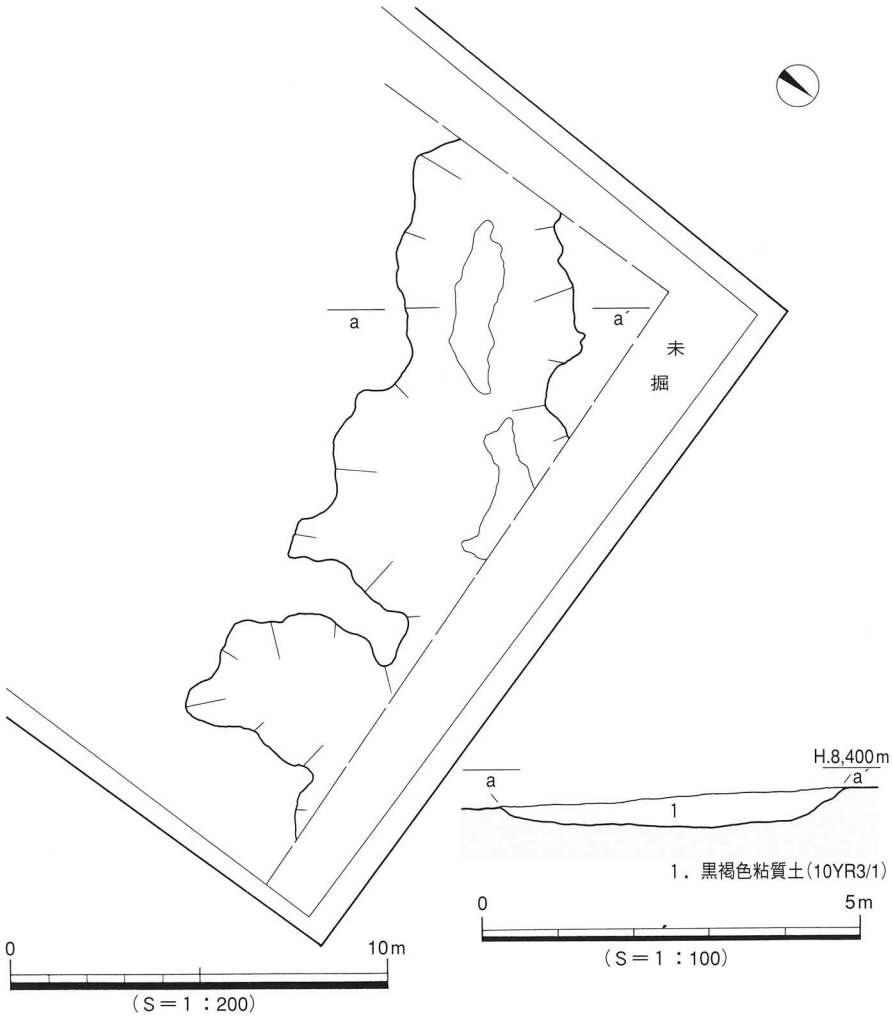
第11図　SR201出土遺物実測図(1)

占める凹基無茎式鏃である。側辺は先端部に向かって屈曲しており、抉りを有す五角形鏃状を呈している。サヌカイト製。15は大型の石核である。図示した面は剥片剥離が進行している。サヌカイト製。16は結晶片岩製の礫石錘である。長軸の両端には紐掛けのための抉りがみられる。17は敲石である。

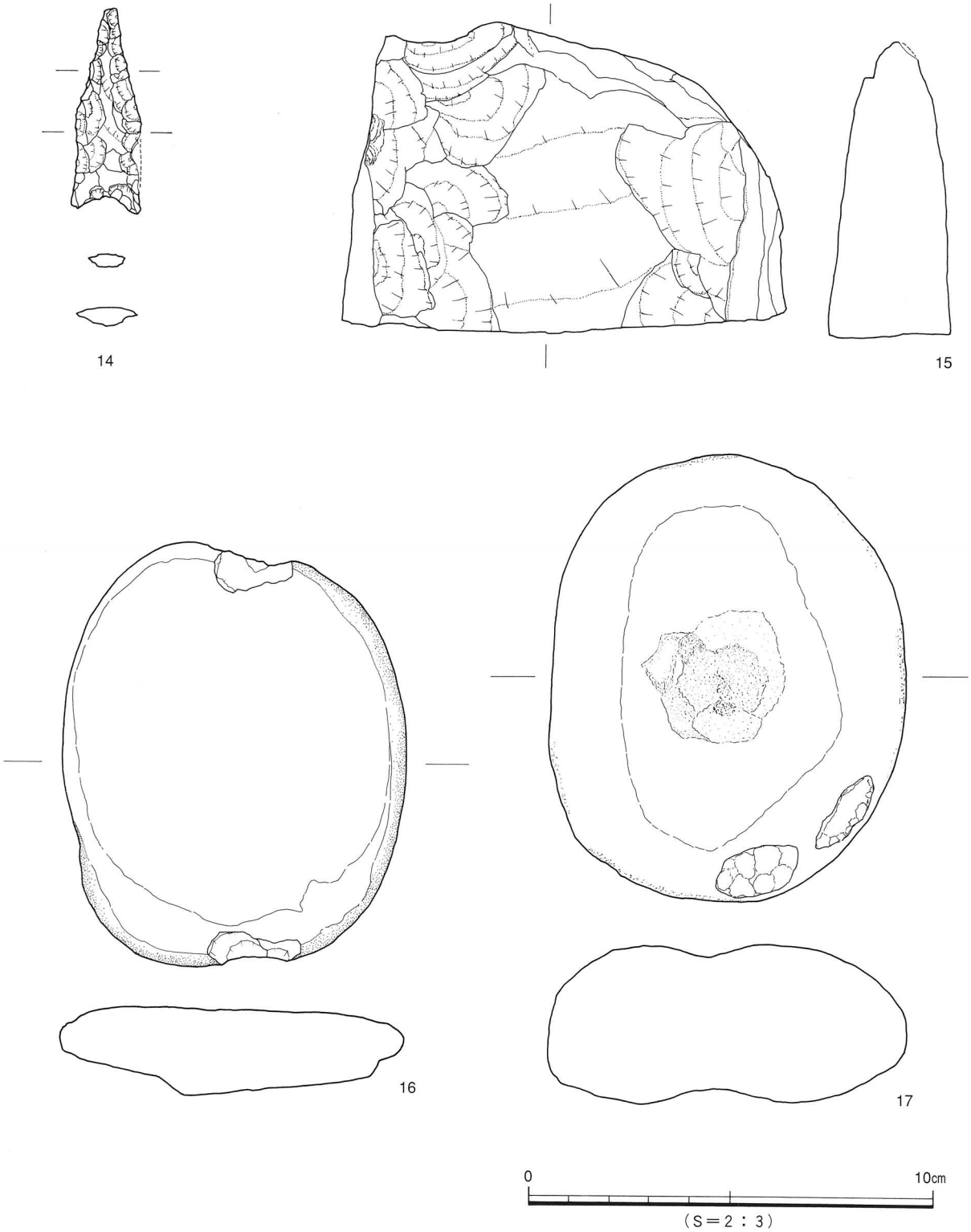
時期：埋土と出土遺物から縄文時代晩期後半である。



第12図　SR201出土遺物実測図(2)



第13図　SR301測量図



第14図　SR301出土遺物実測図

第Ⅴ章　中世の記録

1．掘立柱建物址

掘立202（第15図、図版7）

Ⅱ区北東部のＧ７・８区に位置する。梁間２間、桁行３間の東西に細長い総柱建物である。柱穴はＳＰ191～205の12基で構成される。建物規模は、梁間の全長が3.1～3.3m、桁行の全長が7.9mである。柱穴の平面形態は円形と不整円形である。規模は径18～40cm、深さ４～32cmを測る。埋土は褐灰色土（10ＹＲ6/1）である。各柱穴で柱痕跡を確認することができた。柱痕跡は直径10～15cmを測る。柱痕跡の埋土は暗褐色土（10ＹＲ3/3）である。ＳＰ191～193は位置関係から、掘立201に伴う柱穴と判断した。

遺物はＳＰ199の柱痕から土師器の砕片、ＳＰ204の柱痕跡から土師器の皿あるいは坏の砕片が出土した。いずれも砕片のため図化することはできない。

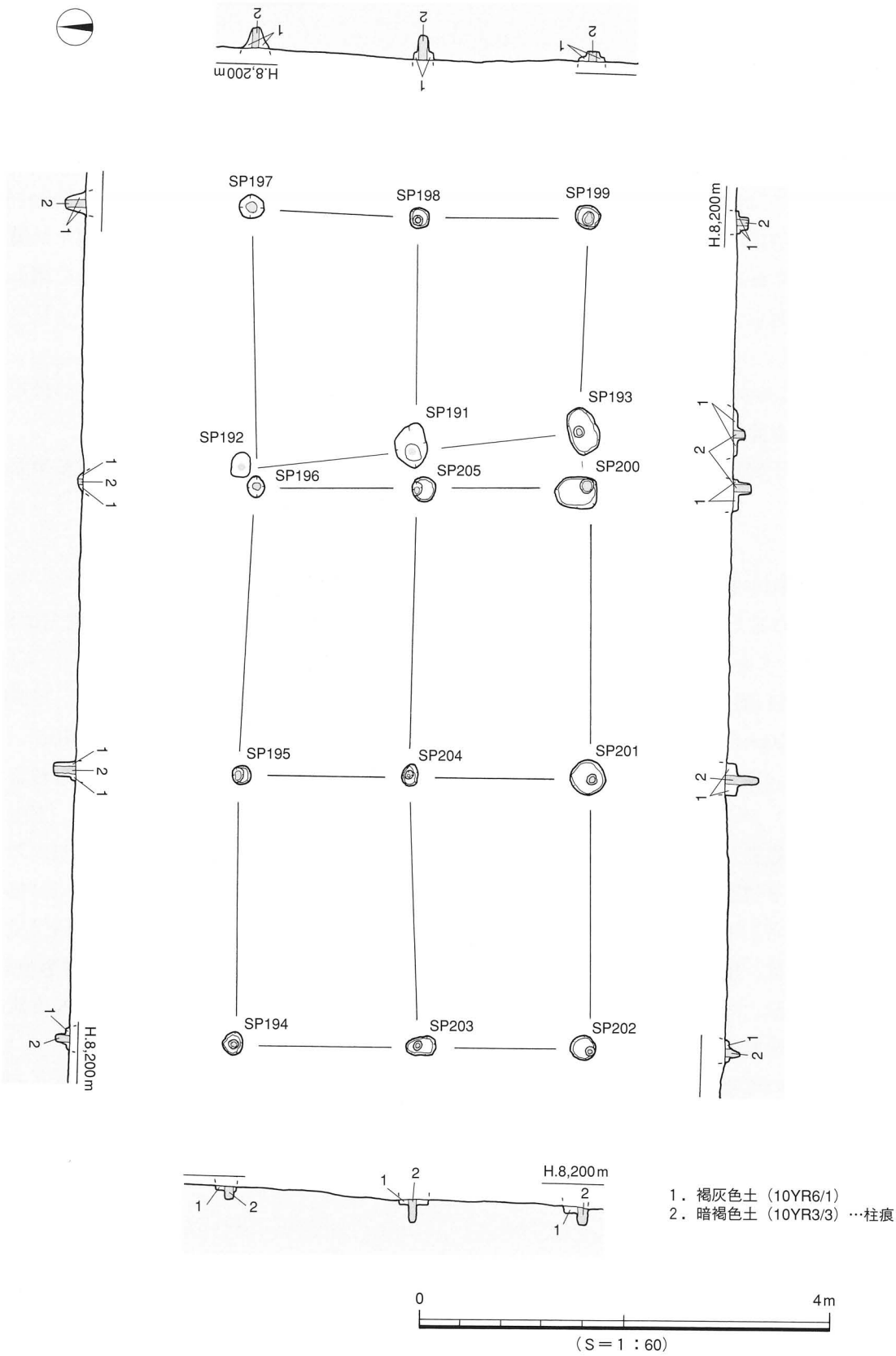
時期：遺物が砕片のため、時期決定は困難である。遺構の配置関係と埋土から14世紀前半と想定される。

掘立204（第16･17図、図版５・６）

Ⅱ区北端部のＥ７区に位置する。梁間１間、桁行２間の東西に細長い建物である。柱穴はＳＰ84･91･110～115の８基で構成される。建物の規模は、梁間の全長が1.32m、桁行の全長が4.0～4.1mである。ＳＰ110･111間にはＳＰ84が、ＳＰ113･114間にはＳＰ91が位置する。ＳＰ84･111間、ＳＰ91･114間はいずれも50cmを測る。柱穴の平面形態は、円形と隅丸長方形である。規模は径20～70cm、深さ14～30cmを測る。埋土は褐灰色土（10ＹＲ6/1）である。ＳＰ84･112･113では、柱穴底から柱を支える基底石（根石）が出土している。柱痕跡はＳＰ115で確認し、柱痕跡の埋土は暗褐色土（10ＹＲ3/3）である。内部施設として炉ＳＫ202がある。遺物は、ＳＰ84からは土師器の細片、ＳＰ111からは土師器の坏片、ＳＰ112からは土師器の坏･土鍋、ＳＰ113からは土師器の坏･三足付羽釜、ＳＰ115の柱痕跡からは皿ないし坏の土師器の砕片が出土した。なお、ＳＰ112からは炭化材の一部が出土した。

内部施設には、建物の中央南寄りに構築された炉ＳＫ202がある。平面形態は隅丸長方形を呈する。規模は東西70cm、南北50cm、深さ16cmを測る。土坑の床はほぼ平坦である。埋土は焼土粒と炭化物を多量に含んだ暗褐色土（10ＹＲ3/3）である。

遺物は土坑の東半部でまとまって出土し、土師器の皿･坏･土鍋がある。土鍋は底部を欠くがほぼ１個体が出土した。胴部外面には煤が付着する。皿と坏の遺存は悪く、図化できない。

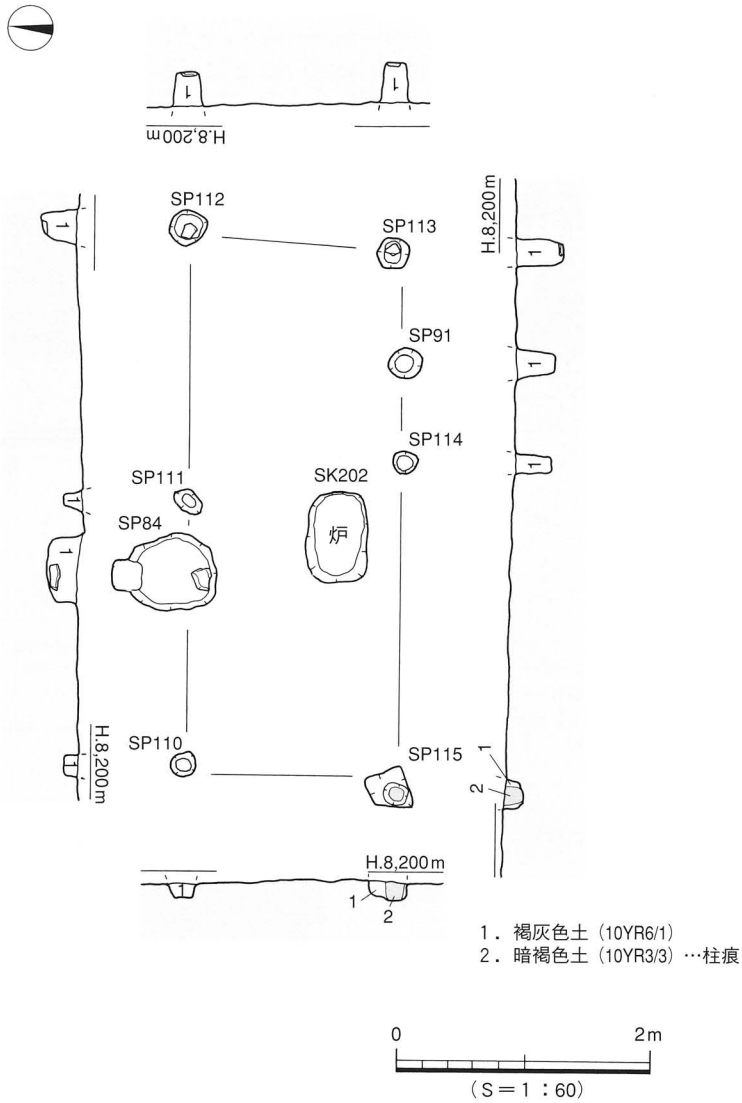


第15図　掘立202測量図

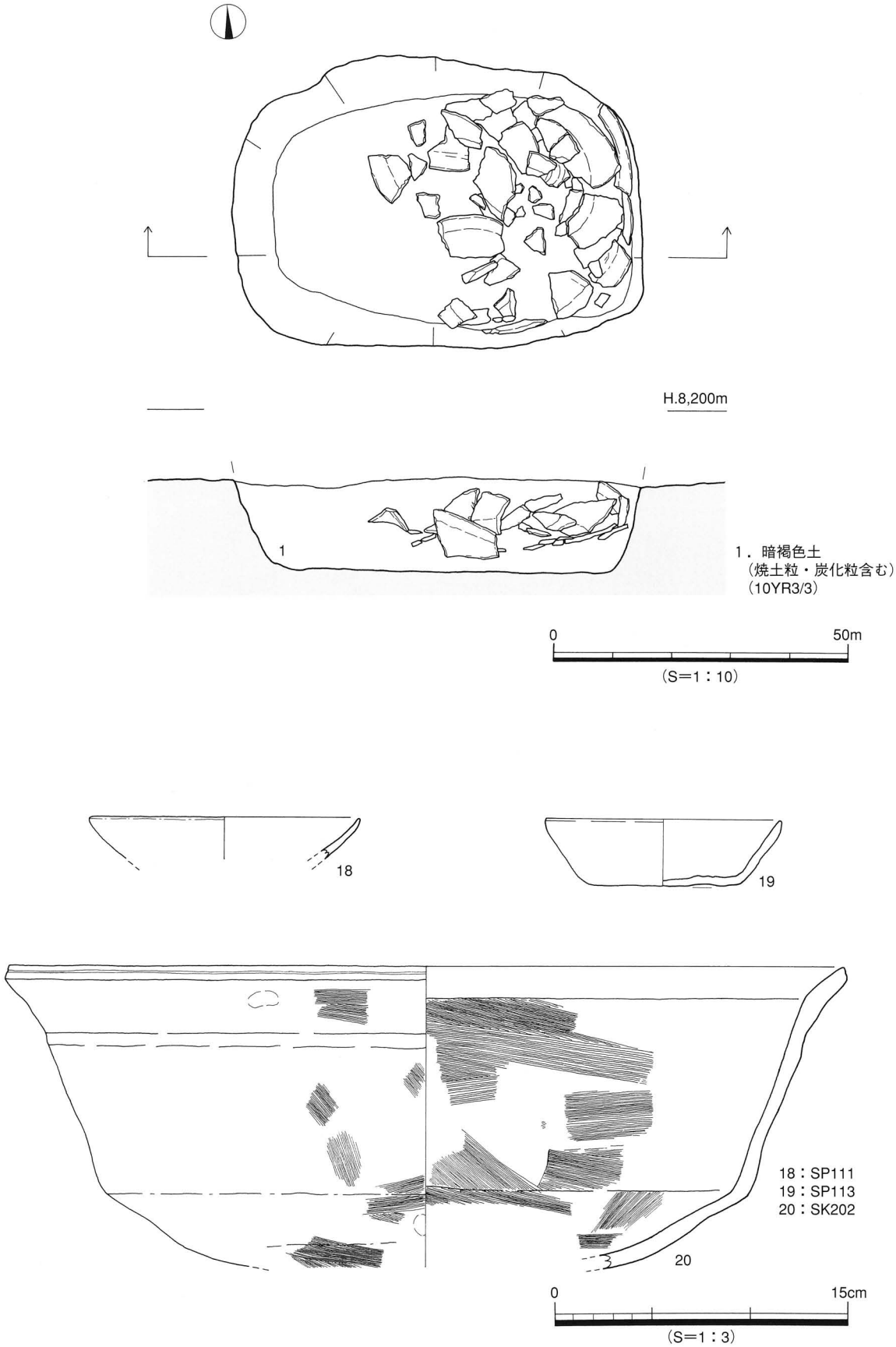
出土遺物（第17図、図版16）

18はＳＰ111出土の土師器坏の口縁部片である。胴部がほぼ直線的に開く。19はＳＰ113出土の土師器の坏である。外底には回転糸切り離し痕と板目状の圧痕を残す。20はＳＫ202から出土した土鍋で、底部を欠く。口縁部を指で屈曲させるために、内面に弱い稜線がみられる。口縁端部に１条の細沈線が巡る。胴部外面には多くの煤が付着する。

時期：出土遺物から14世紀前半と考えられる。



第16図　掘立204測量図



第17図　掘立204・炉（SK202）測量図及び出土遺物実測図

掘立205（第18図、図版６）

Ⅱ区北端部のＥ６～Ｆ７区に位置する。掘立204の西に隣接する。梁間１間、桁行３間の南北に細長い建物である。柱穴はＳＰ10･14～20の８基で構成される。建物規模は、梁間の全長が2.6～2.7m、桁行の全長が5.1～5.4mを測る。柱穴の平面形態は円形と不整円形である。規模は、径40～50cm、深さ30～80cmを測る。埋土は褐灰色土（10ＹＲ6/1）である。柱痕跡は各柱穴で確認した。直径は10～15cmを測り、柱痕跡の埋土は暗褐色土（10ＹＲ3/3）である。遺物は、ＳＰ16の柱痕からは土師器皿ないし坏の細片、ＳＰ17からは土師器の坏片、ＳＰ18からは土師器三足付羽釜の脚部と東播系須恵器の片口鉢、ＳＰ18の柱痕からは土師器の坏片、ＳＰ19の柱痕からは土師器の皿、ＳＰ20からは土師器の砕片が出土している。なお、建物の東に並行して柵列ＳＡ202が設けられている。

出土遺物（第18図、図版16）

21はＳＰ19の柱痕から出土した土師器の皿である。胴部の立ち上がりはしっかりしている。22はＳＰ18出土の東播系須恵器の片口鉢である。口縁端部は上下に拡張されている。

時期：出土遺物（22）から14世紀前半と考えられる。

掘立206（第19図、図版５・６）

Ⅱ区北西部のＥ・Ｆ６区に位置し、掘立205の西に隣接する。梁間２間、桁行３間の南北に細長い建物である。南の梁部分は試掘トレンチによって削平されている。柱穴はＳＰ７～９･11･13･23･57･78･250･251の10基を検出した。規模は、梁間の全長が2.7～３m、桁行の全長が5.3～5.5mを測る。柱穴の平面形態は円形である。規模は径30～60cm、深さ20～60cmを測る。埋土は褐灰色土（10ＹＲ6/1）である。ＳＰ8･57･78･251では、柱穴底から柱を支えるための基底石（根石）が出土した。また、ＳＰ13と250では柱穴の埋土中から礫が出土した。柱痕跡は３基の柱穴ＳＰ11･78･250で確認し、直径10～20cmを測る。柱痕跡の埋土は暗褐色土（10ＹＲ3/3）である。

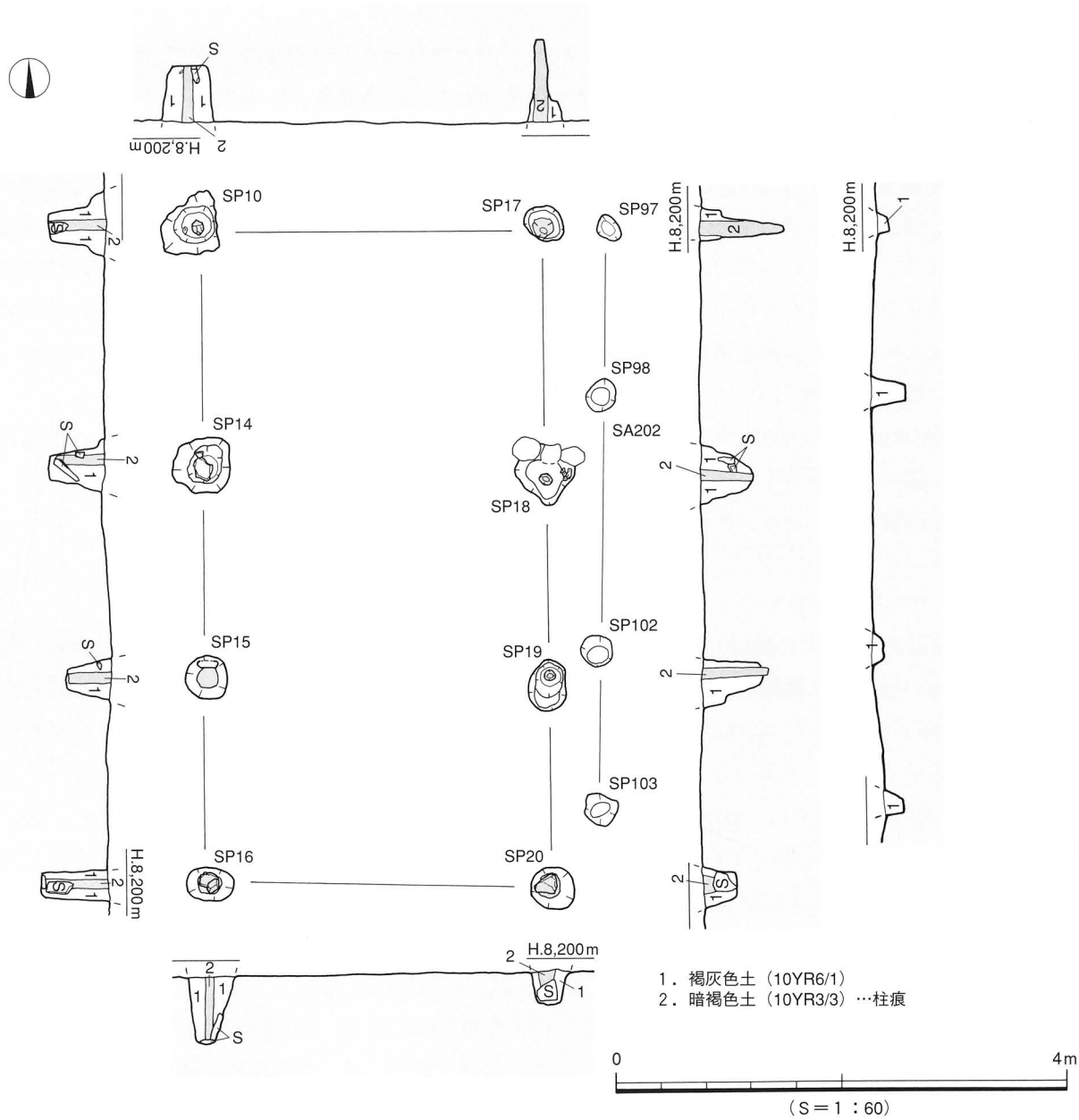
遺物は、ＳＰ９とＳＰ57からは土師器の細片、ＳＰ250の柱痕からは土師器の坏が出土した。なお、ＳＰ250の埋土中からは弥生後期土器が出土したが、混入品と判断した。

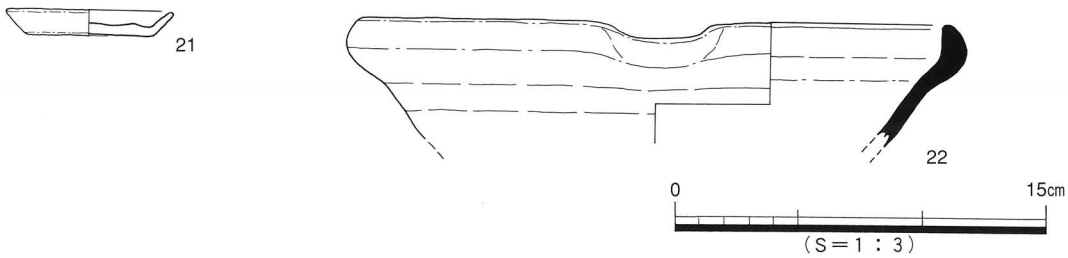
内部施設として土坑ＳＫ204が建物の中央北寄りに構築されている。平面形態は不整円形を呈する。規模は東西50cm、南北35cm、深さ60cmを測る。床面はほぼ平坦である。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は上下２層に分層される。上層は炭化物を含んだ暗褐色土（10ＹＲ3/3）、下層が暗褐色砂質土（10ＹＲ3/3）である。遺物は、上層から亀山焼きの大甕、下層から土師器の羽釜が出土した。なお、建物の東と西に柵列（ＳＡ203･ＳＡ204）が伴う。

出土遺物（第20図、図版17）

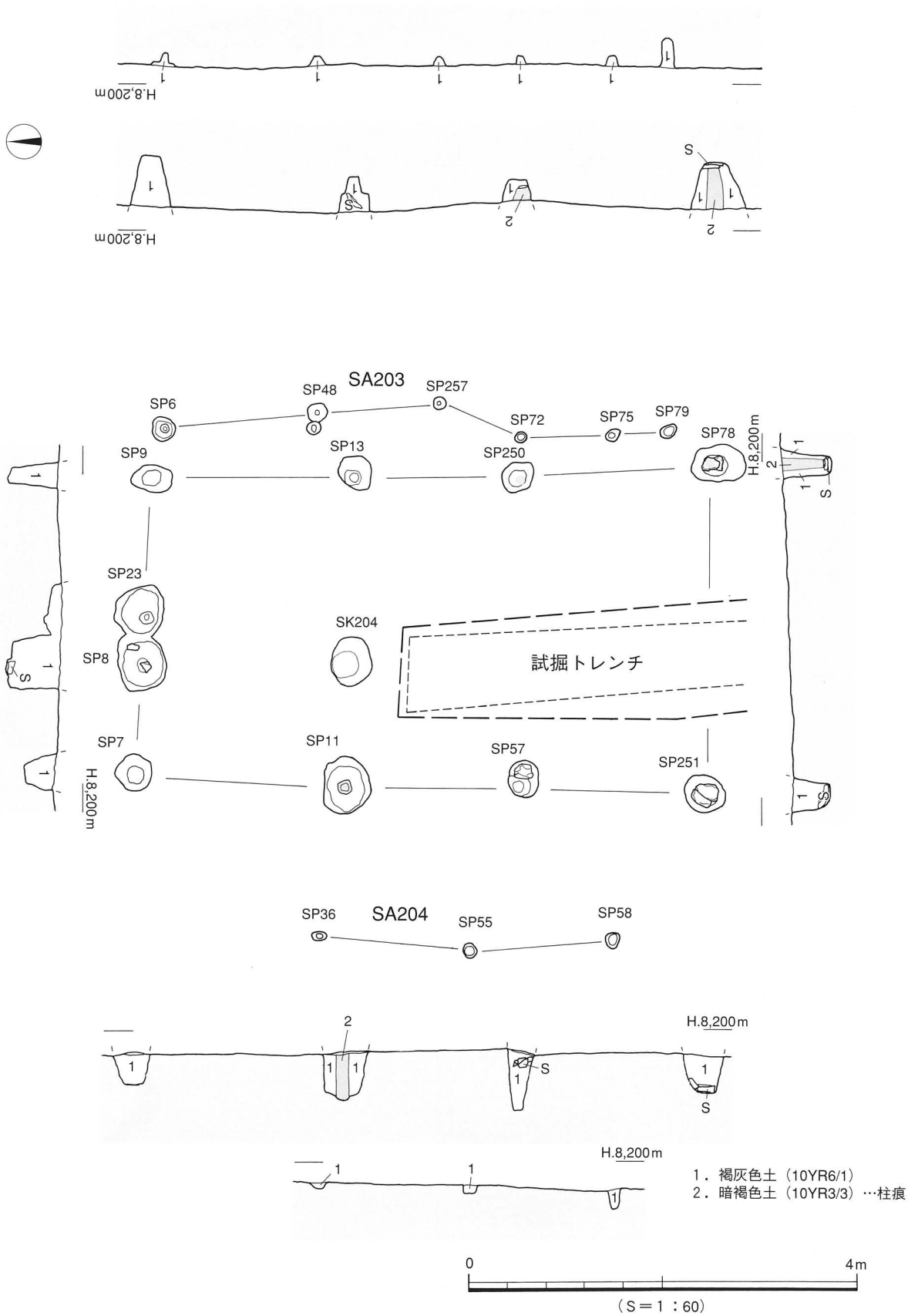
23はＳＰ250から出土した土師器の坏で、口縁の一部を欠く。胴部はやや丸みをもちつつ立ち上がり、口縁端は丸くおさまる。外底には回転糸切りの切り離し痕と板目状の圧痕がみられる。24･25はＳＫ204出土で、24は土師器の三足付羽釜の口縁部片である。口縁端から若干下がった位置にタガが貼付される。タガは断面「コ」字形に近い形状を呈している。25は須恵器の大甕である。口縁部は指により強く折り曲げられ「く」字形を呈する。口縁端部は面取りされている。胴部外面は格子目タタキ、内面はナデ調整が施される。外面に比べて内面の遺存は悪く、剥落が著しい。

時期：遺物から14世紀前半と考えられる。

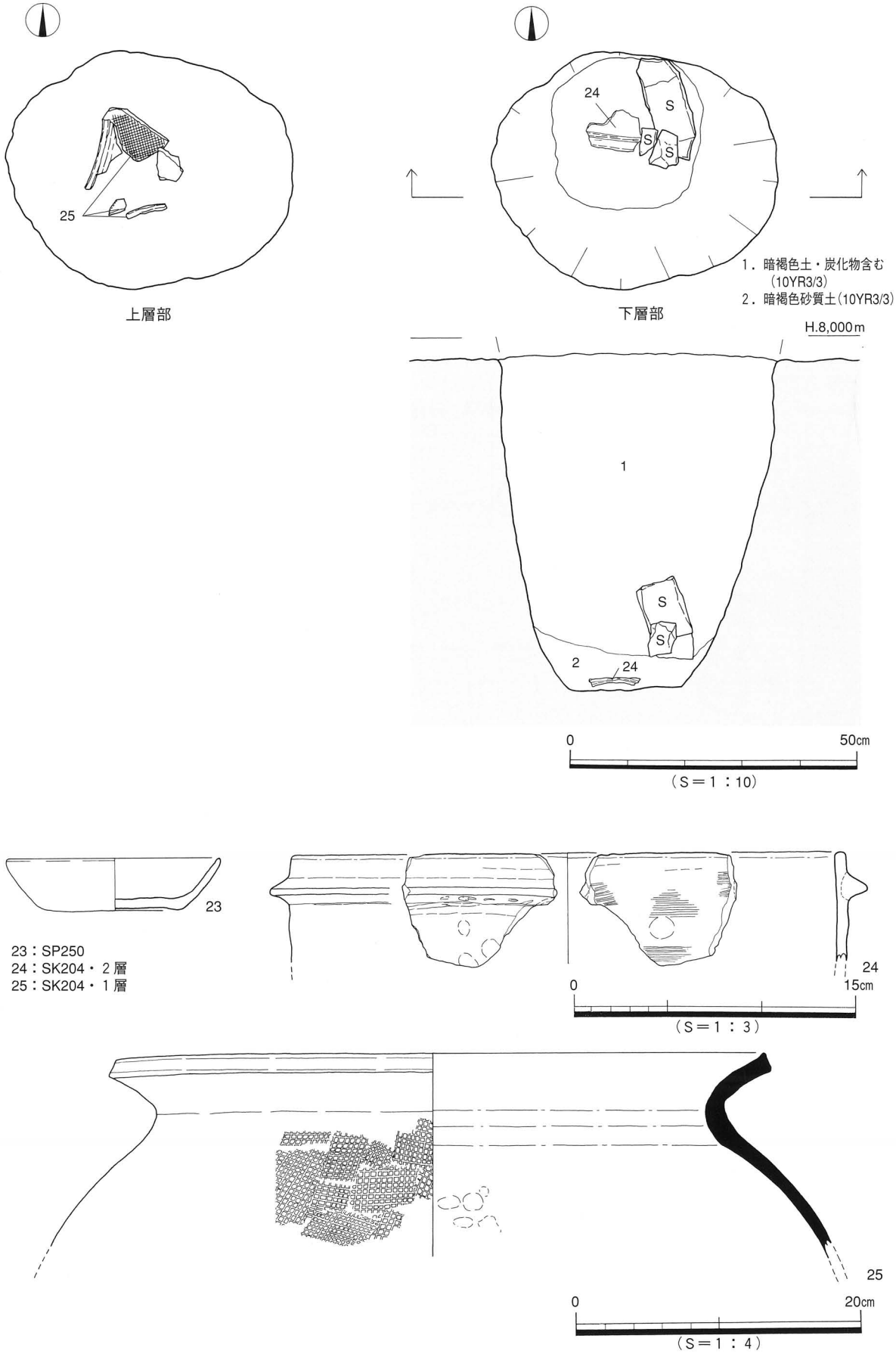




第18図　掘立205・SA202測量図及び掘立205出土遺物実測図



第19図　掘立206・SA203・SA204測量図

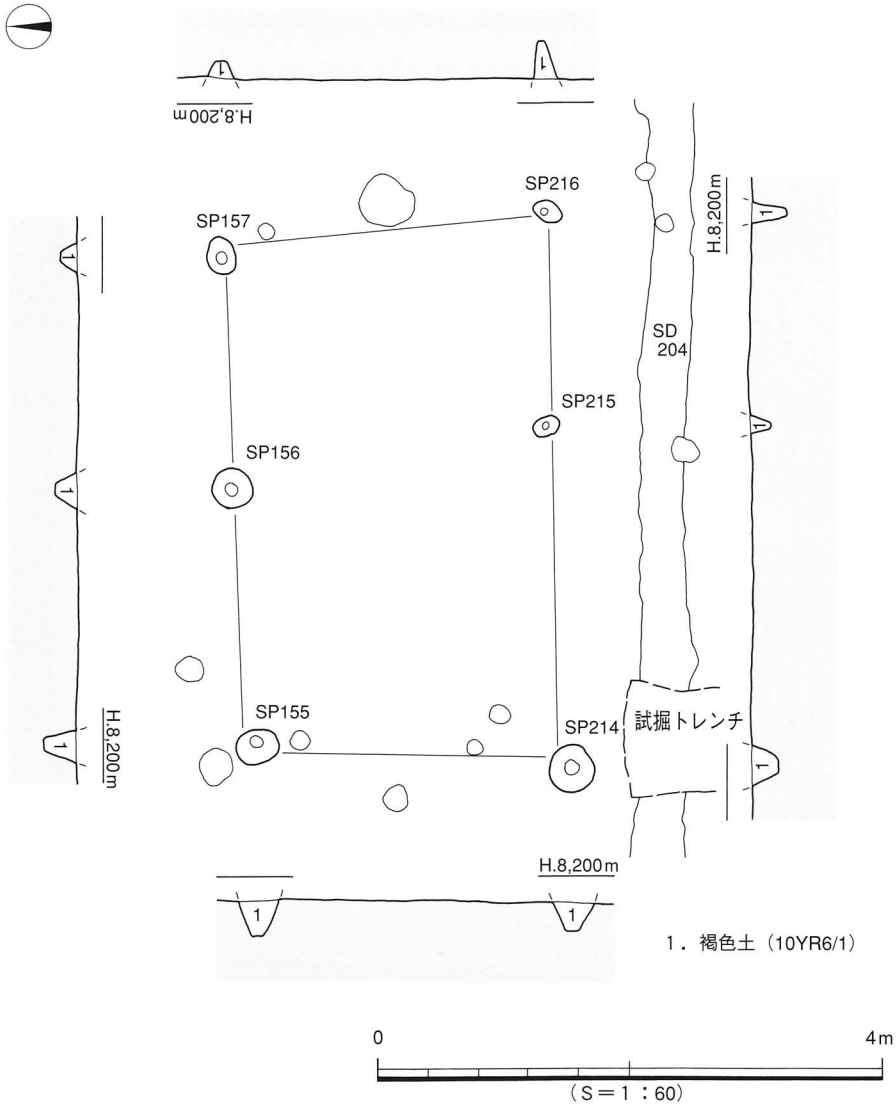


第20図　掘立206・貯蔵穴（SK204）測量図及び出土遺物実測図

掘立207（第21図、図版５）

Ⅱ区中央部の西、Ｇ･Ｈ６区に位置し、ＳＤ204の北に隣接する。梁間１間、桁行２間の東西に細長い建物である。柱穴はＳＰ155～157･214～216の６基で構成される。規模は、梁間の全長が2.1～2.4m、桁行の全長が3.6～4.1mを測る。柱穴の平面形態は円形を呈する。柱穴の規模は、径20～40cm、深さ14～29cmを測る。埋土は褐色土（10ＹＲ6/1）である。いずれの柱穴からも、遺物と根石は出土していない。

時期：遺物の出土がみられないので、時期の特定は困難である。遺構の配置と埋土から、14世紀前半と想定しておきたい。

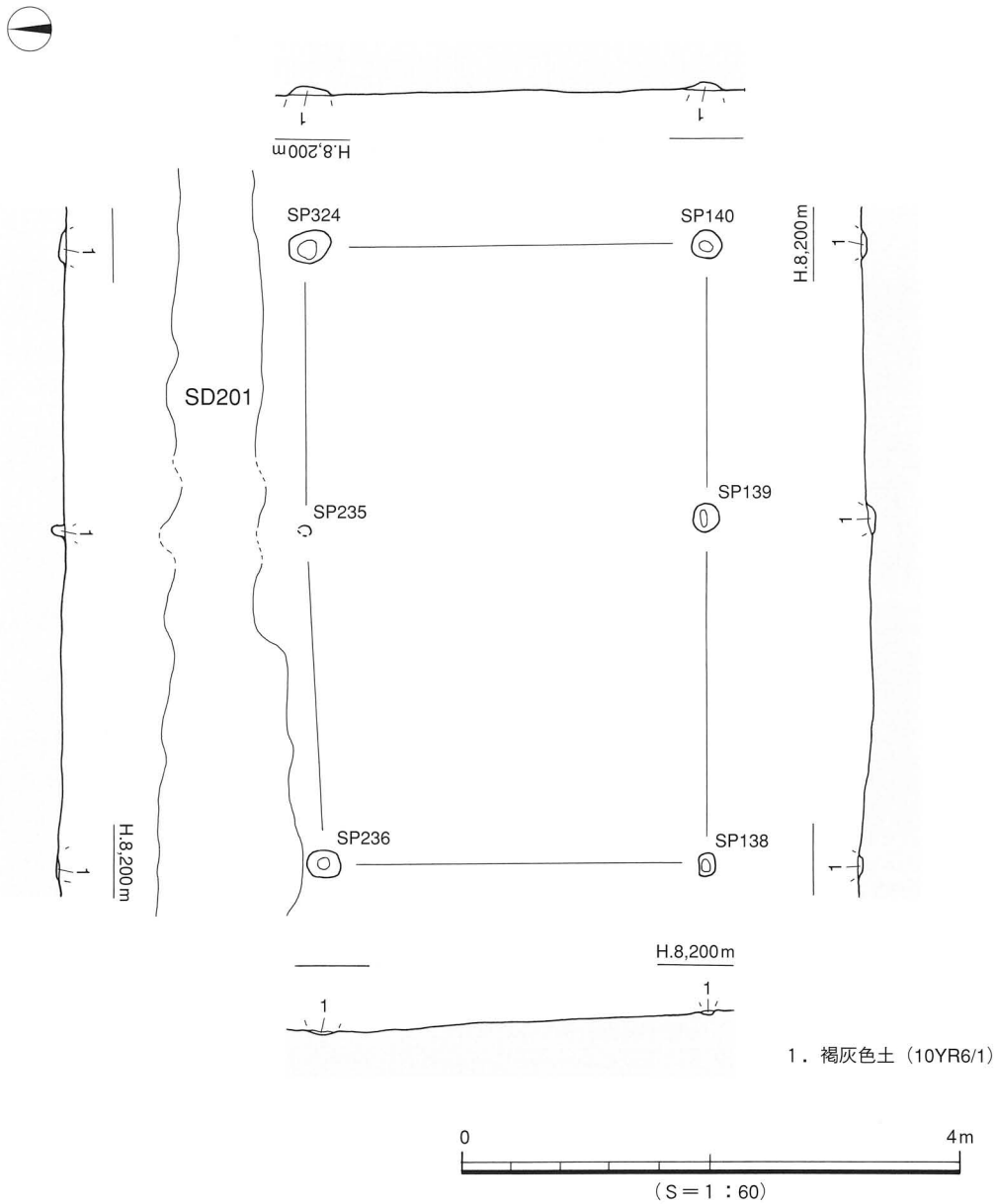


第21図　掘立207測量図

掘立208（第22図、図版５）

Ⅱ区北西部のＦ・Ｇ５区に位置し、ＳＤ201の南に隣接する。梁間１間、桁行２間の東西に細長い建物である。規模は、梁間の全長が2.9m、桁行の全長が4.7mを測る。柱穴はＳＰ138～140･234～236の６基で構成される。柱穴の平面形態は円形を呈する。規模は、径20～36㎝、深さ6㎝を測る。埋土は褐灰色土（10ＹＲ6/1）である。遺物はＳＰ236から土師器の皿と考えられる砕片が出土したが図化できない。

時期：遺物が砕片のため、時期の特定は困難である。遺構の配置から14世紀の前半と想定しておきたい。



第22図　掘立208測量図

掘立301（第23図、図版11）

Ⅲ区中央部のＩ10･11区に位置する。梁間１間、桁行２間の東西に細長い建物である。規模は、梁間の全長が1.4～1.5m、桁行の全長が3.7mである。柱穴はＳＰ347･350･352･354･357･359の６基で構成される。柱穴の平面形態は円形を呈する。規模は、径20～30cm、深さ10～20cmを測る。埋土は褐灰色（10ＹＲ6/1）の砂が混じる土である。遺物は出土していない。

時期：遺物の出土がみられないため、時期の特定は困難である。遺構を覆う第Ⅳ層の出土遺物の時期を上限とするならば、14世紀代と理解できる。

掘立302（第23図、図版11）

Ⅲ区中央部のＩ10区に位置する。梁間･桁行が１間の建物で、柱穴ＳＰ363･366･367･428で構成される。規模は、ＳＰ363･428間が1.2m、ＳＰ428･367間が1.6m、ＳＰ366･367間が1.5m、ＳＰ363･366間が1.6mを測る。柱穴の平面形態は円形を呈する。規模は、径24～30cm、深さ10～20cmを測る。埋土は褐灰色（10ＹＲ6/1）の砂が混じる土である。遺物は出土していない。この建物の中央部分には井戸（ＳＥ304）が構築されている。位置関係から掘立302はＳＥ304の付帯施設と考えられる。

時期：遺物の出土がみられないため、時期の特定は困難である。遺構の配置から14世紀代と想定しておきたい。

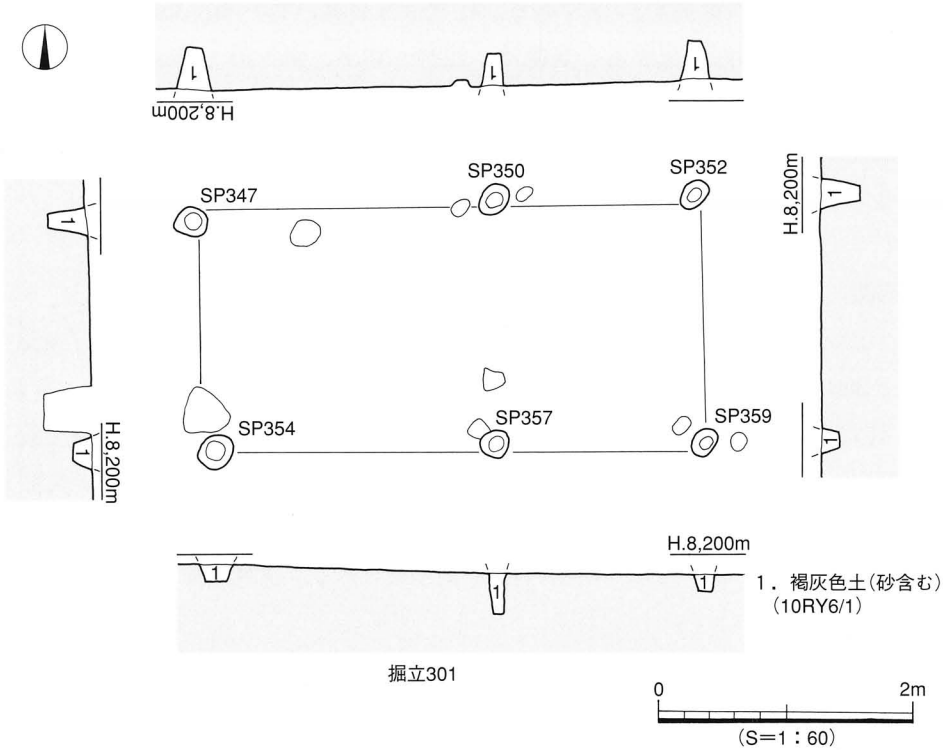
２．井　戸

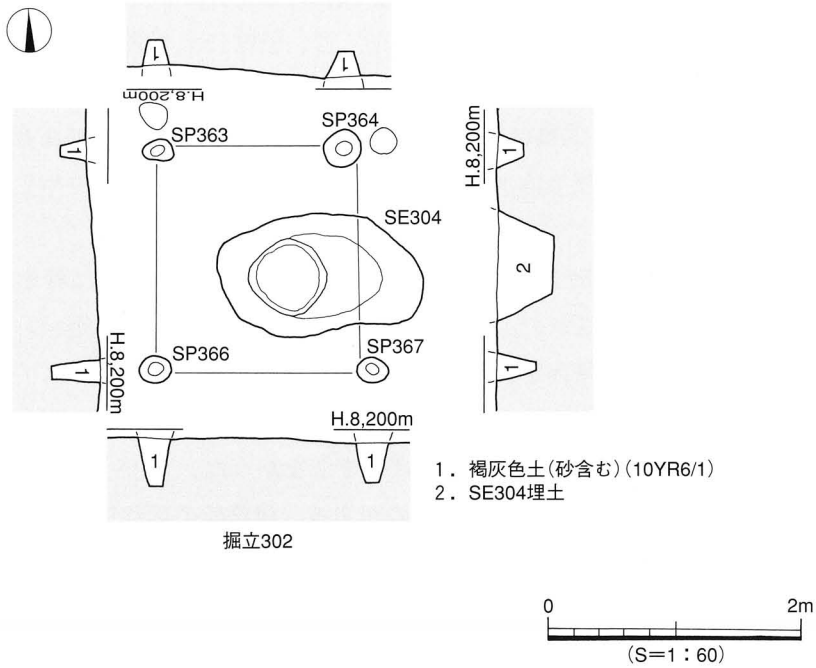
ＳＥ201（第24･25図、図版５・７・８）

Ⅱ区北東部のＧ７区に位置する。ＳＤ202の南端に取り付く。構造は上部に石組みをもち、下部に曲物が伴う。掘り方の平面形態は楕円形を呈する。規模は東西1.45m、南北1.6m、深さ1.37mを測る。埋土は五層に分層される。①層は灰白色土（N7/0）で、層厚15cmを測る。②層は灰白色土（N5/0）で、層厚13cmを測る。③層は暗灰色粘質土（N3/0）で、層厚60cmを測る。④層は青灰色粘質土（10ＢＧ5/1）で、層厚55cmを測る。⑤層はオリーブ灰色粘質土（2.5ＧＹ6/1）である。これは、上部構造の石組みの裏込め土である。各埋土は水平堆積であった。構造は、北側がやや二段掘り状を呈し、南側が三段掘り状を呈している。

調査では、井戸のプランを検出した段階で石を数点確認していた。①･②層を掘り下げると、整然と積み上げられた石組みが検出された。石組みは10～20cm大の角礫が多く用いられている。積み方は横積みを基本とし、隙間には縦積みを採用している。石組みは５段分が遺存しており、高さ60cmを測る。④層を精査した段階で曲物が検出された。曲物は直径50cm、高さ60cmを測る。木目が横方向であることは確認できたものの、遺存が悪く取り上げはできなかった。

遺物には、遺構構築時と埋没過程とに伴うものがある。構築時の遺物は、須恵器甕と龍泉窯系青磁である。これらは裏込め土や石組みの間から出土した（図版８）。埋没過程の遺物は、①層からは土師器の三足付羽釜と鉄器、④層からは土師器の皿と須恵器の大甕が出土した。この他に、①層からは多量の石がみられた。なかには三波川変成岩類の板状の礫がある。これらの多くは、井戸の石組みに用いられた材と判断した。



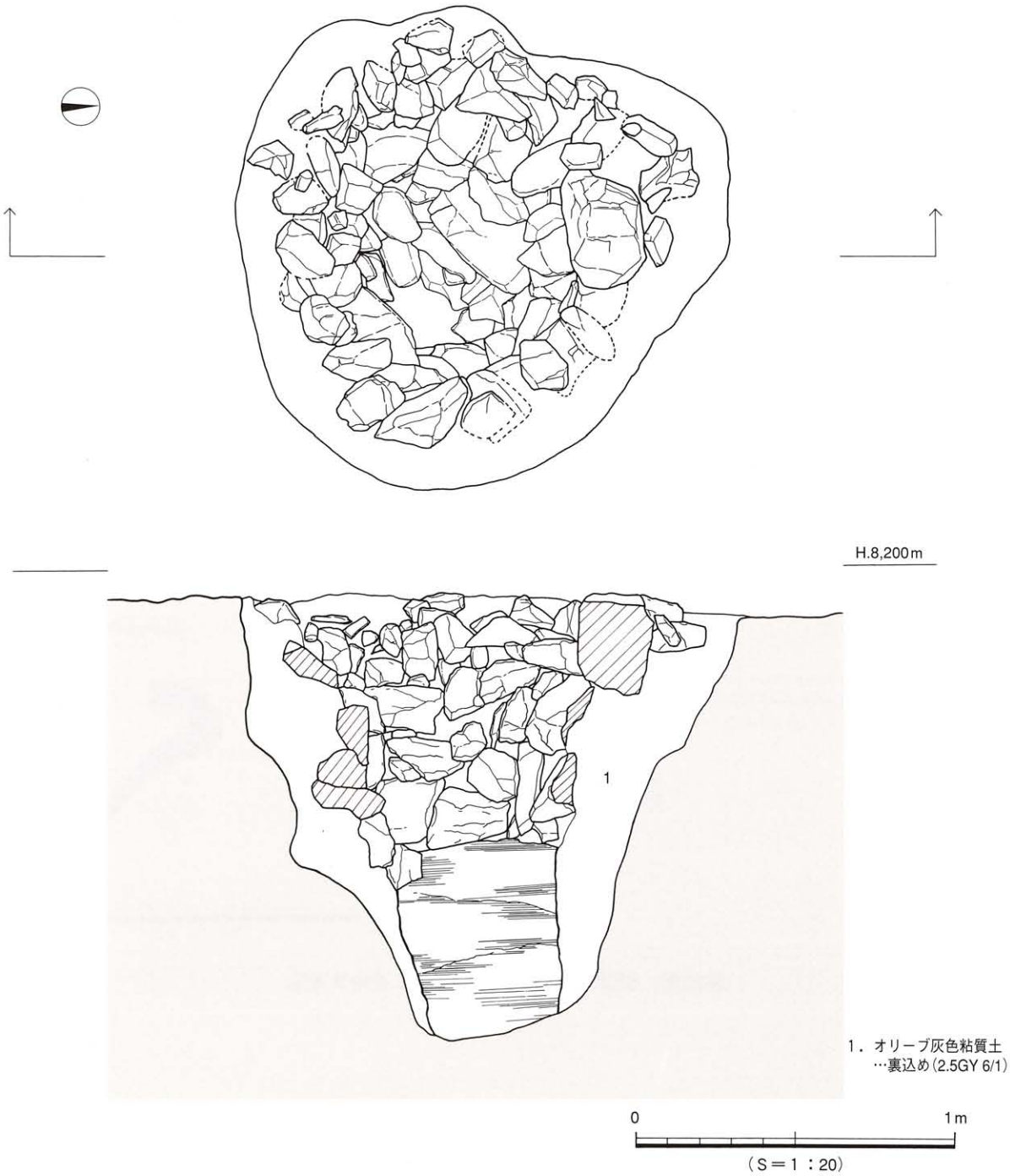


第23図　掘立301・掘立302測量図

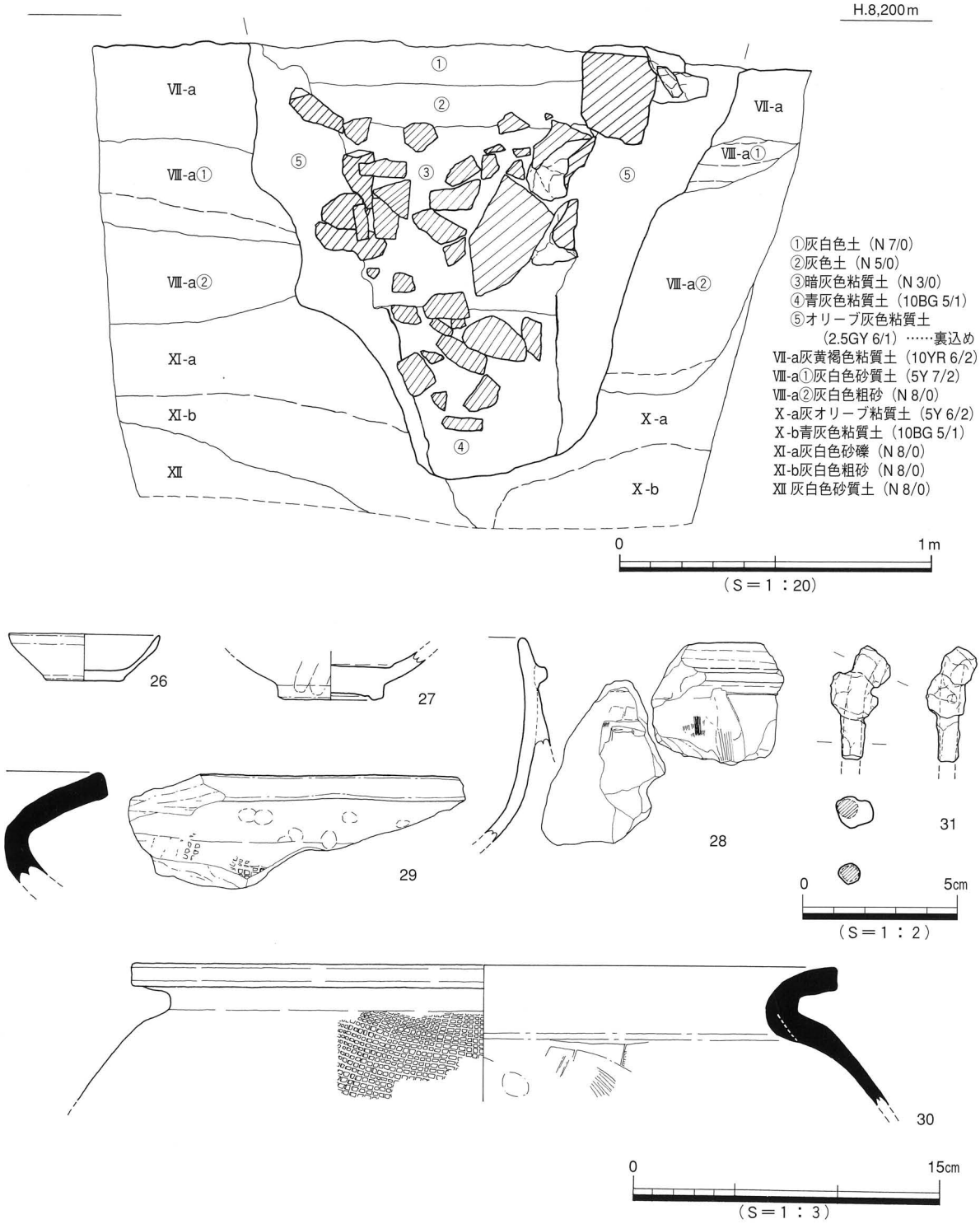
出土遺物（第25図、図版17）

26は土師器の坏である。口縁部は若干厚く、胴下半がわずかに内湾しながらすぼむ。底部は比較的厚い。27は龍泉窯系の青磁である。高台付きの碗であろう。内外面には淡いオリーブ色の釉がかけられている。28は土師器の羽釜である。口縁端部から下がった位置にタガが巡る。剥離痕跡から三足付羽釜とみられる。29･30は中世須恵器の甕である。29は口縁部が強く折り曲げられ「く」字形を呈し、やや長い。胴上半の外面には格子タタキが施される。30は口縁部が短く、「く」字形に強く折れ曲がる。胴部外面には格子タタキがみられる。31は鉄製品で、棒状を呈する。

時期：出土遺物から14世紀前半と考えられる。



第24図　SE201測量図



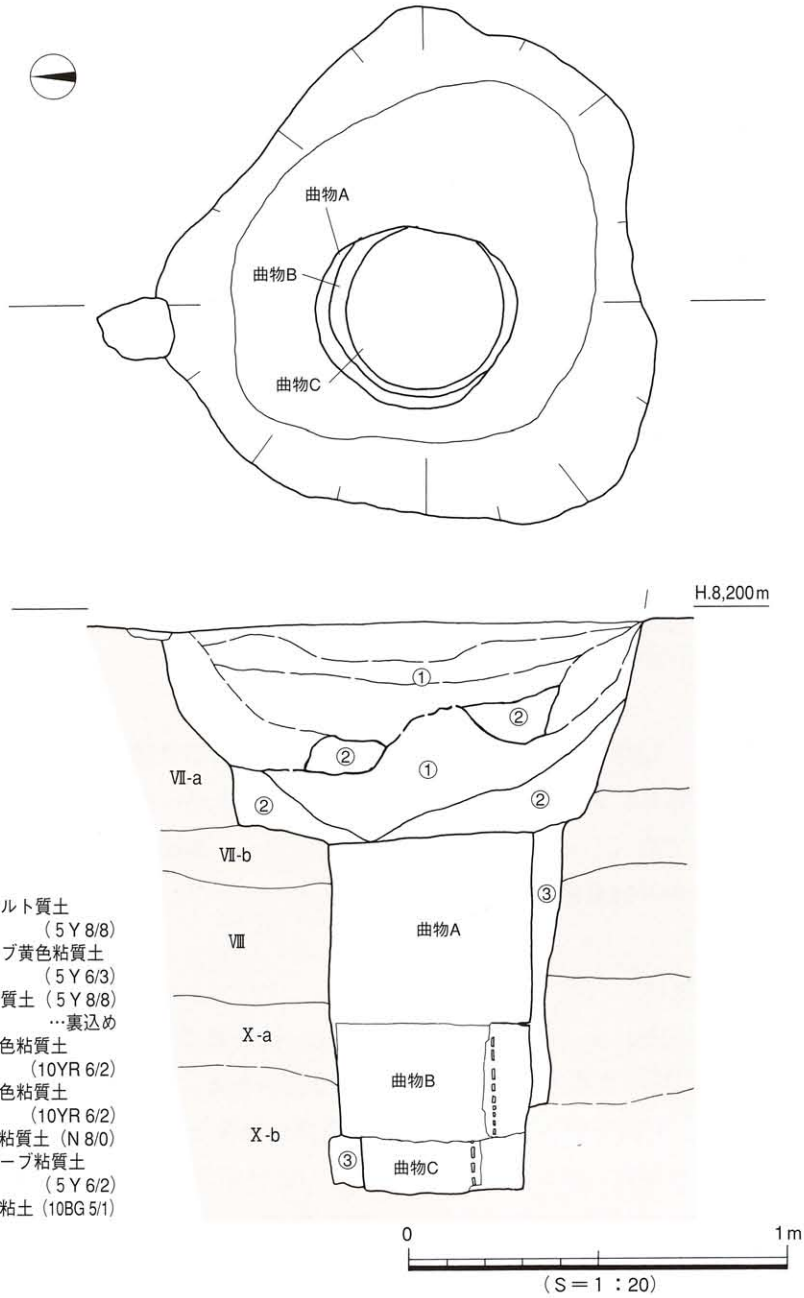
第25図　SE201断面測量図及び出土遺物実測図

ＳＥ301（第26図、巻頭図版１、図版11･12）

Ⅲ区中央南、Ｊ10区に位置する。平面形態は不整円形を呈する。規模は東西1.34ｍ、南北1.25ｍ、深さ1.50ｍを測る。断面形態は二段を呈し、上段部は逆台形、下段部は円筒形状に壁が垂直に掘り下げられている。ただし、下段部は北と南に段が形成されている。埋土は、上段部が黄色粘質土（5Y8/8）とオリーブ黄色粘質土（5Y6/3）の土で、井戸は意図的に埋め戻されている。下段部は曲物内の埋土になり、暗オリーブ色粘質微砂（5Y4/3）である。下段部の曲物は三段で構成される。検出順に上から「A」「B」「C」と呼称して調査を進めた。

曲物の調査は、遺存が悪いＡを半裁し、Ｂ･Ｃは曲物の輪郭を検出しておこなった。曲物は各々が一部重なる形で検出された。

遺物は曲物のほかに、裏込め土に土師器の砕片が１点出土した。



第26図　SE301測量図

出土遺物（巻頭図版１）

曲物は下方のものほど遺存が良好であった。調査段階ではＡが直径54cm、高さ50cm、Ｂが直径45cm、高さ30cm、Ｃが直径40cm、高さ30cmを測る。なお、曲物の詳細については、第Ⅶ・Ⅷ章を参照されたい。

時期：遺構の配置から14世紀代と想定しておきたい。

ＳＥ302（第27図、図版11・13）

Ⅲ区北西部のＩ11区に位置し、試掘時のトレンチ（Ｔ６）に一部切られる。平面形態は円形を呈する。規模は径１ｍ、深さ50cmを測る。断面形態は二段を呈し、上段部は逆台形状、下段部は垂直に掘り込まれている。井戸底は平坦であり、湧水は認められない。埋土は暗オリーブ色粘質土（5Y4/3）で、裏込めは青灰色粘質土（5B6/1）である。

遺物は、上段部から土師器の皿・坏、亀山焼きの大甕、下段部から曲物が出土した。曲物の遺存は悪い。

出土遺物（第27図）

32は土師器の皿。胴部が直線的に立ち上がり、口縁端は丸くおさまる。33～36は土師器の坏である。35は内外面に赤色顔料状の付着物がみられる。37は須恵器の甕。底部はやや上げ底気味で厚い。

時期：遺物、遺構配置と埋土から14世紀前半と考えられる。

ＳＥ303（第28図、図版11・13）

Ⅲ区北部のＨ・Ｉ10区に位置する。平面形態は円形を呈する。規模は東西1.15m、南北1.35m、深さ66cmを測る。断面形態は緩やかに二段となり、検出面から20cmのところで段をもつ。井戸底は平坦で、湧水は認められない。埋土は三層に分層される。①層が淡黄色粘質土（5Y8/3）、②層がオリーブ黄色粘質土（5Y6/3）に淡黄色粘質土のブロックを含み、③層がオリーブ黄色粘質土である。断面観察から、周辺から流入した土で埋没した状況が読み取れた。

遺物は①・②層から土師器の坏・三足付羽釜が出土した。井戸底からは曲物が出土した。曲物は遺存が悪く、５×15cm大の木片が２点ある。

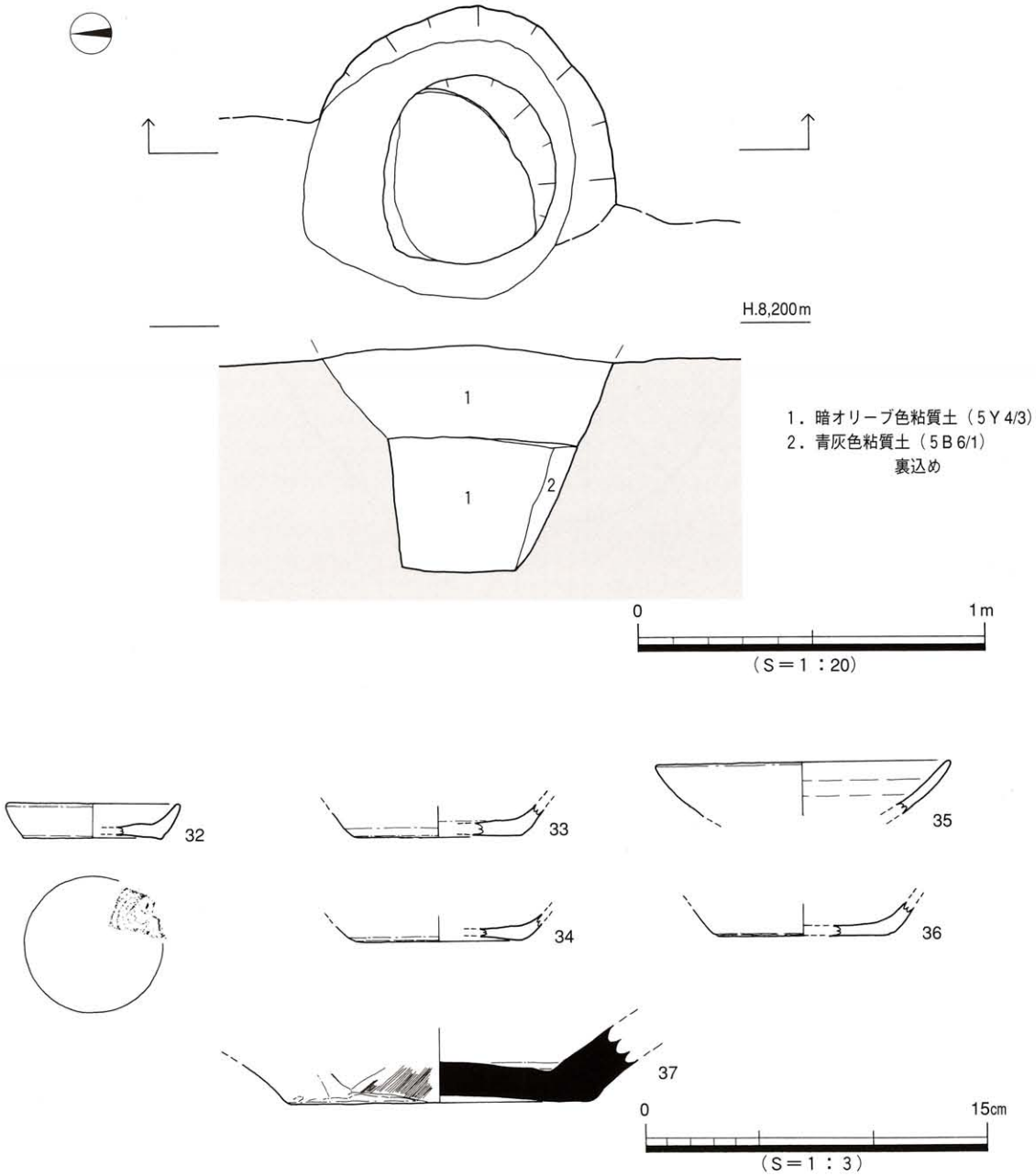
出土遺物（第28図）

38は土師器の坏である。口縁部を欠く。外底には回転糸切りの切り離し痕がみられる。39は土師器の羽釜である。タガは剥落しているものの、口縁端部からやや下がった位置に巡る。

時期：遺物は埋没過程で流入したものと考えられることから、遺物からの時期特定はできない。ここでは遺構の配置と埋土から14世紀代と想定しておく。

ＳＥ304（第29図、図版11）

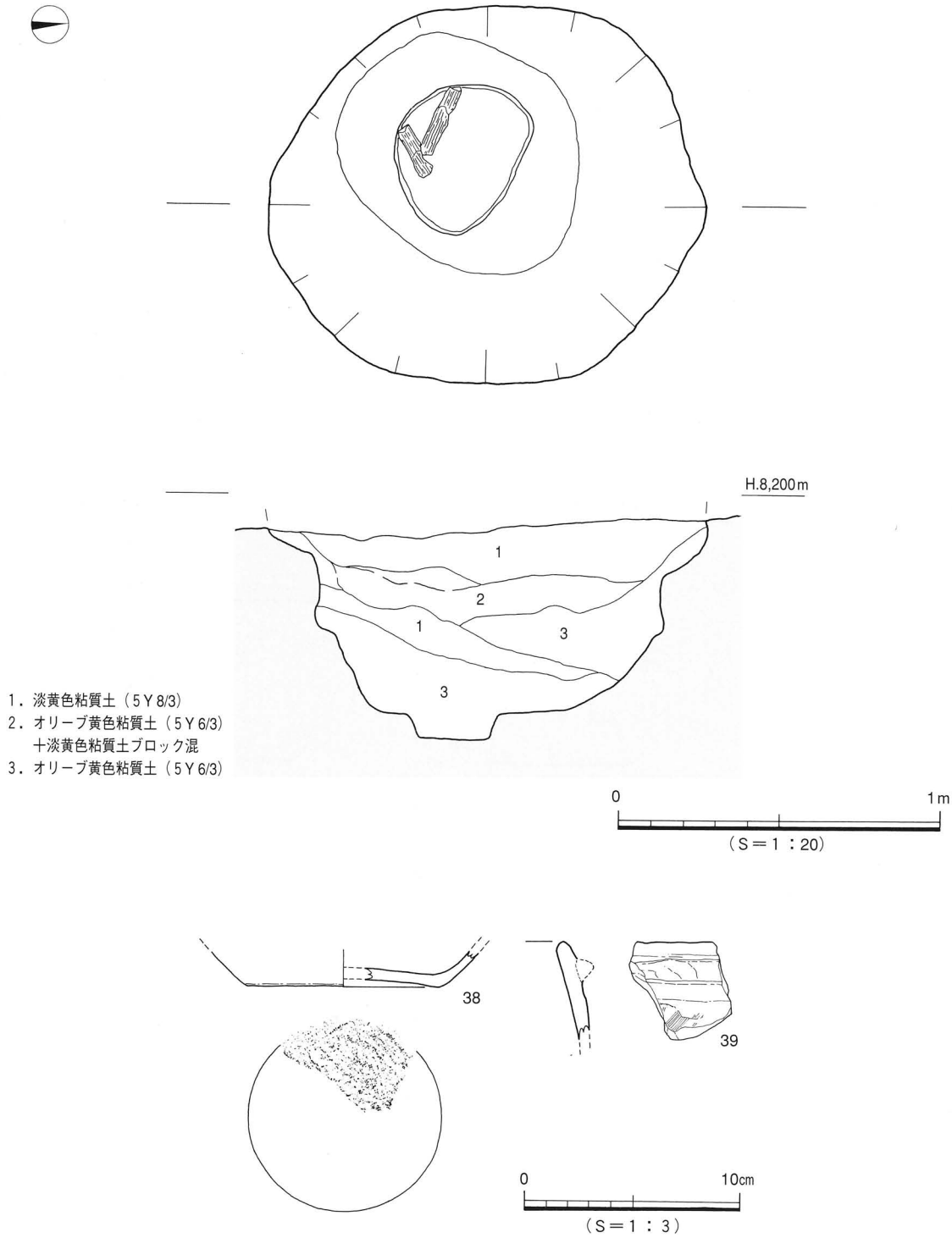
Ⅲ区中央部のＩ10区に位置する。平面形態は東西が長い楕円形である。規模は東西1.85m、南北１m、深さは1.3mを測る。井戸を取り囲むように、掘立302がある。位置関係からこの掘立302をＳＥ304の付属施設と考えた。断面形態は二段となり、上段部は東側と西側にテラスがあり、西側のテラスは幅が狭い。下段部は急傾斜に掘り込まれている。井戸底は平坦である。埋土は三層に分層される。１層が黄色シルト質土（５Y8/8）、２層がオリーブ黄色粘質土（５Y6/3）、３層が水分を多く含むオリーブ黄色粘質土（５Y6/3）である。



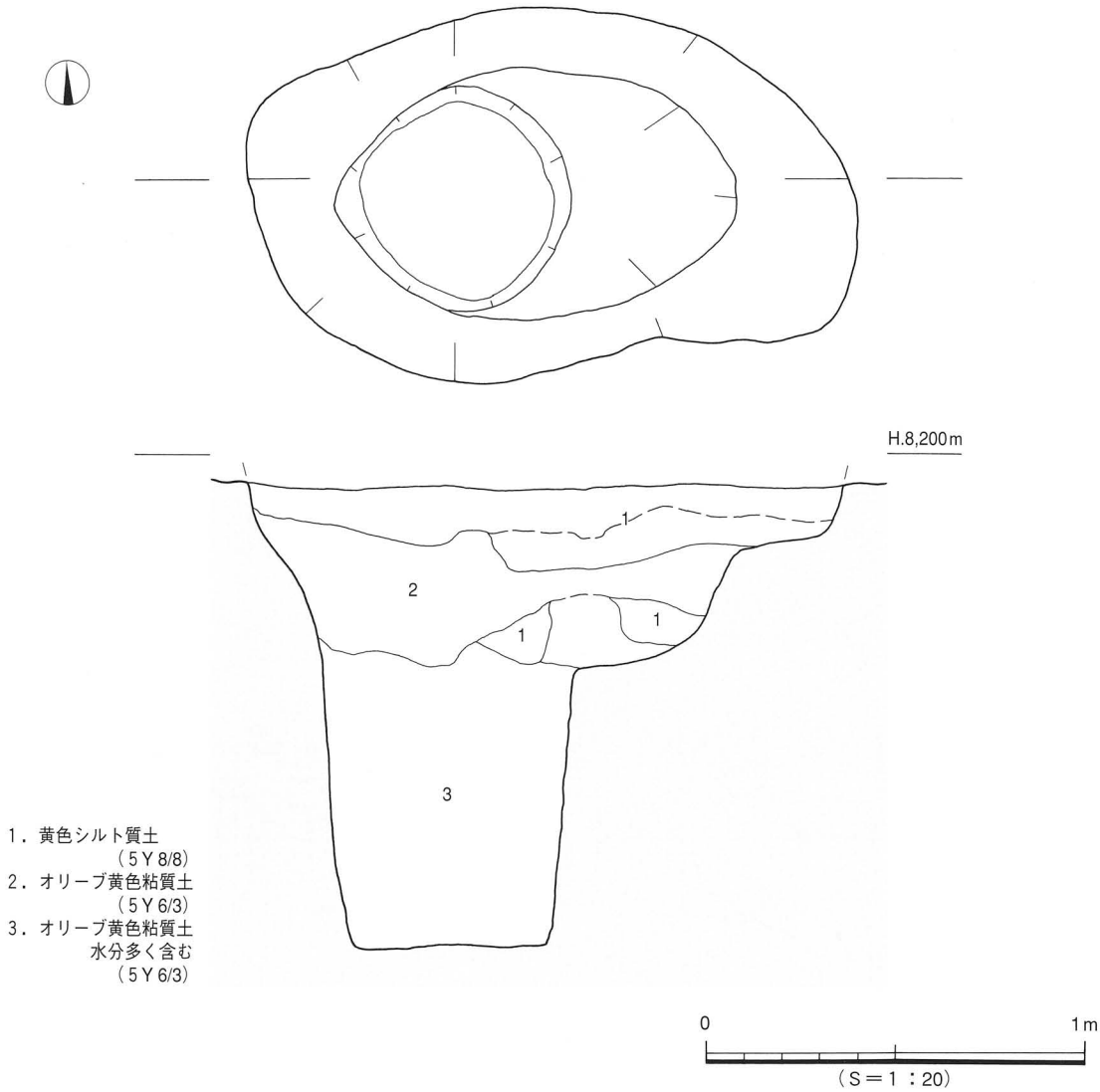
第27図　SE302測量図及び出土遺物実測図

遺物は、3層から土師器の皿･坏･三足付羽釜のほかにモモ核1点が完存で出土した。土器は砕片のため図化できない。

時期：遺物と遺構配置から14世紀代と想定しておく。



第28図　SE303測量図及び出土遺物実測図

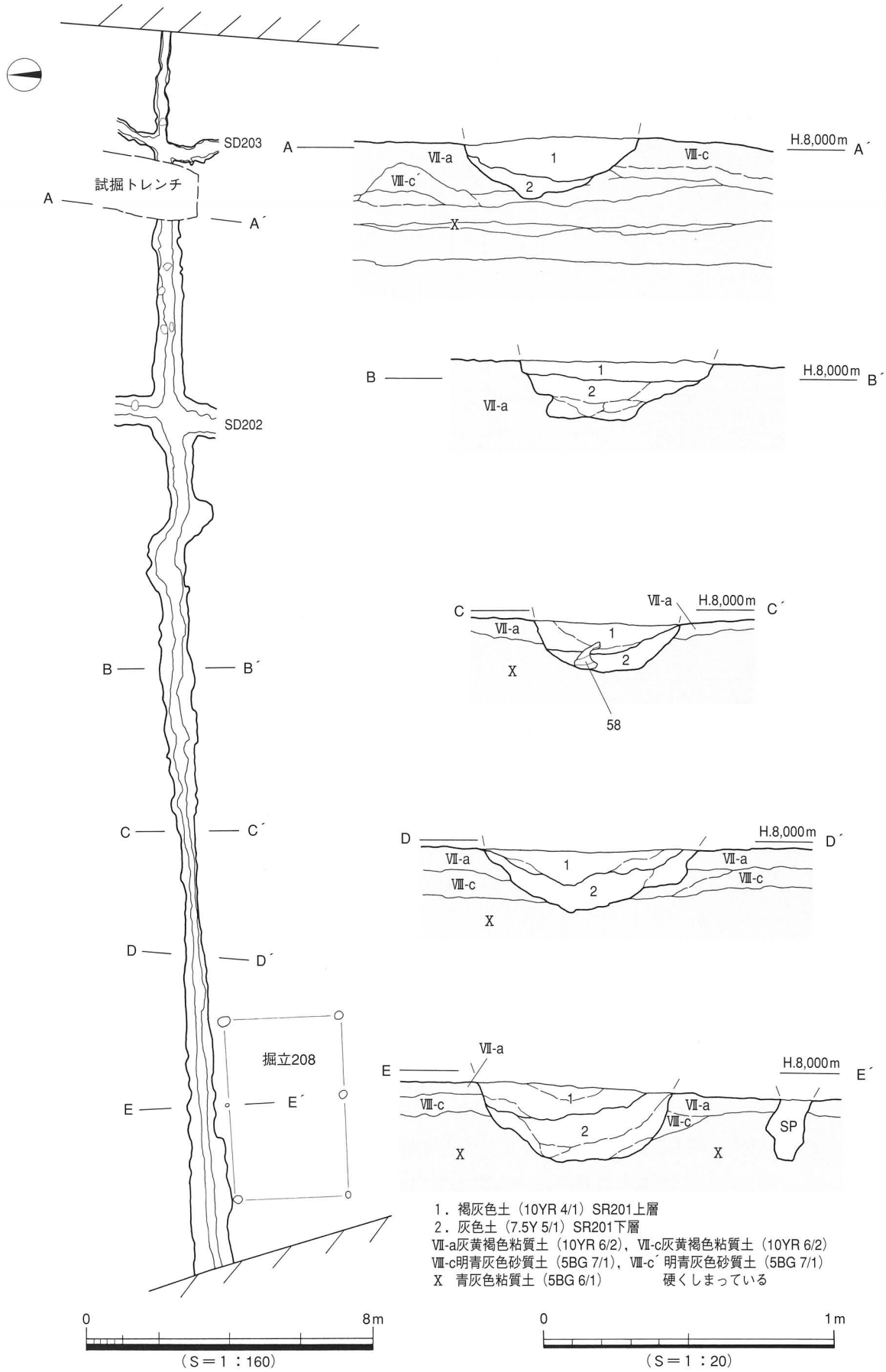


第29図　SE304測量図

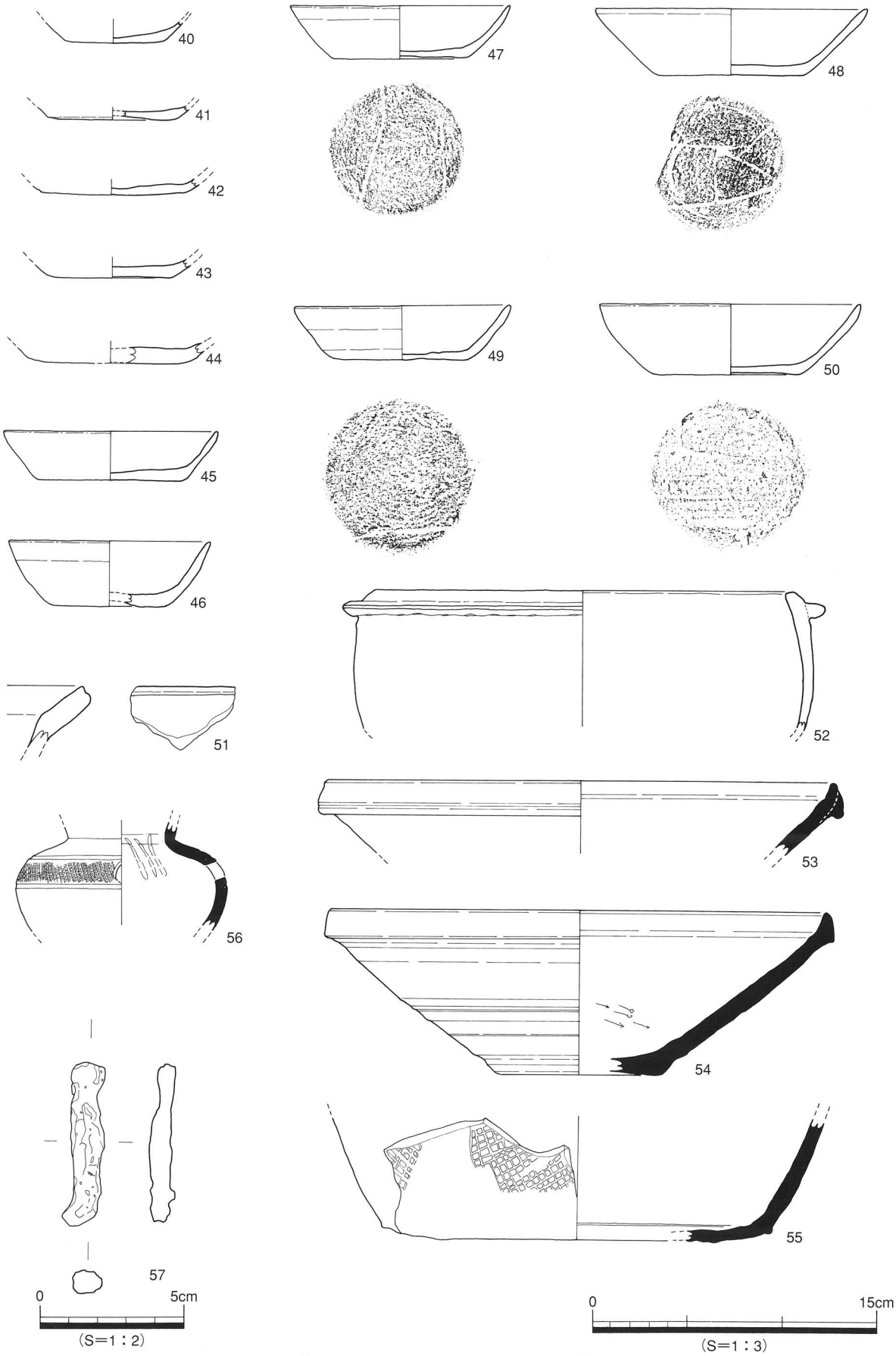
3．溝

ＳＤ201（第30図、図版５・７・９）

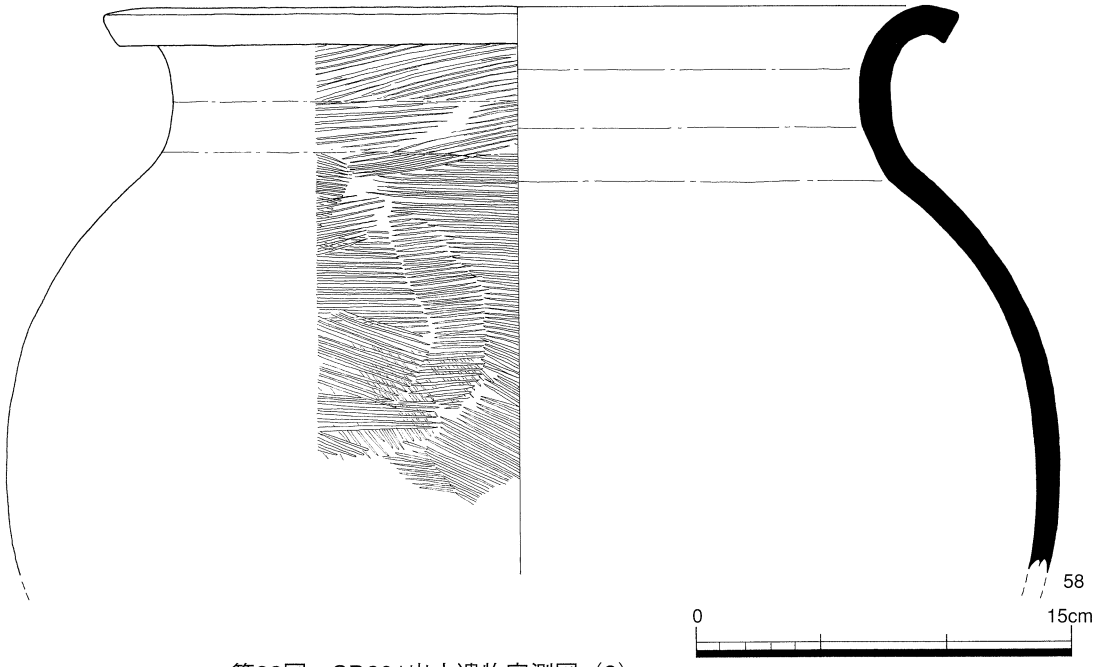
Ⅱ区北半部のＦ４～８区に位置し、東西方向にのびる。規模は、検出長34m、幅0.2～1.5m、深さ17～25cmを測る。横断面形態は緩やかなＵ字形を呈する。溝底は東から西に向かってわずかに傾斜している。溝底の比高差は30cm前後を測る。埋土は二層に大別される。上層は褐灰色系（10ＹＲ4/1）の土、下層は灰色系（7.5Ｙ5/1）の土である。溝底に砂は堆積していない。遺物は上層と下層から出土している。遺物の多くが溝の西側部分から出土した。土師器の皿・坏・三足付羽釜・土鍋、東播系須恵器のすり鉢、魚住窯産の甕、鉄釘がある。同一個体と判断される遺物が各層から出土しており、このことは、本遺構が短期間に埋没したことを示唆するものである。このほかに多量の三波川変成岩類が溝の東半部で出土した。ＳＤ202の南半部とＳＥ201からも同岩類がみられるので、本遺構から出土した石の多くはＳＥ201に用いられたものと考えられる。ＳＤ202や203との合流地点の精査を試みたところ、遺構の切り合い関係は認められなかった。



第30図　SD201測量図



第31図　SD201出土遺物実測図（1）



第32図　SD201出土遺物実測図（2）　（S=1：3）

出土遺物（第31･32図、図版18･19）

40～50は土師器である。40は皿で、口縁部を欠く。外底には糸切りの切り離し痕と板目状の圧痕が残る。41～50は坏である。外底は糸切りの切り離し痕と板目状の圧痕を残すものが多い。45は口縁部の直下が若干厚く、胴下半がわずかに内湾しながらすぼむ。胎土は他に比して良好であり、混和材が少ない。46は比較的厚いつくりである。胴部の立ち上がりは急で、碗に近い形状である。51は土師質の土鍋である。口縁部を指で屈曲させるために、内面には稜線が巡る。52は土師質の三足付きと考えられる羽釜である。口縁部は内湾し、タガは口縁部近くに貼り付けられる。53～56は須恵器である。53～55は中世須恵器である。53と54は東播系のこね鉢である。53は口縁端部が上下に大きく拡張され、「く」字状の形態に近い縁帯を形成する。54は口縁端部が上方に拡張される。内面下半は磨滅が著しく認められ、使用頻度が高かったことを示している。55は甕の底部であろうか。復元底径18.8cm。外面は格子叩きの後、一部ナデ消される。56は瓶である。口縁部と胴部下半を欠く。埋没過程で流入した可能性が高い。57は鉄器。58は中世須恵器の壺である。扁球形と考えられる胴部に、短くやや内傾する頸部がとりつく。口縁部は短く外反し、端部は面取りがなされる。頸～胴部外面には平行叩きが顕著に残る。内面の遺存は悪く、剥落するところが多い。魚住窯産の可能性がある。

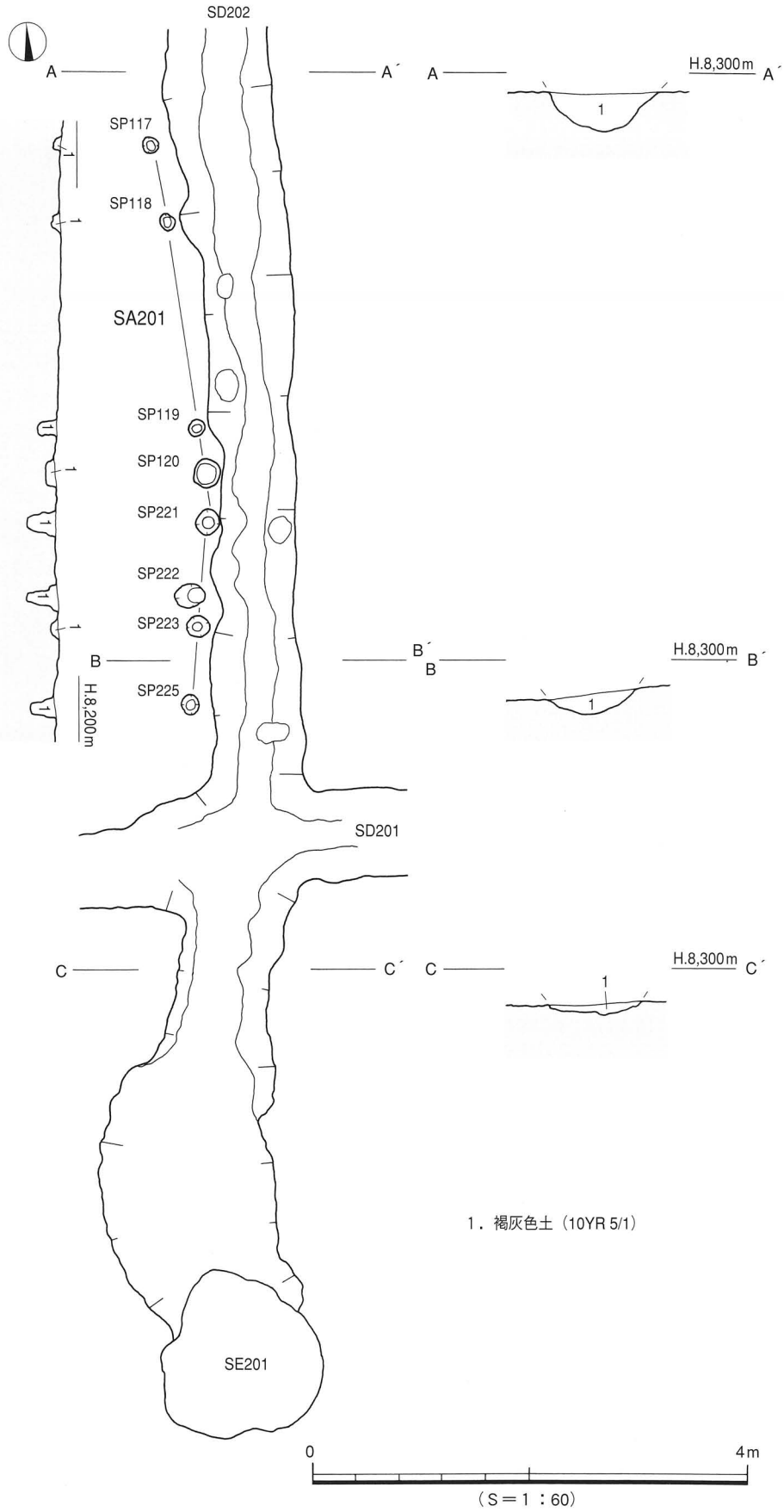
時期：遺物から14世紀前半と考えられる。

ＳＤ202（第33図、図版５・７）

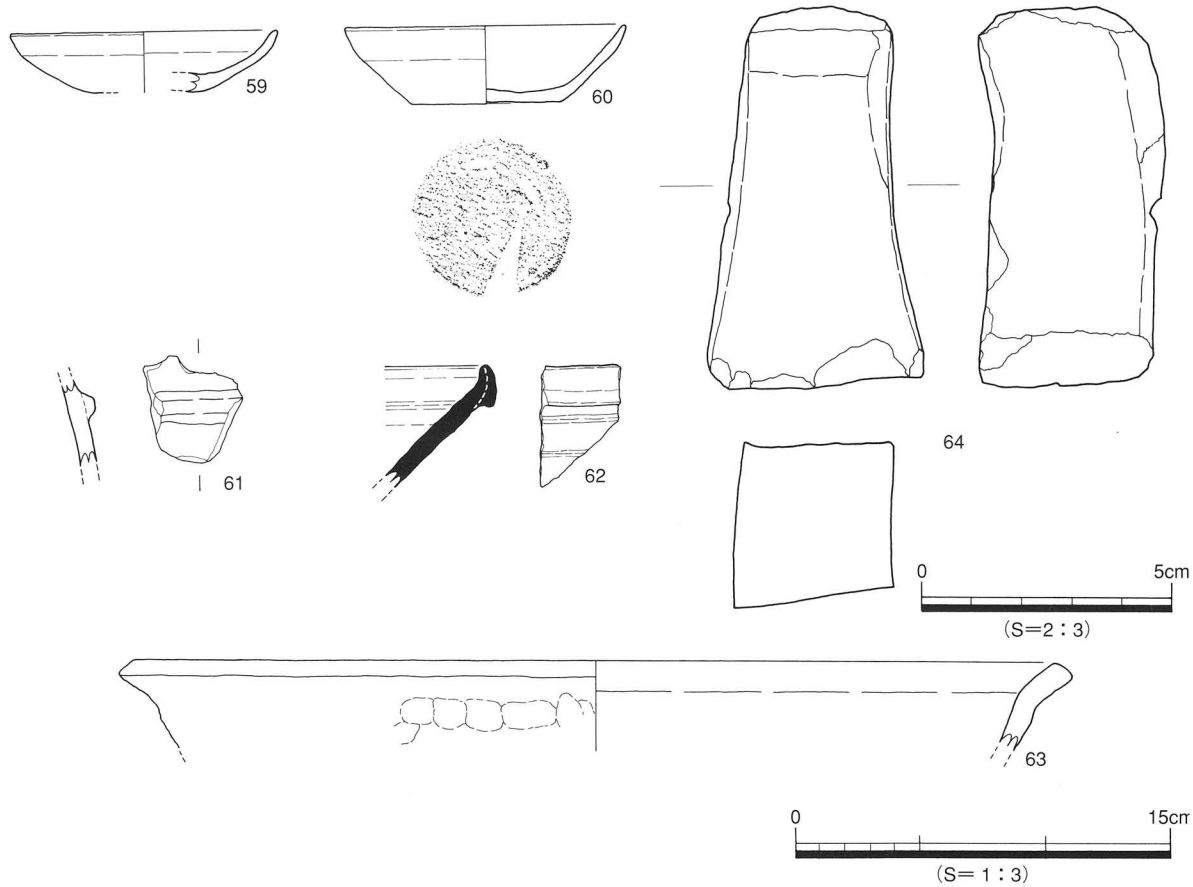
Ⅱ区北東部のＥ・Ｆ７区に位置し、南北方向にのびる。ＳＤ201と直交し、溝の南端はＳＥ201に接続する。規模は、検出長11ｍ、幅0.6～1.6ｍ、深さは10cmを測る。横断面形態は緩やかなＵ字形を呈する。溝底は北から南へ傾斜し、比高差７cmを測る。埋土は褐灰色土（10ＹＲ5/1）である。

遺物は土師器の坏･土鍋、瓦質の三足付羽釜、東播系須恵器のすり鉢、鉄器、手持ちの砥石が出土している。

付帯施設は柵列ＳＡ201である。柵列は溝北部の西側に構築されており、溝と並行の位置関係にある。



第33図　SD202・SA201測量図



第34図　SD202出土遺物実測図

出土遺物（第34図、図版19）

59と60は土師器の坏である。59は底部を欠く。胴部の立ち上がりは緩やかで、口縁部はやや内湾気味におさまる。60は口縁部直下が若干厚く、胴下半部がわずかに内湾しながらすぼまる。外底面には糸切りの切り離し痕がみられる。61は土師質の羽釜で、口縁端部を欠く。62は須恵器のこね鉢である。口縁端部は大きく上下に拡張される。63は土師質の土鍋である。口縁部を指で屈曲させるため、内面に稜線が巡る。復元口径は36cm。64は石英粗面岩製の砥石である。横断面で表現されるように、上下の端面をのぞく４面を機能面として利用している。

時期：遺物、遺構の位置関係、埋土から14世紀前半と考える。

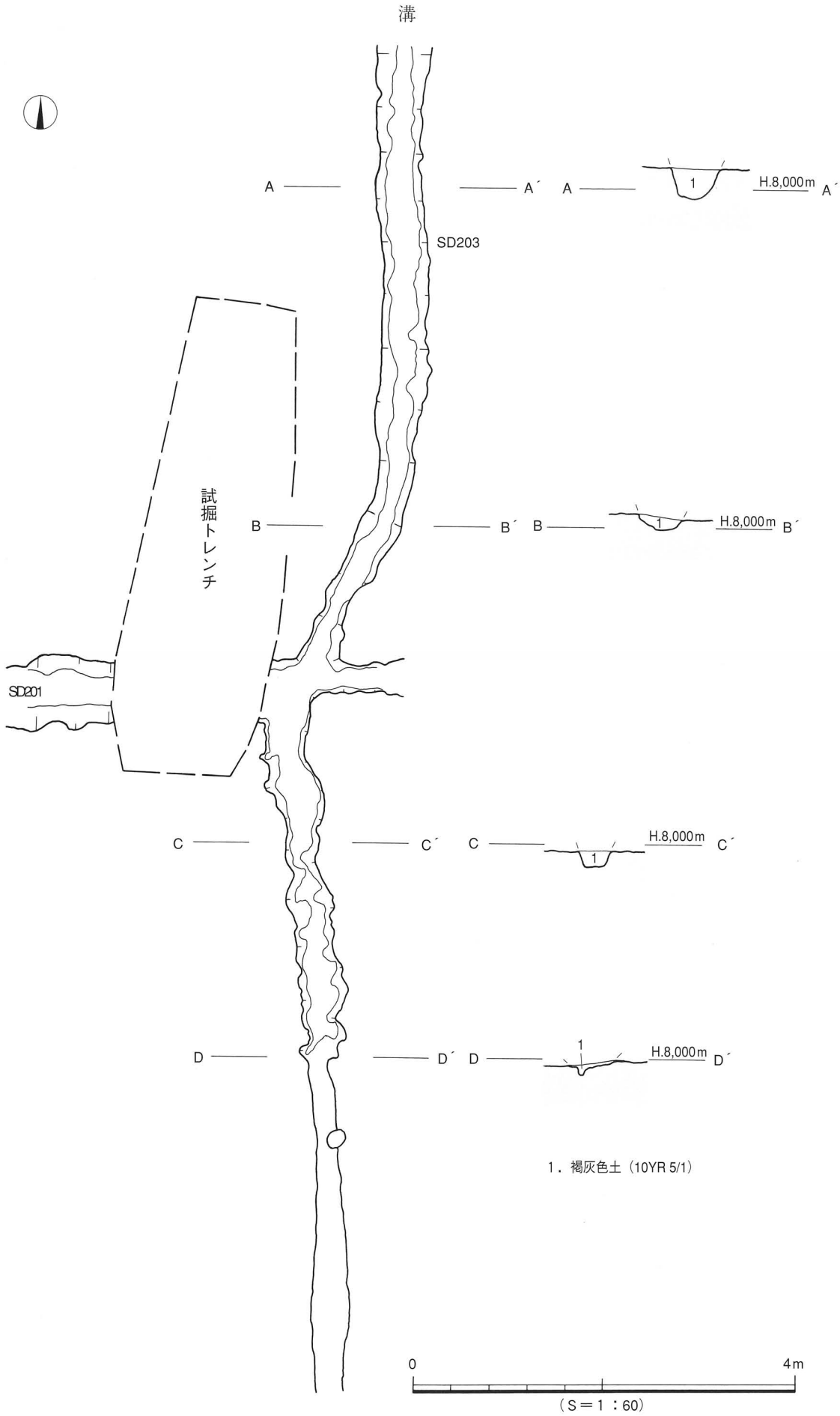
ＳＤ203（第35図、図版５・９）

Ⅱ区北東部のＥ～Ｇ８区に位置する。南北方向に続き、北側は調査区外に延び、南側は削平により途切れる。ＳＤ201と直交し、ＳＤ202とは併行の位置関係にある。規模は、検出長14.5m、幅0.2～0.5m、深さ20cmを測る。横断面形態は逆台形を呈する。溝底は北から南へ傾斜し、比高差８cmを測る。埋土は褐灰色土（10ＹＲ5/1）である。遺物は土師器の皿・坏・三足付羽釜の脚部が出土した。

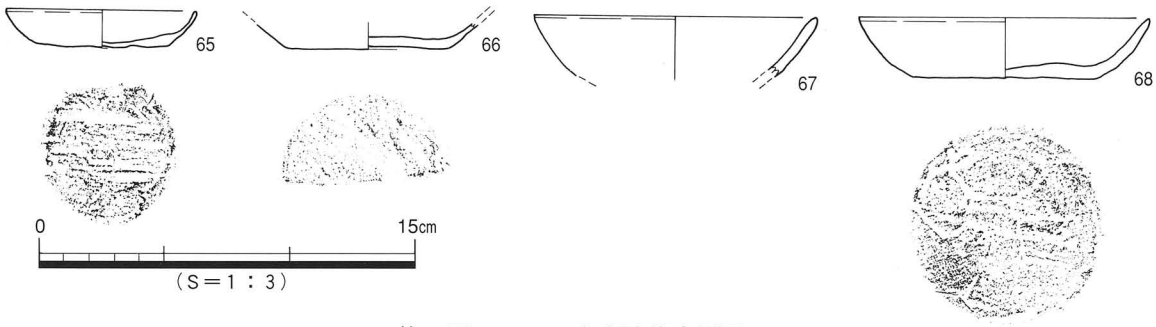
出土遺物（第36図、図版19）

65～68は土師器である。65は皿で、口縁部は内湾して立ち上がる。外底は糸切り離しの痕と板目状の圧痕が残る。66～68は坏である。68は口縁部直下がやや厚く、胴下半がわずかに内湾する。

時期：遺物から時期を特定することは困難である。遺構の配置と埋土からＳＤ201に伴うものと想定



第35図　SD203測量図



第36図　SD203出土遺物実測図

される。したがって、14世紀前半に時期比定される。

ＳＤ204（第37図、図版５）

Ⅱ区中央部よりのＨ５～８区に位置する。東西方向に延び、調査区外に続く。西側は撹乱により切られている。検出段階では、Ｈ７区で７ｍにわたって溝が途切れている。ＳＤ201とは並行の位置関係にあり、11～12ｍの間隔がある。規模は、検出長19ｍ、幅0.3～0.4ｍ、深さ10㎝を測る。溝底は東から西へ傾斜し、比高差は５㎝を測る。埋土は黄灰色土（2.5Y5/1）である。遺物は出土していない。

時期：遺構の配置から14世紀段階に時期比定しておく。

４．柵　列

ＳＡ201（第33図、図版５・７）

Ⅱ区北東部のＥ・Ｆ７区に位置する。ＳＤ202に併設された南北方向の柵列である。柱穴は、北からＳＰ117～120・221～223・225の８基で構成される。規模は全長3.5ｍを測る。柱穴の平面形態は円形を呈する。柱穴の規模は径18～30㎝、深さ７～30㎝を測る。埋土は褐灰色土（10ＹＲ5/1）である。埋土には炭化物の細片が混じる。遺物は出土していない。

時期：ＳＤ202に併設されていることから、14世紀前半と想定される。

ＳＡ202（第18図、図版５・７）

Ⅱ区北端部のＥ・Ｇ８区に位置する。掘立205の東に併設された南北方向の柵列である。柱穴は、北からＳＰ82・98・102・103の４基で構成される。規模は全長4.9ｍを測る。柱穴の平面形態は円形を呈する。柱穴の規模は径20～30㎝、深さ12～41㎝を測る。埋土は褐灰色土（10ＹＲ6/1）である。遺物はＳＰ103から土師器が出土したが、砕片のため図化できない。

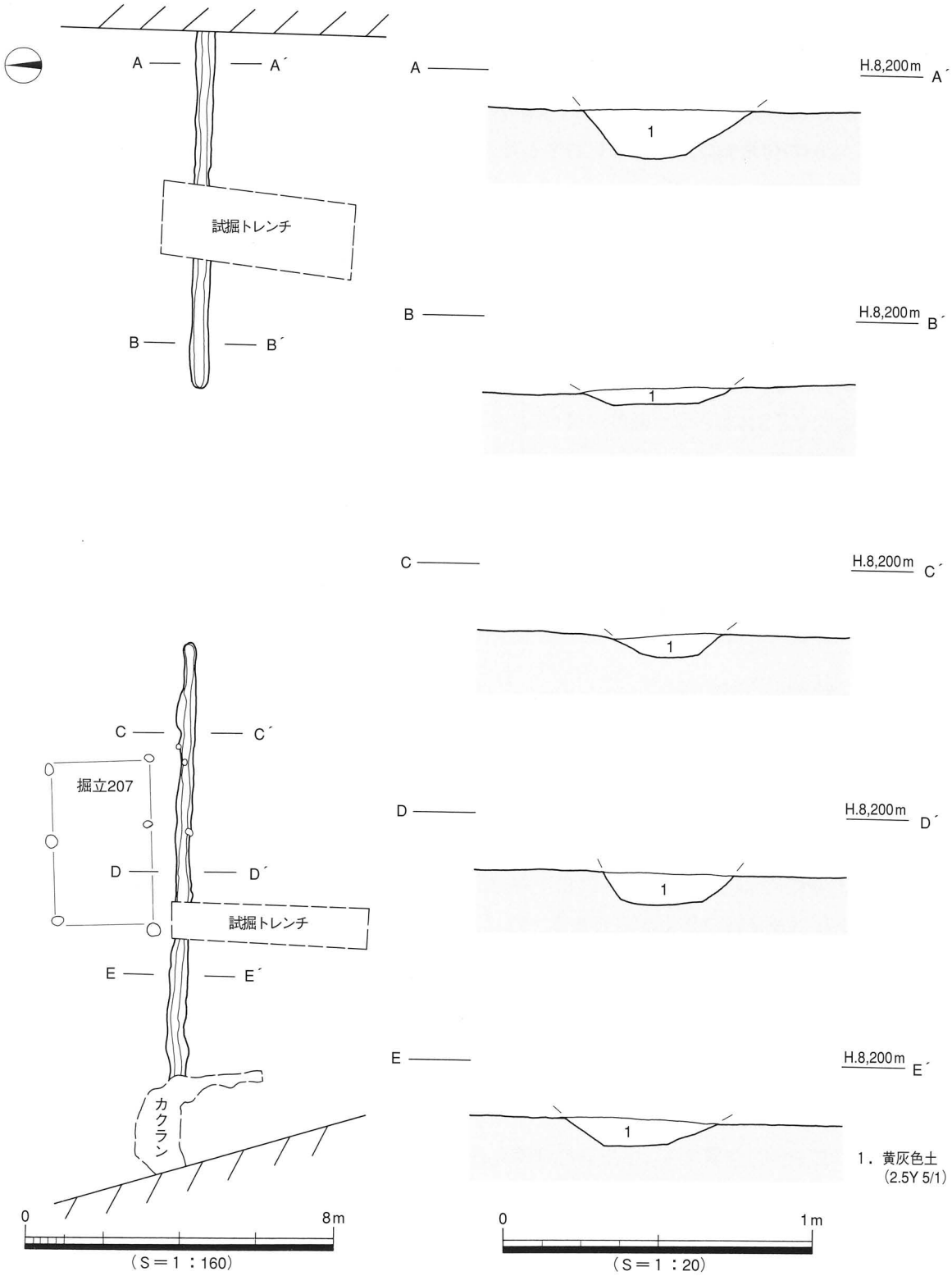
時期：掘立205の付帯施設から14世紀前半と考えられる。

ＳＡ203（第19図、図版５・７）

Ⅱ区中央北端部のＥ・Ｆ６区に位置する。掘立206の東に併設された南北方向の柵列である。柱穴は、北からＳＰ６・48・257・72・75・79の６基で構成される。規模は全長4.5ｍを測る。柱穴の平面形態は、円形を呈する。柱穴の規模は径10～20㎝、深さ４～30㎝を測る。埋土は褐灰土（10ＹＲ6/1）である。遺物はＳＰ６から薄い剥片状の石が20点余り出土した。

時期：掘立206の付帯施設から14世紀前半と考えられる。

柵　　列



第37図　SD204測量図

ＳＡ204（第18図、図版５・７）

Ⅱ区中央北端部のＥ・Ｆ５区に位置する。掘立206の西に併設された南北方向の柵列である。柱穴は、北からＳＰ36・55・58の３基で構成される。規模は全長2.8mを測る。柱穴の平面形態は円形を呈する。柱穴の規模は径10～15cm、深さ１～９cmを測る。柱穴の遺存が浅いことから、柵列がＳＰ36の北に延びる可能性がある。埋土は褐灰色土（10ＹＲ6/1）である。遺物は出土していない。

時期：掘立206の付帯施設から14世紀前半と考えられる。

ＳＡ301（第38図、図版11）

Ⅲ区西部のＨ～Ｋ10区に位置する。南北方向の柵列である。柱穴は、北からＳＰ304・311・321・324・329・336・344・387・391・408・418の11基で構成される。規模は全長20mを測る。柱穴の平面形態は円形を呈する。柱穴の規模は径10～20cm、深さ10～20cmを測る。ＳＰ304はＳＲ301を切り込んで構築されている。これは、柱穴がＳＲ埋没後に構築されたことを示している。埋土は褐灰色土（10ＹＲ5/1）である。遺物はＳＰ321からは土師器の皿・坏、ＳＰ324からは土師器の皿と須恵器こね鉢が出土した。

出土遺物（第38図）

69はＳＰ324出土の須恵器こね鉢である。

時期：遺物から14世紀代と考えられる。

５．土　坑

ＳＫ201（第39図、図版５・７）

Ⅱ区北部のＥ・Ｆ７区に位置する。平面形態は隅丸長方形を呈する。規模は東西4.2m、南北2.3m、深さ15cmを測る。横断面形態は浅い皿状を呈する。埋土は褐灰色土（10ＹＲ6/1）で炭化物粒が混じる。

遺物は土師器の土鍋・鉢、瓦質の三足付き羽釜が出土した。

出土遺物（第40図、図版20）

70～72は土師質の土器である。70・71は土鍋で、70は折り曲げにより口縁部を成形し、内面には稜が付く。外面には炭化物の付着がみられる。71は直口する口縁部をもつ。口縁端部には横ナデ調整が施され、内側にわずかにつまみだしたような断面形態を呈する。72は三足付き羽釜の口縁部である。口縁部が内傾して立ち上がる。口縁部から少し下がった位置にタガが貼付される。

時期：遺物から14世紀前半と考えられる。

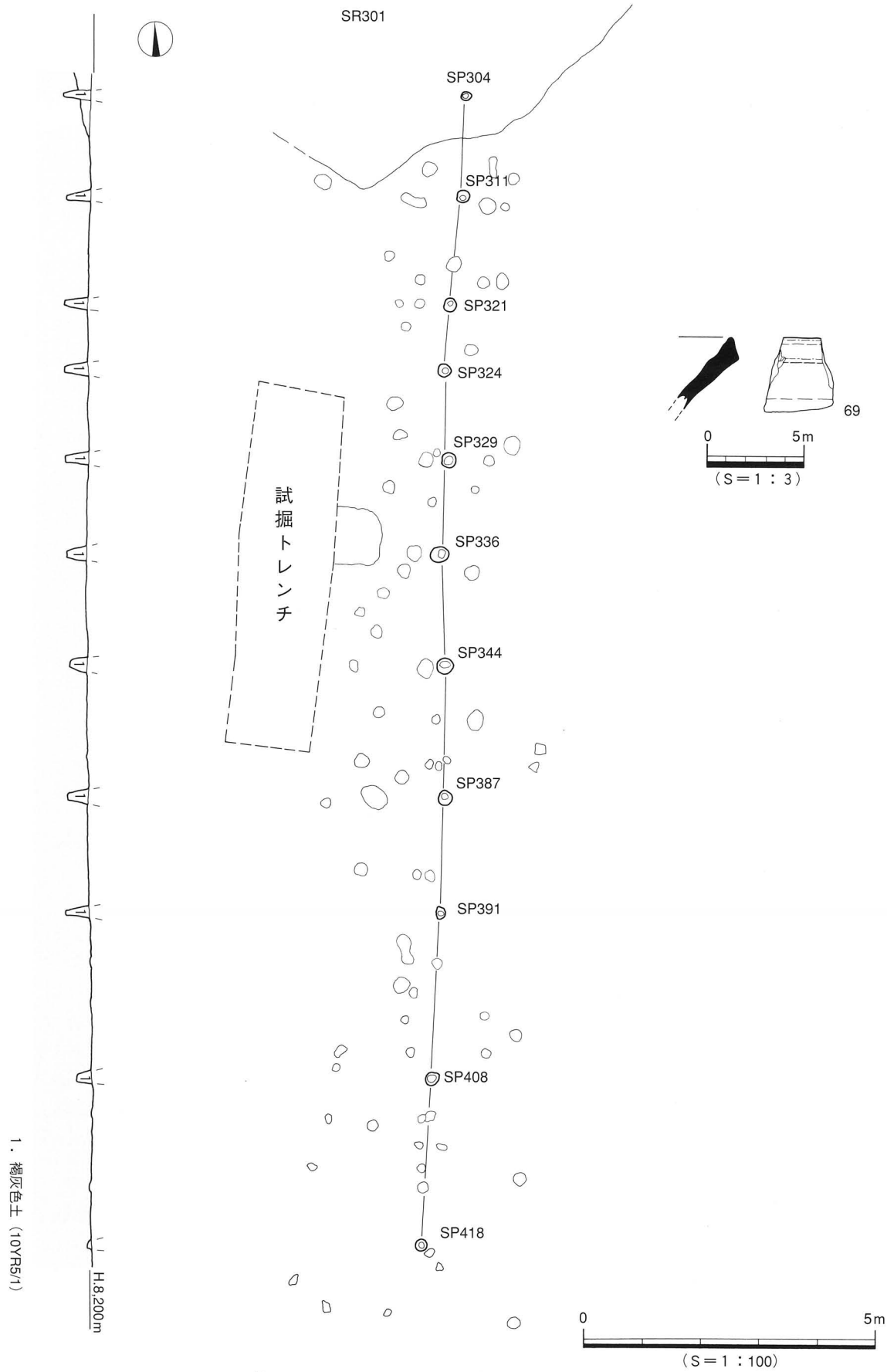
ＳＫ203（第41図、図版５～７）

Ⅱ区北部のＥ７区に位置する。平面形態は隅丸長方形を呈するものと考えられる。規模は東西1.1m、南北検出長1.25m、深さ30cmを測る。横断面形態は逆台形を呈する。埋土は褐灰色土（10ＹＲ6/1）である。遺物は土師器の坏と須恵器こね鉢が出土した。

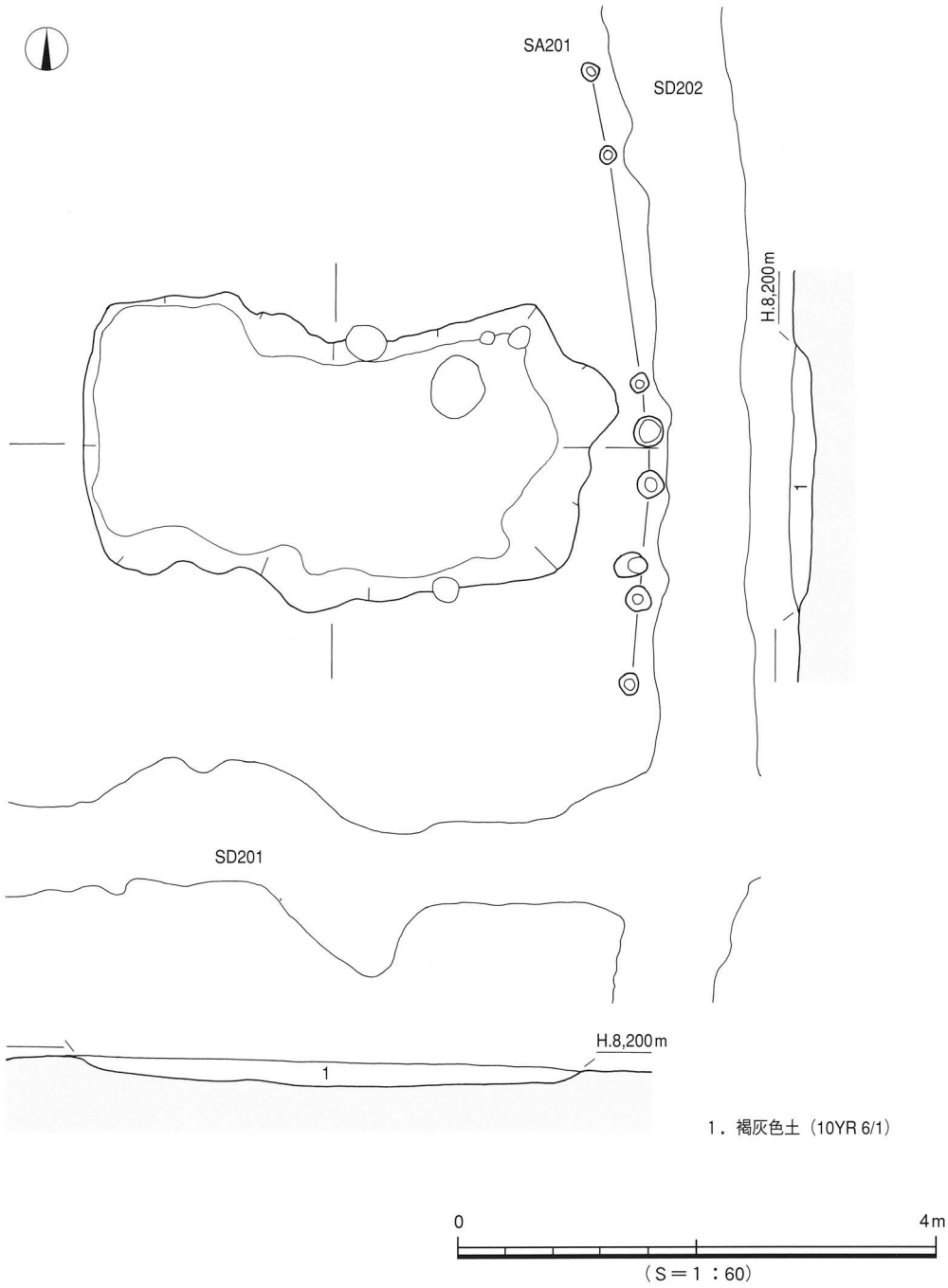
出土遺物（第41図、図版20）

73・74は土師器の坏である。いずれの外底にも糸切り離しの後、板目状の圧痕が付く。75は須恵器のこね鉢である。口縁端部は上方に大きく拡張される。

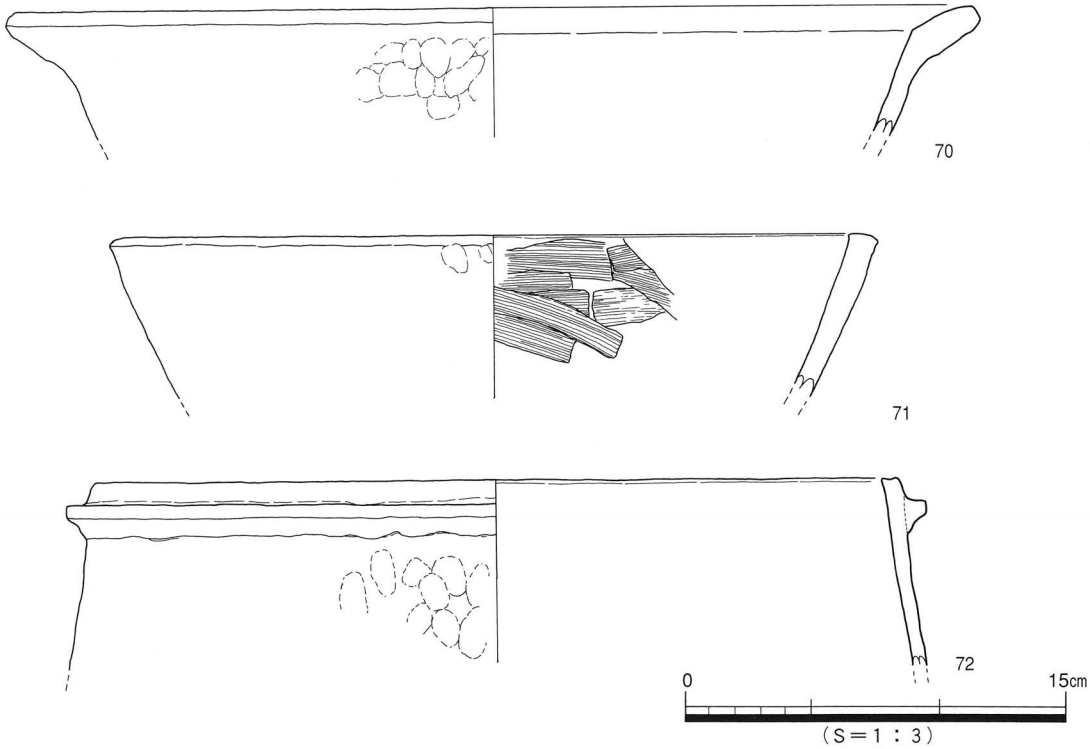
時期：遺物と埋土から14世紀前半と考えられる。



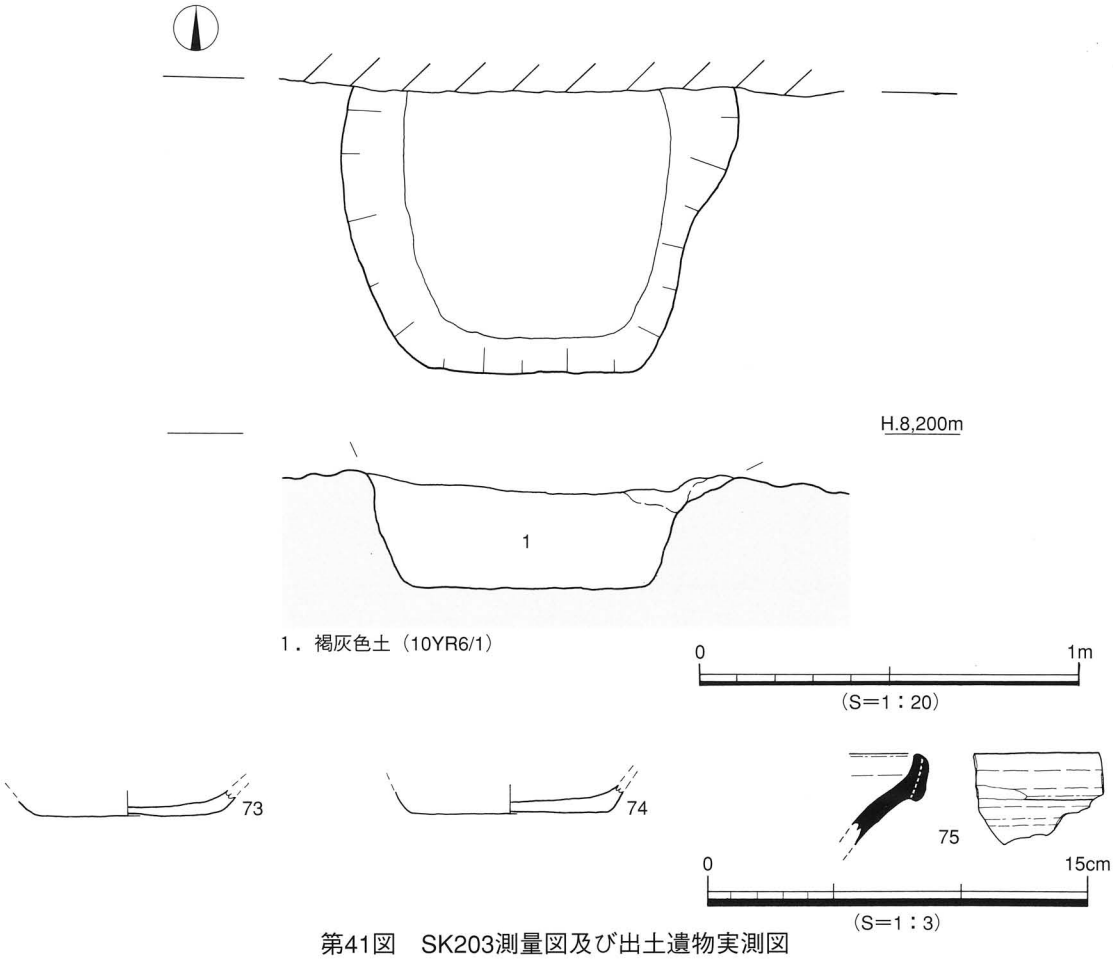
第38図　SA301測量図及び出土遺物実測図



第39図　SK201測量図



第40図　SK201出土遺物実測図



第41図　SK203測量図及び出土遺物実測図

6．性格不明遺構

ＳＸ201（第42図、図版５･10）

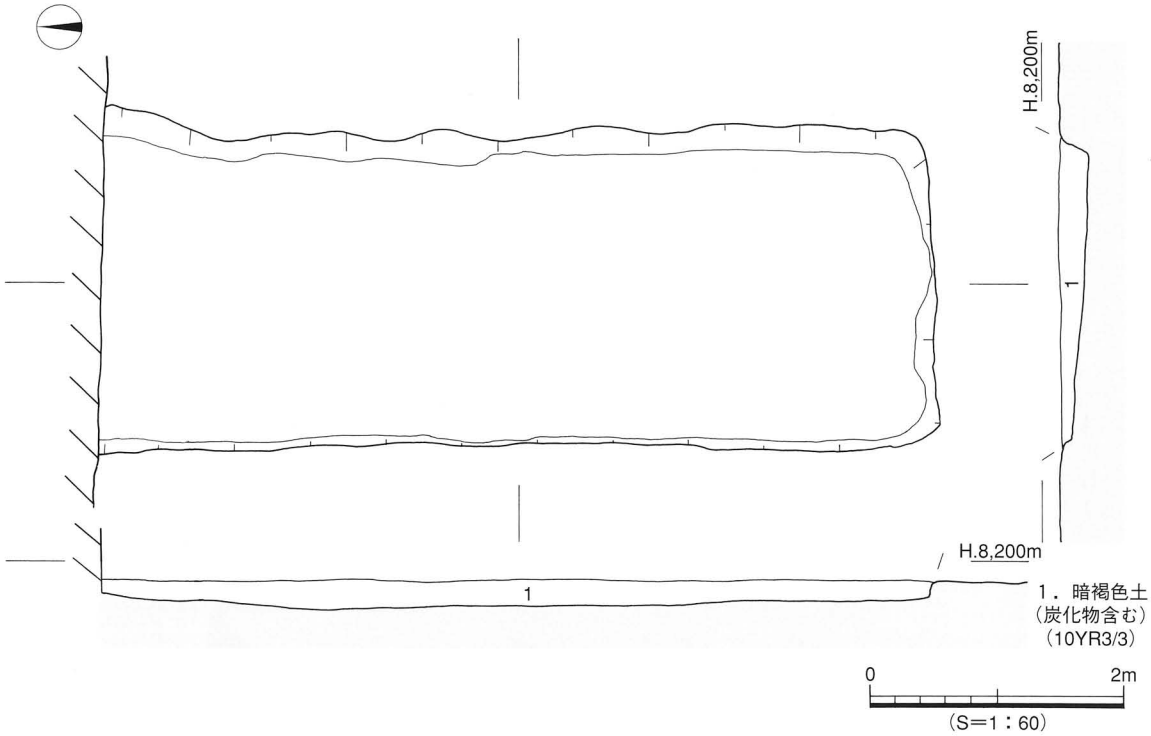
Ⅱ区北部のＥ･Ｆ８区に位置する。北は調査区外へ続く。平面形態は長方形を呈するものと考えられる。規模は東西2.4ｍ、南北検出長6.6ｍ、深さ20㎝を測る。断面形態は逆台形を呈する。床面は平担のところが多く、北側の一部に凹凸がみられた。埋土は炭化物を多量に含んだ暗褐色土（10ＹＲ3/3）である。

遺物は北側で多く出土した。遺物には土師器の皿･坏、瓦器碗、須恵器のこね鉢、貿易陶磁器、鉄器、鉄滓、台石がある。

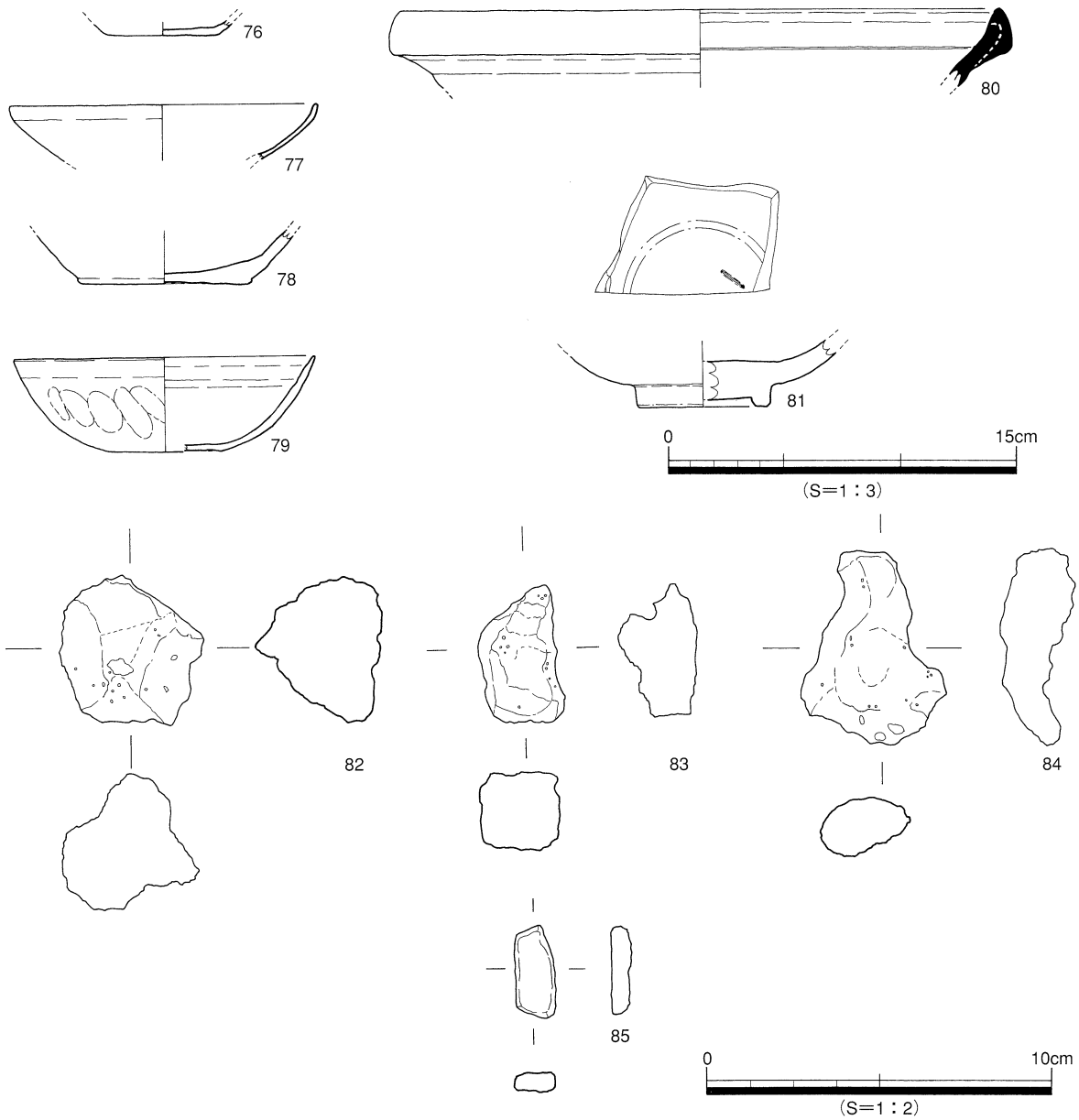
出土遺物（第43図、図版20）

76～78は土師器である。76は皿である。口縁部を欠く。外底には板目状の圧痕が残る。77･78は坏である。77は胴部が直線的に立ち上がり、口縁部は強いヨコナデによりわずかに内傾する。78は底部にわずかながら立ち上がりがみられる。79は瓦器碗で、口縁部がやや丸みをもちながら立ち上がる。胴部外面には指頭痕がわずかにみられる。内外面には焼成の差異が認められ、外面は口縁部付近が乳灰色、底部側が黒色を呈し、内面は大半が乳灰色で、底部近くに黒色が一部みられる。80は東播系の須恵器こね鉢である。口縁部が上方に拡張される。口端の外面には、自然釉が付着する。81は貿易陶磁器で、龍泉窯系青磁碗である。輪高台をもつ。胎土はきわめて良好であり、精製されている。82～85は鉄滓である。

時期：遺物から14世紀前半と考えられる。



第42図　SX201測量図



第43図　SX201出土遺物実測図

7．柱　穴

ＳＰ231（第44図、図版10）

Ⅱ区北東部のＥ７区に位置する。平面形態は不整円形を呈する。規模は径24cm、深さ27cmを測る。第Ⅵ層を精査中に遺物（86）を確認した段階では、遺構の輪郭が確定できなかった。第Ⅵ層の精査を進めたところ遺物が重なった状態で出土した。遺構の輪郭が確定したのは、第Ⅶ層上面である。本遺構は本来、第Ⅵ層上面で構築されたものである。

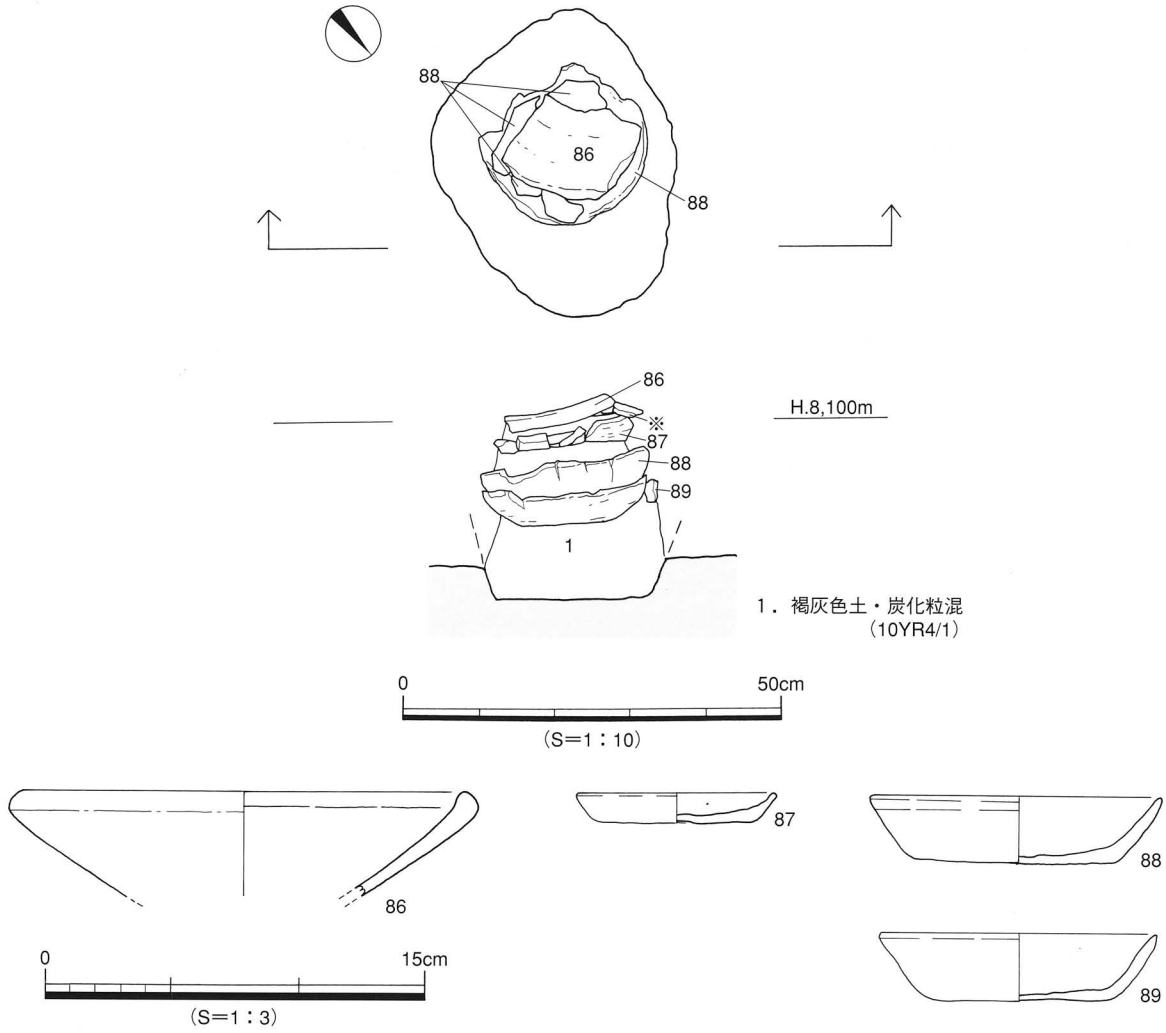
遺物はすべて土師器で、下から坏（89）、坏（88）、皿（87）、坏、鉢（86）の順である。坏と皿を正置した形で積み上げ、その上に打ち欠いた鉢の口縁部が置かれ、口縁部は内面を上にしていた。鉢（86）は遺構の形状に合うように打ち欠かれ、９×７cmの大きさに整形されている。遺物の取り上げ

段階の所見として、※と87の取り上げ後に、炭化した板が確認されたことを付記しておく。遺存が悪く、炭化材の取り上げはできなかった。本例は、土器を用いた柱穴内祭祀とみることができる。

出土遺物（第44図、図版21）

86～89は土師器である。このほかに図化できないが坏が１個体出土した。これは86と88の間に位置していた。86は鉢で、口縁部片である。口縁端部がやや肥厚し、内端部が内側に摘み上げられている。端部は丸くおさめられる。内面の調整は丁寧なナデ仕上げである。胎土は長石と石英を含むが概して良い。形態より、他地域からの搬入品、ないしは模倣品と判断される。87は皿である。外底には、回転糸切りの切り離し痕と板目状圧痕がみられる。88･89は坏である。いずれも器面の遺存が悪く、磨滅が著しい。そのため、器面の調整が確認できない。

時期：遺物から14世紀前半と考えられる。



第44図　SP231測量図及び出土遺物実測図

8．包含層

包含層は各区で確認された。包含層の遺存はⅡ・Ⅲ区が良好である。とくに調査区の北半における遺存が良好で、遺物の出土も北半が多い。ここでは、包含層、耕作土、表採資料を取り上げて報告する。

Ⅰ区出土遺物（第45図、図版22）

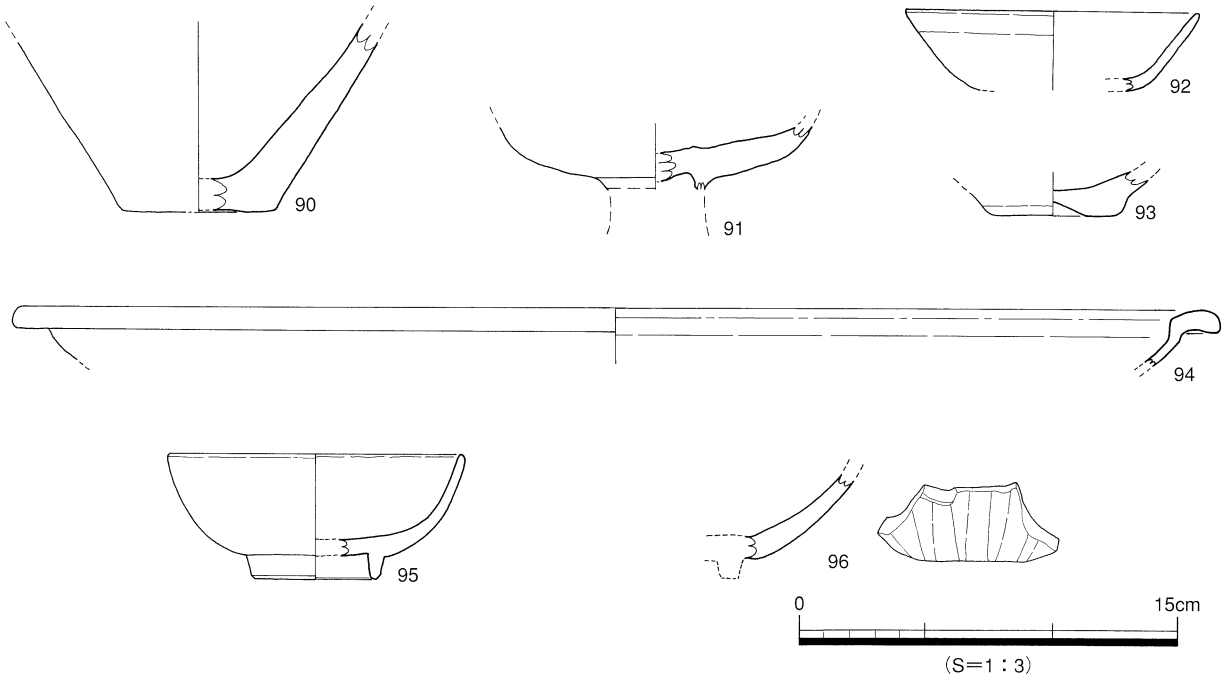
90・91はⅣ-ｅ層出土の弥生土器である。90は甕の底部。平底で、胴下半部の立ち上がりは直線的である。91は高坏で、坏部の底部片である。92はⅣ-ｂ層出土の土師器の坏である。底部を欠く。93はⅡ-ａ②層出土の弥生土器で、壺の底部である。中央がやや凹んだ上げ底を呈する。94はⅡ-ａ②層出土の内耳鍋である。口縁は大きく外反し、短い。口縁端部は丸くおさまる。95はⅠ－ｂ層出土の陶磁器の碗。96は表採品で、貿易陶磁器である。龍泉窯系青磁の碗で、外面には鎬連弁文が施される。

Ⅱ区出土遺物（第46・47図、図版22）

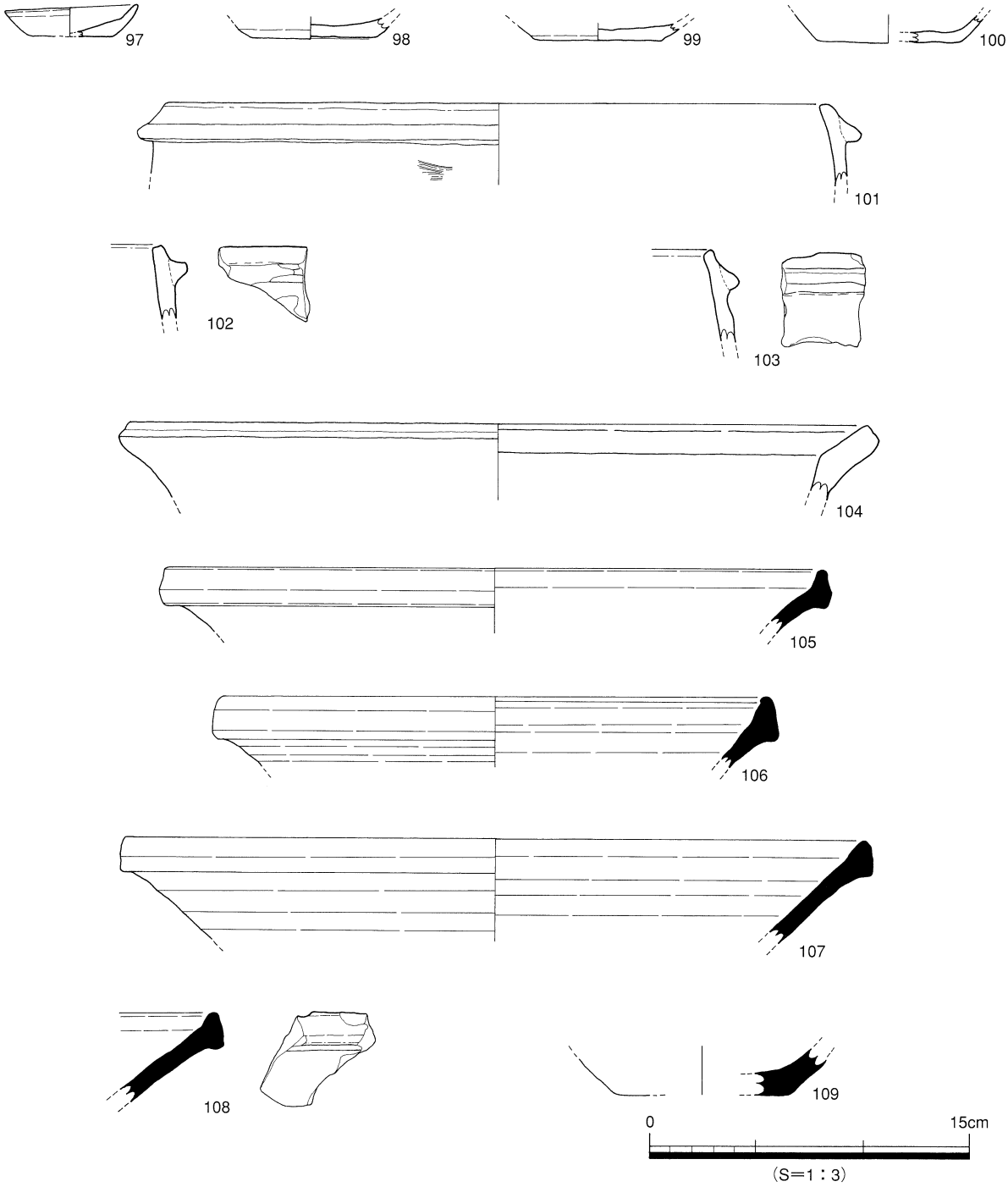
すべてがⅥ層出土である。97は土師器の小皿で、98～100は土師器の坏である。101～103は土師器の三足付き羽釜である。101はＦ８区出土品で、口縁は内湾し、タガは口縁近くに貼付られる。104はＦ８区出土の土師器の土鍋である。口縁部を指で屈曲させるために、内面には稜線が巡る。105～108は中世須恵器のこね鉢、109は中世須恵器の底部である。110～114は鉄滓で、110は大型の碗形滓である。表面には細かい気泡が多くみられる。

Ⅲ区出土遺物（第47図、図版22）

すべてがⅥ層出土である。115は縄文土器である。深鉢の肩部片で、内外面には横方向の条痕調整が施される。出土地点からＳＲ301に伴う可能性が高い。116～118は土師器の皿、119・120は坏である。



第45図　Ⅰ区包含層出土遺物実測図



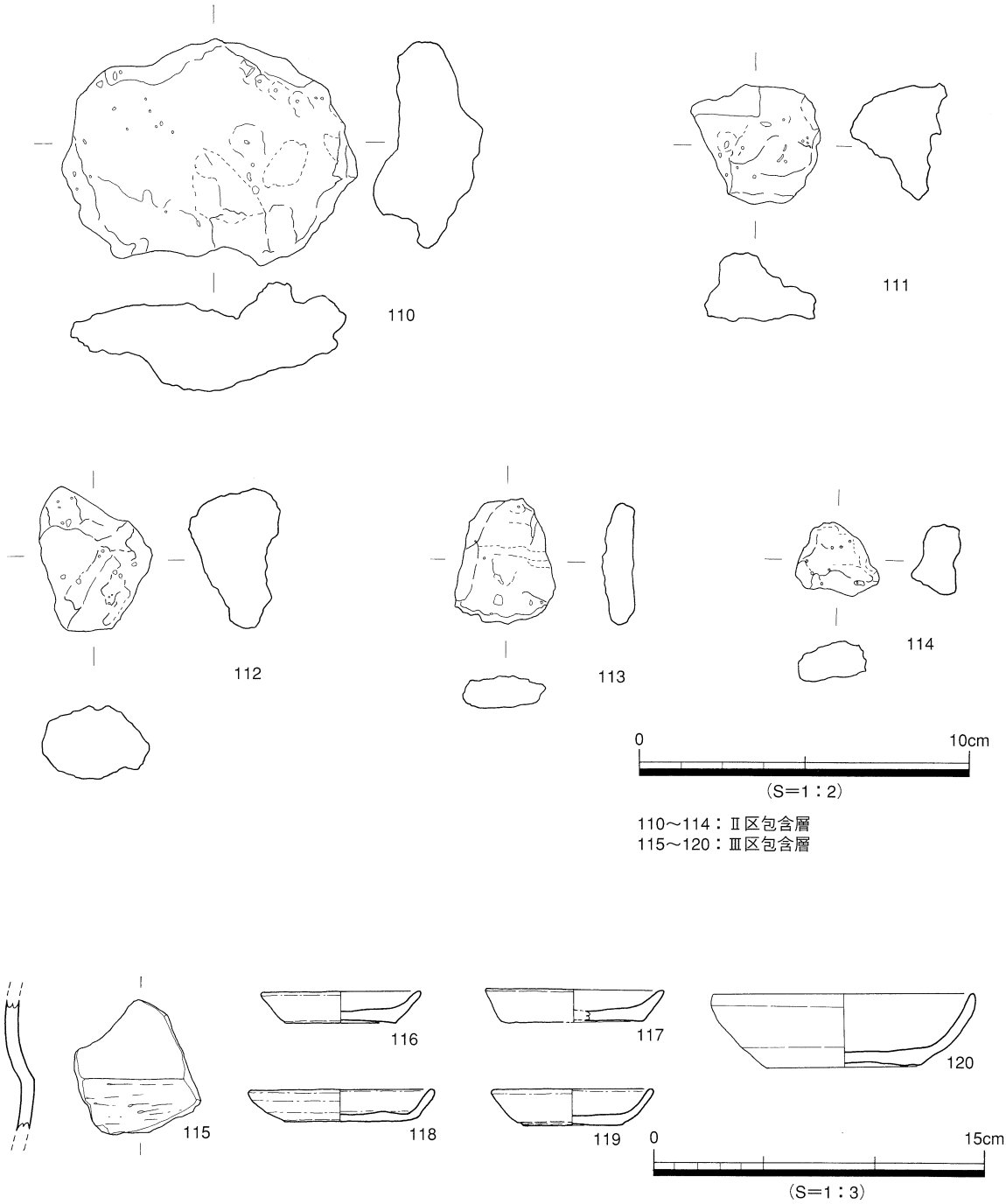
第46図　Ⅱ区包含層出土遺物実測図(1)

第Ⅵ章　近世以降の記録

1．掘立柱建物址

掘立201（第48図、図版５）

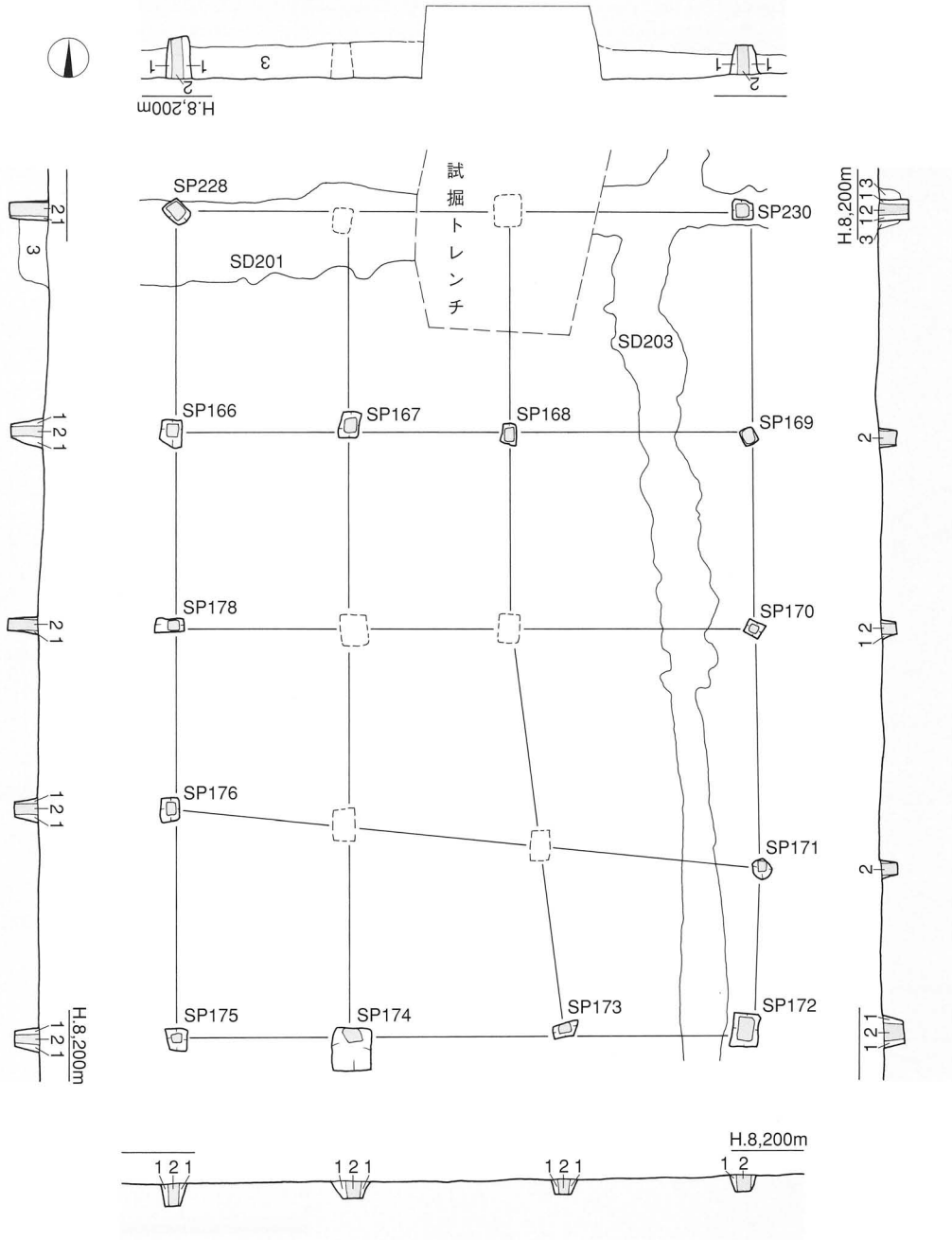
Ⅱ区北東部のＦＧ８区に位置し、ＳＤ201を切る。梁間３間、桁行４間の南北に細長い総柱建物である。柱穴はＳＰ166～176･178･228･230の14基で構成される。建物規模は、梁間の全長が4.5～4.8m、



第47図　Ⅱ区包含層出土遺物実測図(2)及びⅢ区包含層出土遺物実測図

桁行の全長が6.6～6.7mである。柱穴の平面形態は方形と長方形である。規模は一辺10～34cm、深さ15～32cmを測る。埋土は灰黄褐色土（10ＹＲ6/2）である。各柱穴で柱痕跡を確認することができた。柱痕跡の埋土は、にぶい黄橙色土（10ＹＲ7/3）である。柱痕跡は一辺14cmの正方形である。遺物は出土していない。

時期：柱穴の平面形態、柱痕跡の形態、埋土が他の中世遺構と異なることと、本遺構がＳＤ201を切ることから近世以降と想定しておく。



1．灰黄褐色土（10YR6/2）
2．にぶい黄橙色土（10YR7/3）…柱痕
3．褐灰色土（10YR4/1）SD201埋土

0　4m
（S＝1：60）

第48図　掘立201測量図

遺構・遺物一覧　－凡例－

（1）以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の観察一覧である。
作成は加島が担当した。

（2）遺物観察表の各掲載については、以下の通りである。

法　量　欄…（ ）：復元推定値

形態・施文　欄…土器の各部名称を略記した。
例）口→口縁部、胴→胴部。

胎土・焼成　欄…胎土欄では混和剤を略記した。
例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、金ウ→金雲母、精→精製土。（　）中の数値は、混和剤粒子の大きさを示す。
例）砂・長（1～4）、多→「1～4㎜大の砂粒・長石を多く含む」である。
焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良

表2　自然流路一覧

流路(SR)	地　区	断面形	規　模（m）長さ×幅×深さ	方　向	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
201	J5～L8区	U字形	23.5×19.5×0.2～0.7	西～東	黒褐色粘質土 灰白色砂質土	縄文土器 弥生土器 石器	縄文晩期～ 弥生終末	
301	G11～H12区	緩やかなU字形	10×4.5×0.2	北東～南西	黒褐色粘質土	石器	縄文晩期	

表3　掘立柱建物址一覧

掘立	規　模（間）	方　向	桁　行		梁　行		方　位	床面積（㎡）	時　期	備　考
			実長（m）	柱間寸法（m）	実長（m）	柱間寸法（m）				
201	3×4	南北棟	6.7	1.72・1.38・1.40・1.60・1.12・1.80・1.44・1.74	4.54	1.20・1.50・1.30	N－S	30.4	江戸期か	
202	2×3	東西棟	7.9	2.34・2.44・2.40・2.40・2.60・2.50	3.3	1.60・1.30・1.40・1.40	E－3.5°－N	26.0	14C代	SE201の付帯施設の可能性がある
204	1×3	東西棟	4.1	1.12・0.18・1.90・2.30・0.56・0.62	1.32	1.32・1.40	E－3.5°－N	5.4	14C前半	SK202が伴う
205	1×3	南北棟	5.4	1.46・1.44・1.60・1.36・1.36・1.80	2.7	2.12・2.70	N－1°－W	14.5	14C前半	SA202が伴う
206	1×3	南北棟	5.5	1.50・1.40・1.76・1.60・1.34・1.70	3	0.66・0.96・0.36	N－S	16.5	14C前半	SA203・204が伴う SK204が伴う
207	1×2	東西棟	4.1	2.40・1.50・1.76・1.54	2.4	2.14・2.40	E－3.5°－N	9.8	14C前半	
208	1×2	東西棟	4.7	2.56・1.96・2.50・2.08	2.9	2.86・2.90	E－4°－N	13.6	14C前半	
301	1×2	東西棟	3.7	1.44・1.94・2.14・1.34	1.5	1.70・1.50	E－2°－N	5.5	14C代	
302	1×1	南北棟	1.6	1.54・1.60	1.2	1.20・1.46	N－2°－W	1.9	14C代	SE304の付帯施設

表4　井戸一覧

井戸(SE)	地　区	平面形	断面形	規　模（m）長さ（長径）×幅（短径）×深さ	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
201	G7区	楕円形	二段掘り	1.6×1.45×1.37	灰白色土を含め①～④層	土師器 須恵器 貿易陶磁器	14C前半	石組み，曲物が伴う
301	J 10区	不整円形	二段掘り	1.34×1.25×1.50	黄色シルト質土を含め①②層	曲物	14C代	三段の曲物
302	I 11区	円形	二段掘り	1.0×0.5	暗オリーブ色粘質土	土師器 須恵器	14C前半	試掘トレンチに切られる
303	H・I 10区	円形	二段掘り	1.35×1.15×0.66	淡黄色粘質土を含め1～3層	土師器	14C代	曲物
304	I 10区	楕円形	二段掘り	1.85×1.00×1.30	黄色シルト質土を含め1～3層	土師器 モモ核	14C代	

表5　溝一覧

溝(SD)	地　区	断面形	規　模(m) 長さ×幅×深さ	方　向	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
201	F4～8区	緩やかなU字形	34×0.2～1.5×0.17～0.25	東西	褐灰色土 灰色土	土師器 須恵器	14C前半	
202	E・F7区	緩やかなU字形	11×0.6～1.6×0.10	南北	褐灰色土	土師器 須恵器	14C前半	SA201が伴う
203	E～G8区	逆台形	14.5×0.2～0.5×0.20	南北	褐灰色土	土師器	14C前半	
204	H5～8区	緩やかなU字形	19×0.3～0.4×0.10	東西	黄灰色土		14C代	

表6　柵列一覧

柵列(SA)	規　模(間)	方　向	実長(m)	柱間寸法(m)	柱穴規模 径×深さ(m)	時　期	備　考
201	7	南北	3.5	SP117・118間は0.6　SP118・119間は1.8 SP119・120間は0.2　SP120・221間は0.18 SP221・222間は0.5　SP222・223間は0.1　SP223・225間は0.54	0.18～0.3×0.07～0.3	14C前半	SD202の付帯施設
202	3	南北	4.9	SP82・98間は1.2　SP98・102間は2.0 SP102・103間は1.1	0.2～0.3×0.12～0.41	14C前半	掘立205の付帯施設
203	5	南北	4.5	SP6・48間は1.38　SP48・257間は1.1 SP257・72間は0.8　SP72・75間は0.8 SP75・79間は0.4	0.1～0.2×0.04～0.3	14C前半	掘立206の付帯施設
204	2	南北	2.8	SP36・55間は1.4　SP55・58間は1.3	0.1～0.15×0.01～0.09	14C前半	掘立206の付帯施設
301	10	南北	20	SP304・311間は1.54　SP311・321間は1.64　SP321・324間は0.9 SP324・329間は1.3　SP329・336間は1.4　SP336・344間は1.6 SP344・387間は2.0　SP387・391間は1.7　SP391・408間は2.6　SP408・418間は2.6	0.1～0.2×0.1～0.2	14C代	N－2°－E

表7　土坑一覧

土坑(SK)	地　区	平面形	断面形	規　模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
201	E・F8区	隅丸長方形	浅い皿状	4.2×2.3×0.15	褐灰色土	土師器 瓦質土器	14C前半	
202	E7区	隅丸長方形	逆台形	0.7×0.5×0.16	暗褐色土	土師器	14C前半	掘立202に伴う炉
203	E8区	隅丸長方形	逆台形	1.25×1.1×0.3	褐灰色土	土師器 須恵器	14C前半	
204	E6区	不整円形	逆台形	0.50×0.35×0.60	暗褐色土	土師器 須恵器	14C前半	掘立206に伴う 貯蔵穴

表8　性格不明遺構一覧

性格不明遺構(SX)	地　区	平面形	断面形	規　模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積(㎡)	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
201	F7区	長方形	逆台形	6.6×2.4×0.2	15.8以上	暗褐色土	土師器.瓦器碗. 須恵器.貿易陶磁器	14C前半	

表9　SR 201出土遺物観察表　　土製品　　(1)

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		胎　土	焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
1	深鉢	残高　3.7	口縁端面に「D」字状の刻目。 口縁近くに突帯を巡らし、頂部を「D」字状に刻む。	マメツ	ヨコナデか？	長・石(1～2) 多く含む	○		14
2	深鉢	残高　5.5	口縁部を欠く。頸部は屈曲外反する。	横方向の条痕	ナデ	長・石(1～2) 多く含む	○		
3	浅鉢	口径(35.6) 残高　4.5	肩部で屈曲し、口縁部は「く」字状を呈し、端部が内面上方につまみ上げられる。	ていねいなヨコミガキ	ヨコミガキ	長(1)	◎		14
4	浅鉢	口径(35.0) 残高　3.0	肩部で屈曲し、口縁部は「く」字状を呈し、端部が内面上方につまみ上げられる。	ていねいなヨコミガキ	ヨコミガキ	長(1)	◎		14
5	浅鉢	残高　4.8	肩部で屈曲する。	ていねいなヨコミガキ	ていねいなヨコミガキ	精	◎		14
6	甕	残高 10.0	外面に煤の付着がみられる。	タテハケ(17本/cm)	ナナメハケ(12本/cm)	長・石(1～2)	◎		14

表10　SR 201出土遺物観察表　　土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
7	甕	残高 16.8	肩部の張りは弱く、底部は小さいボタン状を呈する。	タタキ→タテハケ	ハケメ(8本／cm)	長・石・金ウ(1~2) 多く含む	◎		14
8	甕	底径 4.7 残高 7.0	くびれをもつ上げ底。ミニチュアか？	タテミガキ	ナデ	長・石(1~3) 多く含む	◎		14
9	壺	口径(16.8) 残高 7.4	「コ」字接合の複合口縁。 2次口縁部に波状文が巡る。	縄タテミガキ	ナデ	長・石(1~5) 多く含む	◎		14
10	壺	底径 (7.1) 残高 8.0	やや丸みをもつ平底。	タテハケ(12本／cm)	マメツ	長・石(1~5) 金ウ(1)	○		
11	鉢	口径 16.2 器高 14.5 底径 4.8	小型品。ゆるやかに外反する口縁部。底部は厚い平底。	ナナメハケ(10本／cm)	ヨコ ナナメハケ(10本／cm)	長・石(1) 多く含む	◎		15

表11　SR201出土遺物観察表　　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
12	打製石鏃	完存	サヌカイト	2.1	1.4	0.3	0.63	平基無茎式	15
13	スレイパー	完存	サヌカイト	4.3	3.7	0.62	10.83	横長剥片を素材とする	15

表12　SR301出土遺物観察表　　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
14	打製石鏃	側縁一部欠	サヌカイト	5.0	1.7	0.45	3.45	凹基無茎式	15
15	石核	完存	サヌカイト	10.9	7.5	3.0	340		15
16	礫石錘	完存	三波川変成岩類	10.4	8.3	2.1	287.92		15
17	敲石	完存	安山岩系か	10.9	8.7	4.2	654		15

表13　掘立204出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
18	坏	口径(13.4) 残高 2.1	胴部がほぼ直線的に開く。	マメツ	マメツ	長・石(1)	○	SP111	
19	坏	口径 11.8 器高 3.3 底径 7.5	比較的厚手のつくり。胴部の立ち上がりはしっかりしている。外底には板目状の圧痕。	回転ナデ 底回転糸切り離し	回転ナデ	長・石(1~2) 金ウ(1)	◎	SP113	16
20	土鍋	口径 42.6 残高 15.2	胴部は浅いボウル形を呈する。胴部外面には煤が付着。	ハケ→ナデ(24本／cm)	ヨコ、 ナナメハケ(12本／cm)	長・石(1~2)	◎	SK202	16

表14　掘立205出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
21	皿	口径 (6.4) 器高 1.0 底径 (4.9)	胴部の立ち上がりはしっかりしている。	マメツ	マメツ	長・石(1) わずかに含む	○	SP19	16
22	こね鉢	口径(23.0) 残高 4.7	口縁端部は上下に拡張される。	回転ナデ	回転ナデ	長・金ウ(1)	◎	SP18	16

表15　掘立206出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
23	坏	口径 11.0 器高 2.7 底径 7.0	胴部はやや丸みをもちつつ立ち上がる。外底には板目状圧痕。	回転ナデ ㊡回転糸切り離し	回転ナデ	長・金ウ(1) 多く含む	◎	SP250	17
24	羽釜	口径(28.6) 残高 5.8	口縁端から若干下がった位置に箍が貼付。	ナデ	ヨコハケ→ナデ	長・石・ 金ウ・黒(1)	◎	SK204	17
25	甕	口径(45.4) 残高 13.3	口縁部は強く折り曲げられ、「く」字形を呈する。	格子目タタキ	ヘラケズリ→ナデ	長・石(1~5) 少量	◎	SK204	17

表16　SE201出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
26	坏	口径 (7.2) 器高 2.2 底径 3.8	口縁部が若干厚く、胴下半がわずかに内湾しながらすぼむ。底は比較的厚い。	ヨコナデ ㊡回転糸切り離し？	ヨコナデ	精	◎	③層出土	17
27	埦	残高 2.3 底径 3.0	龍泉窯系青磁。埦Ⅳ類か。胴下半～高台部片。内外面には淡いオリーブ色の釉がかけられる。	ナデ	ナデ	精	◎	⑤層出土	17
28	羽釜	残高 9.7	口縁端から下がった位置にタガが巡る。	ナデ	ナデ	長・石(1~5) 多量	△	①層出土	17
29	甕	残高 5.3	口縁部は強く折り曲げられ、「く」字形を呈し、やや長い。	格子目タタキ	ナデ	砂(1~2) 少量	◎	③層中	17
30	甕	口径(33.8) 残高 6.5	口縁部は強く折り曲げられ、「く」字形を呈し、短い。	格子目タタキ	ナデ	砂(1~2) 少量	◎	石組み出土	17

表17　SE201出土遺物観察表　　鉄製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
31	釘か	2／3か	鉄	3.6	1.7	1.0	4.73		17

表18　SE302出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
32	皿	口径 (7.2) 器高 1.5 底径 5.8	胴部が直線的に立ち上がり、口縁端は丸くおさまる。	ヨコナデ ㊡回転糸切り離し	ヨコナデ	精	◎		18
33	坏	底径 7.0 残高 1.3	底部片。	ナデ ㊡回転糸切り離し	ナデ	長・石(1~5) 多量	◎		18
34	坏	底径 (7.0) 残高 1.1	底部片。	ナデ ㊡回転糸切り離し	ナデ	精	◎		18
35	坏	口径(12.5) 残高 2.2	口縁部片。内外面に赤色顔料付着か。	ナデ	ナデ	精	◎		18
36	坏	底径 (7.2) 残高 1.4	底部片。	ナデ	ナデ	精	◎		18
37	甕	底径(13.0) 残高 3.2	底部片。上げ底。	板ナデ	ケズリ	長(1)	◎		18

表19　SE303出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
38	坏	底径 (8.9) 残高 1.6	胴部の立ち上がりは緩やか。	ナデ	ナデ	精	◎		18
39	羽釜	残高 4.5	口縁部片。口縁端から位置にタガが巡る。	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	長・石(1～2)多	◎		18

表20　SD201出土遺物観察表　　土製品　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
40	皿	底径 (5.0) 残高 1.0	外底は糸切り離しが施され、板目状の圧痕を残す。	㊡糸切り離し	回転ナデ	精	○		
41	坏	底径 (6.4) 残高 0.8	胴部の開きは大きい。外底は糸切り離しが施され、板目状の圧痕を残す。	㊡糸切り離し	回転ナデ	長(1)わずか	○		
42	坏	底径 7.4 残高 0.7	外底は糸切り離しが施され、板目状の圧痕を残す。	㊡糸切り離し	回転ナデ	精	△		
43	坏	底径 6.0 残高 1.0	胴部の開きは大きい。内外面のマメツ著しい。	㊡糸切り離しか	マメツ	長(1)・石(1)わずか	△		
44	坏	底径 (7.2) 残高 1.2	胴部の開きは大きい。器壁厚い。外底は糸切り離しが施され、板目状の圧痕を残す。	㊡糸切り離し	マメツ	長(1)わずか	○		
45	坏	口径(11.0) 器高 2.6 底径 8.0	口縁部下が若干厚く、胴下半がわずかに内湾しながらすぼむ。外底には板目状の圧痕を残す。	㊡糸切り離し	回転ナデ	精	△		
46	坏	口径(10.4) 器高 3.4 底径 (5.8)	比較的厚手のつくり。胴部の立ち上がりは急で、椀に近い形状をもつ。	㊡糸切り離し	回転ナデ	長(1)・石(1)多く含む。	○		
47	坏	口径 11.4 器高 2.8 底径 6.8	口縁端は丸く仕上げ、薄手のつくりである。口縁部近くがわずかに内湾する。	㊡糸切り離し	回転ナデ	砂(1)わずか	○		18
48	坏	口径 14.0 器高 3.5 底径 7.5	胴部の立ち上がりは急で、口縁部はわずかに内湾し、端部は丸くおさまる。外底には板目状の圧痕。	㊡糸切り離し	回転ナデ	長石(1)わずか	○		18
49	坏	口径 11.2 器高 2.7 底径 7.0	比較的厚手のつくり。胴部の立ち上がりはしっかりしている。口縁端は丸くおさまる。	㊡糸切り離し	回転ナデ	長(1)・石(1)多く含む。	○		18
50	坏	口径 13.4 器高 3.6 底径 7.5	胴部の立ち上がりは急で、口縁部下は内湾し、端部は丸くおさまる。外底には板目状の圧痕。	㊡糸切り離し	回転ナデ	精	○		18
51	土鍋	――	口縁部を指で屈曲させるために内面には稜線がはしる。	指オサエ→ナデ	回転ナデ	長(2~3)・石(2)・金ウ(2)多く含む。	○		
52	羽釜	口径(21.6) 残高 7.1	口縁は内湾し、鍔は口縁近くに貼り付けられる。	回転ナデ	ヨコハケ (12本／cm)	長(1～2)・石(1)	○		18
53	こね鉢	口径(26.4) 残高 3.7	口縁端部は上下に大きく拡張され、「く」字状の形態に近い縁帯を形成する。	回転ナデ	回転ナデ	長(1～3)・石(1～2)多く含む。	○		18
54	こね鉢	口径 25.6 器高 8.5 底径 8.6	口縁端部は上下に大きく拡張される。内面下半は磨滅が著しく、使用頻度が高かったことを示している。	回転ナデ	回転ナデ	長(1～2)・石(1)	○		19
55	甕	底径(18.8) 残高 5.4	底部はやや丸みのある平底。端部の立ち上がりは急。	格子タタキ→ナデ	回転ナデ	石(1~3)わずか	○		18

SD201出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
56	甕	残高 4.8	口縁～頸部は欠損。やや扁球部の体部。体部上半部に凹線が2条巡る。	回転ナデ	回転ナデ	長(2～3)わずか	○		
58	壺	口径 35.6 残高 22.4	胴部は扁球形を呈し、頸部は短くやや内傾する。口縁部は短く外反し、端部は面とりされる。	平行タタキ	ヨコナデ	精	○		19

表21　SD201出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
57	釘か	完存か	鉄	5.6	1.1	0.7	6.05		18

表22　SD202出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
59	坏	口径(10.4) 残高 2.4	胴部の立ち上がりはゆるやかで、口縁部はやや内湾気味におさまる。	回転ナデ	指オサエ、ナデ	長・石(1～2)わずか	○		
60	坏	口径(10.8) 器高 3.1 底径 6.0	口縁部下が若干厚く、胴下半がわずかに内湾しながらすぼむ。	㊡糸切り離し	回転ナデ	金ウ(1)・長(1)をわずかに含む	○		
61	羽釜	残高 3.3	口縁部が内湾気味に立ちあがる。口縁部に接して、鍔が貼付される。	回転ナデ	回転ナデ	長・石(2)	○		
62	こね鉢	残高 4.8	口縁端部は上下に大きく拡張。	回転ナデ	回転ナデ	長・石(2)	△		19
63	土鍋	口径(36.0)	口縁部を指で屈曲させるため、内面には稜線がはしる。	指オサエ→ナデ	回転ナデ	長・石(2)を多く含む	○		

表23　SD202出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
64	砥石	ほぼ完存	石英粗面岩	7.5	4.2	3.3	135.86		19

表24　SD203出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
65	皿	口径 7.4 器高 1.5 底径 4.8	口縁部は内湾して立ち上がる。外底には、板目状の圧痕を残す。	㊡糸切り離し	指オサエ→ナデ	長・石(1)	○		19
66	坏	器高 1.0 底径 6.4	胴部の立ち上がりはゆるやか。外底には、板目状の圧痕を残す。	㊡糸切り離し	回転ナデ	長・石(1)わずか	△		
67	坏	口径(11.0) 残高 2.3	胴部の立ち上がりは急。	ナデ	ナデ	長(1)	○		
68	坏	口径(11.2) 器高 2.4 底径 7.4	口縁部下がやや厚く、胴下半がわずかに内湾する。外底には板目状の圧痕を残す。	㊡糸切り離し	回転ナデ	長・石(1)	○		19

表25　SA301出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
69	こね鉢	残高 4.0	口縁端部は上方へ拡張される。	回転ナデ	回転ナデ	長(1)わずか	○	SP324	

表26　SK201出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		胎土	焼成	備考	図版
				外面	内面				
70	土鍋	口径(37.0) 残高　6.0	折り曲げにより口縁部を形成し、内面には稜が付く。	指オサエ→ナデ	回転ナデ	長(1)、石(1~2)	○	外面に炭化物付着	
71	土鍋	口径(28.0) 残高　6.3	口縁は直線的に立ち上がる。 口縁端部に横ナデ調整が施され、内側に摘み出したような断面である。	マメツ	ヨコナデ	長・石・金ウ(1)	○	外面に炭化物付着	20
72	羽釜	口径(30.4) 残高　7.3	口縁部が内傾気味に立ち上がる。 口縁部から少し下がった位置に箍が貼付される。	指オサエ→ナデ	ナデ	長・石(2~3)多量	○		20

表27　SK203出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		胎土	焼成	備考	図版
				外面	内面				
73	坏	底径（7.4） 残高　1.0	外底には板目状の圧痕残る。	㊦糸切り離し	回転ナデ	長・金ウ(1)	○		
74	坏	底径（8.0） 残高　1.1	外底には板目状の圧痕残る。	㊦糸切り離し	回転ナデ	精	○		
75	こね鉢	残高　2.6	口縁端部は上下に大きく拡張され、「く」字状の形態に近い縁帯を呈する。	回転ナデ	回転ナデ	精	○		20

表28　SX201出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		胎土	焼成	備考	図版
				外面	内面				
76	皿	底径　4.7 残高　0.7	外底には板目状の圧痕残る。	㊦糸切り離し	マメツ	長(1)わずか	△		20
77	坏	口径（13.0） 残高　3.2	胴部は直線的に立ち上がり、口縁部は強いヨコナデによりわずかに内傾する。	マメツ	マメツ	長・石(1)わずか	△		20
78	坏	底径　7.2 残高　2.1	底部右半部にわずかながら、立ち上がりがみられる。	㊦糸切り離し	ナデ	長・石(1)	○		20
79	埦	口径（12.8） 残高　4.0	楠葉型瓦器埦。やや丸みをもちながら、口縁部は立ち上がる。	指オサエ→ナデ	回転ナデ	精	○		20
80	こね鉢	口径（25.4） 残高　3.3	口縁端部は上方に拡張される。端部外面には自然釉が付着。	回転ナデ	回転ナデ	精	○		20
81	埦	底径　5.4 残高　2.8	龍泉窯系青磁。輪高台。	回転ナデ	回転ナデ	精	○		20

表29　SX201出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
82	鉄滓	完存	鉄	4.2	4.0	3.5	41.58		
83	鉄滓	完存	鉄	3.9	2.3	2.1	28.21		
84	鉄滓	完存	鉄	5.4	4.1	1.3	29.52		
85	鉄滓	完存	鉄	2.6	1.1	0.5	2.89		

表30　SP231出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		胎土	焼成	備考	図版
				外面	内面				
86	鉢	口径(17.4) 残高　4.1	口縁部が内面に肥厚し、端部が上方につまみあげられる。	回転ナデ	回転ナデ	長・石(1~2) わずかに含む	◎		21
87	皿	口径　7.6 器高　1.2 底径 (6.2)	外底は糸切り後、板目状圧痕が施される。	回転ナデ	回転ナデ	長・石(1~2) わずかに含む	○		21
88	坏	口径 11.4 器高　2.6 底径　7.0	外底は糸切り離し後、板目状圧痕が施される。	回転ナデ	回転ナデ	長・石(1~3) 少々含む	△		21
89	坏	口径 11.0 器高　2.7 底径　7.0	外底は糸切り離し後、板目状圧痕が施される。	回転ナデか	回転ナデか	長・石(2~3) 含む	△		21

表31　Ⅰ区包含層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		胎土	焼成	備考	図版
				外面	内面				
90	甕	残高　7.5 底径 (6.0)	底部は平底で、胴部の立ち上がりは急である。	マメツ	ナデか	長・石(2~3) 多量	○	Ⅰ区 Ⅳ-e層	
91	高坏	残高　2.5	坏部のみ。	マメツ	マメツ	長・石(1)	○	Ⅰ区 Ⅳ-e層	
92	坏	口径(11.6) 残高　3.1	口縁端部はやや先細り気味に仕上げられる。	回転ナデ	回転ナデ	長・石(1~2)	○	Ⅰ区 Ⅳ-b層	
93	壺	残高　1.8 底径　4.8	底部は、中央が凹んだ上げ底を呈する。	マメツ	マメツ	長・石(1~2) 多量	○	Ⅰ区 Ⅱ-a②層	
94	内耳鍋	口径(47.0) 残高　2.2	口縁は、大きく外反し、短く、端部は丸くおさめられる。	回転ナデ	丁寧な回転ナデ	精	○	Ⅰ区 Ⅱ-a②層	
95	椀	口径(11.5) 器高　4.9	口縁端部は丸く、胴部は丸みをもち立ち上がる。輪高台は付く。	回転ナデ	回転ナデ	精	○	Ⅰ区 Ⅰ-b層	
96	椀	底径 (4.8) 残高　3.4	龍泉窯系青磁。外面に鎬連弁文が施される。	回転ナデ	回転ナデ	精	○	Ⅰ区 表採	22

表32　Ⅱ区包含層出土遺物観察表　　土製品　　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		胎土	焼成	備考	図版
				外面	内面				
97	皿	口径　6.2 器高　1.5 底径　3.9	胴部は立ち上がりが急である。 外底は回転糸切り離し。	回転ナデ	回転ナデ	精	○	Ⅱ区 北トレンチ Ⅵ層	22
98	坏	残高　1.0 底径 (5.8)	底部片。	回転ナデ	回転ナデ	長・石(1~2) 少量	○	F8区 Ⅵ層	
99	坏	残高　0.9 底径 (6.0)	胴部の開きは大きい。	回転ナデ	回転ナデ	長・石(1~2) 少量	○	Ⅱ区 北トレンチ	
100	坏	残高　1.4 底径 (6.6)	胴部の立ち上がりは急である。	回転ナデ	回転ナデ	長・石(1~2) 少量	○	Ⅱ区 北トレンチ	
101	羽釜	口径(29.8) 残高　3.3	口縁は内湾し、箍は口縁近くに貼り付けられる。	回転ナデ	回転ナデ	精	○	F8区 Ⅵ層	22
102	羽釜	残高　3.4	口縁部片。	ナデ	ナデ	長・石(1~2)	○	F7区 Ⅵ層	
103	羽釜	残高　4.3	口縁部片。	ナデ	ナデ	長・石(2~3) 多量	○	F7区 Ⅵ層	22

Ⅱ区包含層出土遺物観察表　土製品 (2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
104	土鍋	口径(34.0) 残高 3.0	口縁部を指で屈曲させるために、内面には稜線がはしる。	指オサエ→ナデ	回転ナデ	長・石(2~3) 少量	○	F8区 Ⅵ層	
105	こね鉢	口径(30.6) 残高 3.0	口縁端部は上下に大きく拡張され、「く」字状の形態に近い縁帯を形成する。	回転ナデ	回転ナデ	長(1)少量	○	F7区 Ⅵ層	
106	こね鉢	口径(24.6) 残高 3.2	口縁端部は上下に大きく拡張される。	回転ナデ	回転ナデ	長(1)少量	○	E8区 Ⅵ層	
107	こね鉢	口径(34.4) 残高 4.7	口縁端部は拡張され、縁帯を形成。	回転ナデ	回転ナデ	長(1)少量	○	F7区 Ⅵ層	22
108	こね鉢	残高 4.2	口縁部片。	回転ナデか	回転ナデ	長・石(2) 少量	○	F7区 Ⅵ層	
109	壺か	残高 2.1 底径 8.0	底部片。	回転ナデ	回転ナデ	長・石(1)	○	E7区 Ⅵ層	

表33　Ⅱ区包含層出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ (cm)	法量 幅 (cm)	法量 厚さ (cm)	法量 重さ (g)	備考	図版
110	鉄滓	完存	鉄	6.5	8.3	2.4	190.17	Ⅱ区	22
111	鉄滓	完存	鉄	3.6	3.7	1.9	41.58	Ⅱ区	22
112	鉄滓	完存	鉄	4.3	3.3	1.9	30.93	Ⅱ区・F6	22
113	鉄滓	完存	鉄	3.7	2.9	0.9	12.55	Ⅱ区・F6	22
114	鉄滓	完存	鉄	2.2	2.5	0.9	6.64	Ⅱ区・F7	22

表34　Ⅲ区包含層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
115	深鉢	残高 5.2	肩部片。	ナデ ヨコ方向の条痕	ヨコ方向の条痕 →ナデ	長・石(1~3) 多量	○	Ⅲ区 H10 Ⅵ層	
116	Ⅲ	口径 (7.0) 器高 1.6 底径 (4.8)	やや内湾気味に胴部は立ち上がる。 外底は回転糸切り離し。	ナデ	ナデ	精	○	Ⅲ区 西トレンチ Ⅵ層	
117	Ⅲ	口径 8.0 器高 1.4 底径 6.3	直線的に胴部は立ち上がる。 外底は回転糸切り離し。	回転ナデ	回転ナデ	長・石・金 ウ(1)	○	Ⅲ区 西トレンチ Ⅵ層	
118	Ⅲ	口径 8.1 器高 1.4 底径 5.5	胴部は、強い横ナデにより、内湾する。 外底は回転糸切り離し。	回転ナデ	回転ナデ	長・石・金 ウ(1)	○	Ⅲ区 西トレンチ Ⅵ層	22
119	坏	口径 (7.0) 器高 1.6 底径 (4.8)	胴部はやや内湾して立ち上がる。	回転ナデ	回転ナデ	精	○	Ⅲ区 西トレンチ Ⅵ層	22
120	坏	口径 12.0 器高 3.4 底径 6.8	胴部はやや内湾して立ち上がる。 外底は回転糸切り離し。	回転ナデ	回転ナデ	長・石(1~2) 少量	○	Ⅲ区 試掘トレンチ Ⅵ層	22

第Ⅶ章　ＳＥ301における保存処理

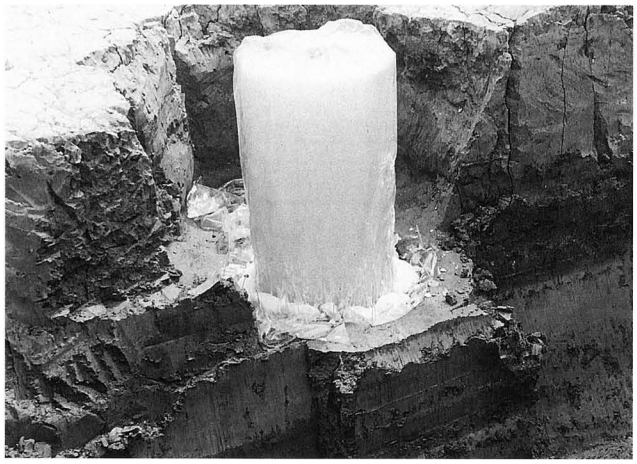
Ⅰ．曲物の取り上げ

1　はじめに

船ヶ谷遺跡３次調査地のⅢ区で検出されたＳＥ301からは曲物が検出された。曲物は三個体を積み上げた構造で成る。曲物Ｂと曲物Ｃは、本体は軟弱ではあったが、結合部と内面のケビキ加工等が観察できるものであり、表面の遺存は良好であった。埋蔵文化財センターにおける既往の調査では、井戸からの曲物の出土例は少ない。このため、遺物の詳細な観察、保存処理後の展示公開を見据えた考古遺物の有効活用を目的として、曲物の取り上げを実施することにした。

2　取り上げ方法の検討

平成10年８月27日に調査現場において、曲物の遺存状況を詳細に観察した。曲物はⅢ区のほぼ中央に位置する素掘りの井戸（ＳＥ301）の下部で検出された。曲物Ａは、材の厚さが１㎜前後で、遺存していない部分があった。このため、取り上げは曲物Ｂと曲物Ｃを主体として実施するよう、調査担当者と検討した。



第49図　遺構の半裁掘削状況

第50図　遺構半裁後の曲物検出状況

3　取り上げ作業

まず、曲物の設置状況を観察するために、遺構の西半部を掘削した。曲物の内側には空間があるため、半裁時に曲物が破損する可能性が考えられたので、曲物内面をビニールで保護し、円筒形のスポンジを充填した。隙間には発砲ウレタンを使用した（第49図）。半裁を終えた時点で、曲物Ａから曲物Ｂまでの詰め物は取り除き、写真撮影をした。曲物Ａについては、遺存が比較的良好な東半部を残して記録写真を優先した（第50図）。曲物を乾燥から防ぐことに注意を払い、作業中はポリエチレングリコール1500#の50％濃度の水溶液を曲物に塗布した。

4　曲物Ａの取り上げ

曲物Ａの取り上げでは、曲物自体に影響が現れない程度に付着していた土を取り除き、ベニヤ板を用いて枠を作製した。この枠と土との隙間には発砲ウレタンを充填して、型枠と曲物とを固定し、曲物Ｂと切り離して、取り上げをおこなった（第51図）。

5　曲物Ｂと曲物Ｃの取り上げ

曲物Ｂと曲物Ｃは付着していた土を取り除いた段階で、比較的材自体に硬さがあることがわかった。曲物Ｂは、内面にダンボール紙をあてがった後に、曲物の内外面を角材で挟み込んで上下を固定した。曲物Ｃは、外面に幅広いビニールテープを幾重か巻き付けて補強した。これらの保護をおこなった後に、曲物Ｂと曲物Ｃを同時に取り上げた。

6　取り上げ作業を終えて

今回の曲物の取り上げ作業では、曲物の遺存状態が比較的良好であったことと時間の制約から、簡易な方法を用いた。この方法で取り上げた曲物は運搬に支障がなく、調査現場から埋蔵文化財センターへの搬入も比較的容易に進めることができた（第52図）。

使用材料

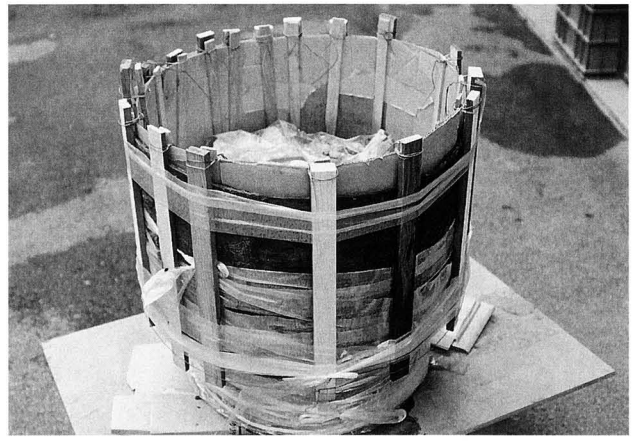
角材２種類、ベニヤ板、針金、釘、段ボール紙、ビニールフィルム、ビニール袋、ビニールテープ、ペンチ、スプレイヤー

使用樹脂等

ポリエチレングリコール1500#、発砲ウレタン樹脂

（保存処理担当：山本健一）

第51図　曲物Ａの梱包作業



第52図　曲物Ｂ・Ｃの梱包状況

Ⅱ．保　存　処　理

（財）元興寺文化財研究所

1　はじめに

出土木製品の保存処理法として、当研究所ではポリエチレングリコール含浸法、アルコール・キシレン・樹脂法（以下ＡＸＲ法）、脂肪酸エステル法、真空凍結乾燥法をおこなっている。これら４つの方法から遺物の劣化状態、含水率、樹種、木取り、調整痕、使用痕の有無などによって最良と思われる処理法を選択し、実施している。

今回、保存処理対象である船ヶ谷遺跡３次調査出土遺物をはじめ、出土曲物の多くは針葉樹の薄板内面にケビキを入れ、「矯め曲げ」によって製作されている。このような製作技法と構造的特徴に起因して、非常に脆弱であり、胴部に自重がかかり崩壊する危険性もある。加えて発掘後の保管環境が悪影響を及ぼし、さらに破損・変形を進行させていることも少なくない。そのため、曲物の保存処理には、変形部分の矯正が可能であると同時に、より軽量に仕上がることが求められる。従って当研究所では出土曲物に対する保存処理にはＡＸＲ法を選択している。ＡＸＲ法とは、出土木材の含有水分を段階的にアルコール・キシレンに置換し、さらにキシレンに溶かしたロジン・ダンマルなどの天然樹脂（濃度36％）を含浸させた後、キシレンを常温で蒸発させ、乾燥させる方法である。ＡＸＲ法で処理した遺物の特徴は、①含浸後の遺物に水分・熱を加えることで加撓性・柔軟性が高まり、矯正・整形が可能になる。②比較的高湿の保管環境にも耐えられる。③処理前より重量が軽くなるので、自重による崩壊の危険性が少ないなどが挙げられる。本報告では、船ヶ谷遺跡３次調査出土の曲物の保存処理について述べる。ただし、現在も処理は継続中であり、平成11年３月までにおこなわれた工程とする。

2　保存処理

(1) 遺物の検出

通常搬入された遺物に対しては、まず調査カードの作成・写真撮影による処理前段階での情報の記録に努める。しかし、本資料の場合は、ウレタンで保護されて搬入されたため、搬入時の状態を写真撮影した後、遺物本体の検出をおこなった。曲物Ａは半円の形状をしており、粘土質の土ごとウレタンによって取り上げられていた。曲物Ｂ・Ｃは曲物Ｂの直径の方が大きく、曲物Ｃが中に入り込む形で上下につながっていた。形状維持の目的で内側はウレタンで固められ、外側は木枠で固定された状態であった（第53図）。まず、曲物Ｂ・Ｃの分離作業をおこなった。２つの曲物の間の土を少しずつ除去していった。曲物Ｂが持ち上がるようになり、分離は完了し、写真撮影による記録をおこなった。

(2) クリーニング

まず、曲物Ｂは木枠を除いた（第54図）。曲物Ｃは内側のウレタン（第55図）除去作業をおこなった。その後、筆・刷毛・竹串などを用い、木目に沿って丁寧にクリーニング（水洗）をおこなった。

(3) 処理前調査

クリーニング終了後、状態の確認、写真撮影をおこなった。

曲物Ｂは側板の外側に帯板上下２枚を巻く形状であり、２枚を合わせるとほぼ側板と同じ幅であった（第56図）。直径54.0㎝、高さ31.0㎝、側板厚さ0.5㎝、帯板厚さ0.2～0.3㎝を測り、出土状態から見

て、上縁に底板を留めていたと思われる木釘孔が存在した。曲物容器からの転用と考えられた。
側板の内側全体に、木目に直交させたケビキが入り、上部のみ交差させる形の２回のケビキが全周囲に加えられていた。そのケビキには規則性が認められず、ケビキが深すぎて脆弱になっている部分さえあった（第57図）。全体に劣化しており、特に上部は発掘時の乾燥のためか、非常に弱かった。

曲物Ｃも側板の外側に帯板上下２枚を巻き、２枚を合わせるとほぼ側板と同じ幅であった（第58図）。直径45.5cm、短径42.0cm（少し歪みあり）、高さ30.0cm、側板厚さ0.3cm、帯板厚さ0.3cmであった。下縁に木釘が残存しており、曲物容器からの転用と考えた。側板の内側全体に、木目に直交するケビキが入り、交差させる形の２回のケビキが上部のみ全周囲に加えられていた。また、下部にも同様のケビキが部分的に認められた。曲物Ｂに比較して丁寧な作りであり、ケビキも等間隔になされていた（第59図）。土や汚れなどを除去すると土壌成分によると思われる変色部分が胴部に存在したものの状態は良好であった（第60図）。

（4）養生

変形部分の矯正と含浸期間中の形状維持のため、ステンレスの板に沿わせ、不織布によって固定した（第61図）。

（5）含浸処理

アルコール置換･キシレン置換･天然樹脂含浸（７工程･21週間）をおこなった後、自然乾燥させた。

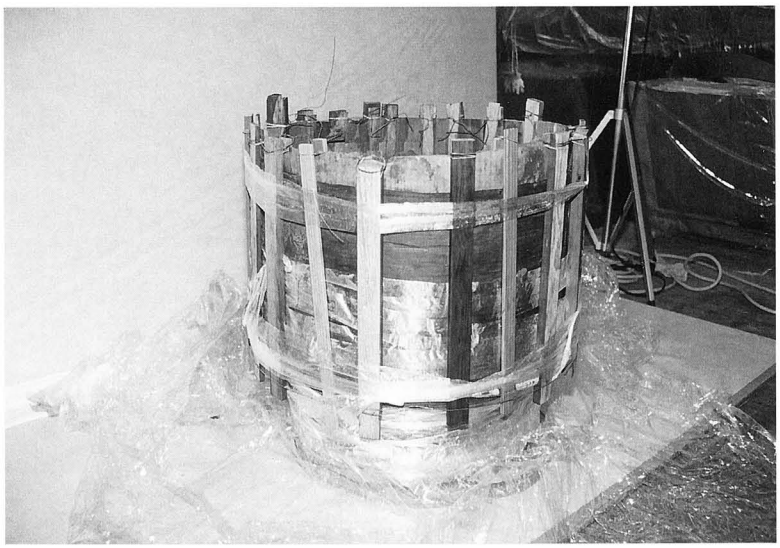
3　おわりに

本報告は、遺物本体の検出が困難を極め、かなりの時間を要したことと、含浸処理設備の都合上、含浸処理までの報告となった。今後、矯正･接着･補填･整形･彩色･処理後調査という工程を経て、保存処理を完了する予定である。現段階では３個体での返却を予定している。今後の処理仕様についても関係者と綿密な打ち合わせを重ね、展示･活用に役立つ保存処理を心掛けたい。

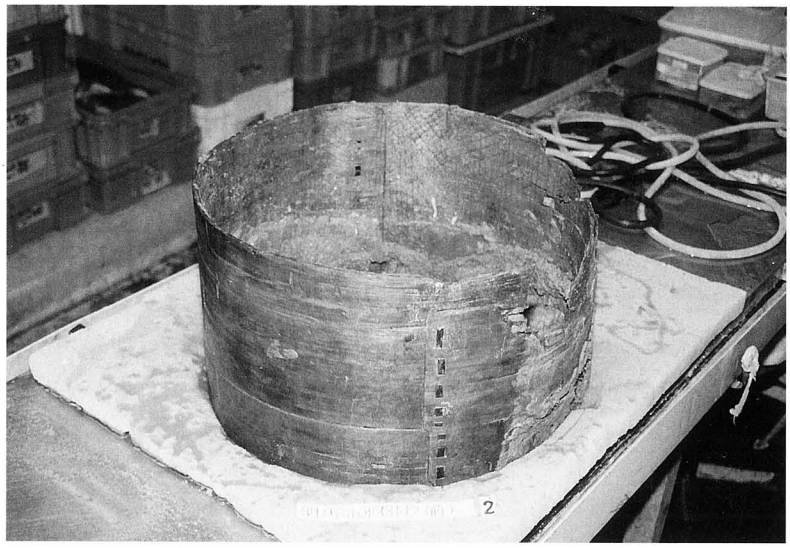
参考文献

西村　　歩「曲物の細部技法－綴じ方を中心にして－」『文化財学論集』文化財学論集刊行会（1994）
大国万希子「アルコール･キシレン･樹脂法による復元作業－出土曲物を中心に－」『創立三十周年記念誌』元興寺文化財研究所 p.99-103（1997）

（平成11年３月31日付）

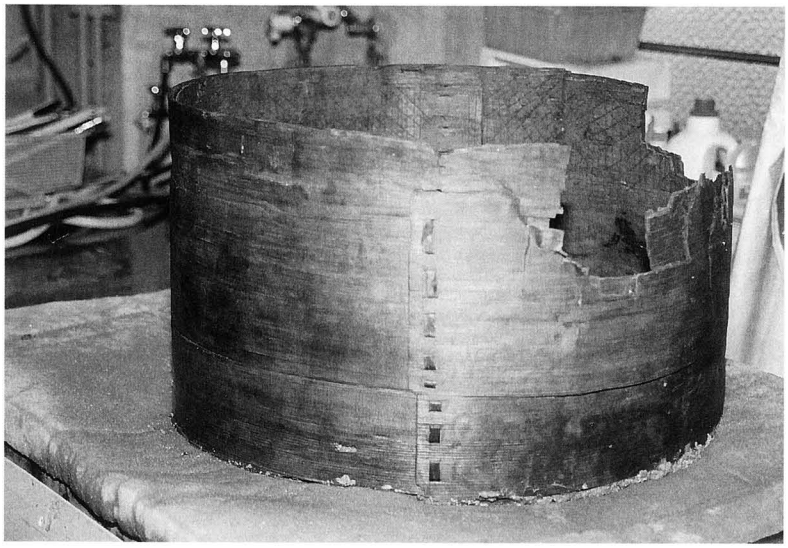


第53図　曲物Ｂ･Ｃ搬入時

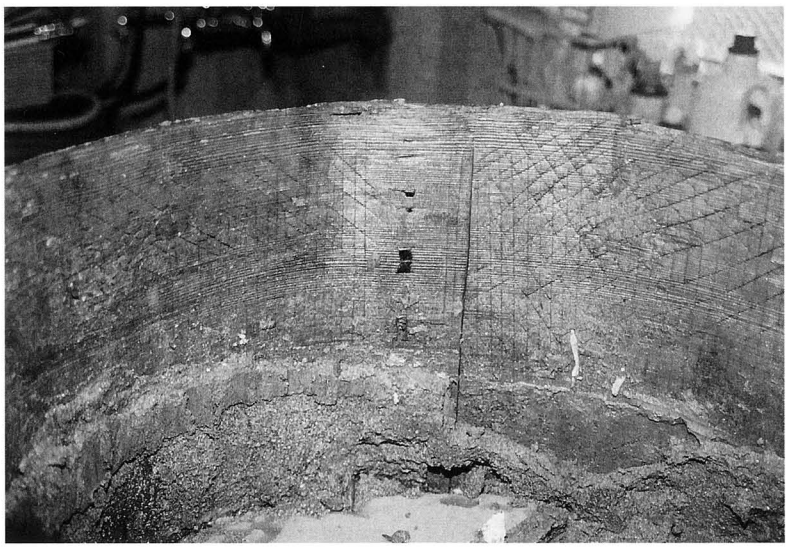


第54図　曲物Ｂ分離後

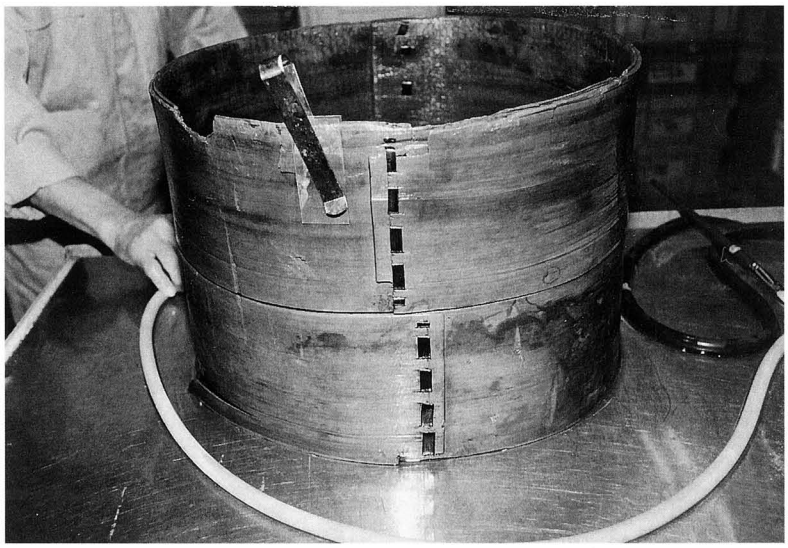
第55図　曲物Ｃ分離後



第56図　曲物Ｂクリーニング後



第57図　曲物Ｂケビキの様子



第58図　曲物Ｃクリーニング後

第59図　曲物Ｃケビキの様子

第60図　曲物Ｃ変色部分

第61図　養生

第Ⅷ章　ＳＥ301における科学分析

Ⅰ．樹　種　同　定

（財）元興寺文化財研究所

船ヶ谷遺跡３次調査地で出土した曲物Ａ、曲物Ｂ、曲物Ｃの側板３点について樹種の同定をおこなった。曲物Ａは堅い粘土に覆われていたため一部露出していた部分から、曲物Ｂ、曲物Ｃは側板の破断面から、メスを用いて極微量の試料を採取した。

顕微鏡観察による組織観察をおこなうため、同定に必要な木口面（横断面）、板目面（接戦断面）、柾目面（放射断面）の３方向の切片をカミソリによる徒手切片法で作製した（第62図）。

これらの切片をサフラニンで染色した後、切片に含まれる水分を、エチルアルコール、ｎ-ブチルアルコール、キシレンに順次置換し、非水溶性の封入剤（EUKITT）を用いて永久プレパラートを作製した。封入剤が硬化した後、詳細な組織観察と写真撮影をおこなった（第63図）。

樹種の同定は、針葉樹では早材から晩材への移行、樹脂道の有無、樹脂細胞の有無および配列、ラセン肥厚の有無、分野壁孔の形態等を、広葉樹では道管の大きさや配列状態および穿孔の形態、柔組織の分布や結晶細胞の有無、放射組織の形態等を生物顕微鏡で観察することによっておこなっている。

今回実施した曲物側板の樹種同定の結果と顕微鏡観察による組織上の特徴および同定した樹種の分布や性質を以下に示した。

（１）曲物Ａ

樹種：スギ

組織上の特徴：

木口面…早材から晩材への移行が急な針葉樹

板目面…樹脂細胞がある

柾目面…分野壁孔が典型的なスギ型で１分野に１～２個存在する

分布：本州、四国、九州、屋久島

性質：日本特産の常緑針葉高木。木理直通、はだ目粗、晩材への移行は急。乾燥･加工は容易で、割裂性は大きい。

用途：建築、桶樽、土木、船、彫刻、下駄、箸等

（２）曲物Ｂ

樹種：スギ

組織上の特徴：

木口面…早材から晩材への移行が急な針葉樹

板目面…特になし

柾目面…分野壁孔が典型的なスギ型で１分野に１～２個存在する

分布：本州、四国、九州、屋久島

性質：日本特産の常緑針葉高木。木理直通、はだ目粗、晩材への移行は急。乾燥･加工は容易で、割裂性は大きい。

用途：建築、桶樽、土木、船、彫刻、下駄、箸等

（3）曲物C

樹種：ヒノキ

組織上の特徴：

木口面…早材から晩材への移行がゆるやかで晩材部の幅は狭い針葉樹

板目面…特になし

柾目面…分野壁孔が典型的なヒノキ型で1分野に2個存在する

分布：本州、四国、九州

性質：日本特産の常緑針葉高木。木理直通、はだ目精、晩材への移行はゆるやか。乾燥･加工は容易で、仕上げは良好、光沢がある。世界的な優秀材である。

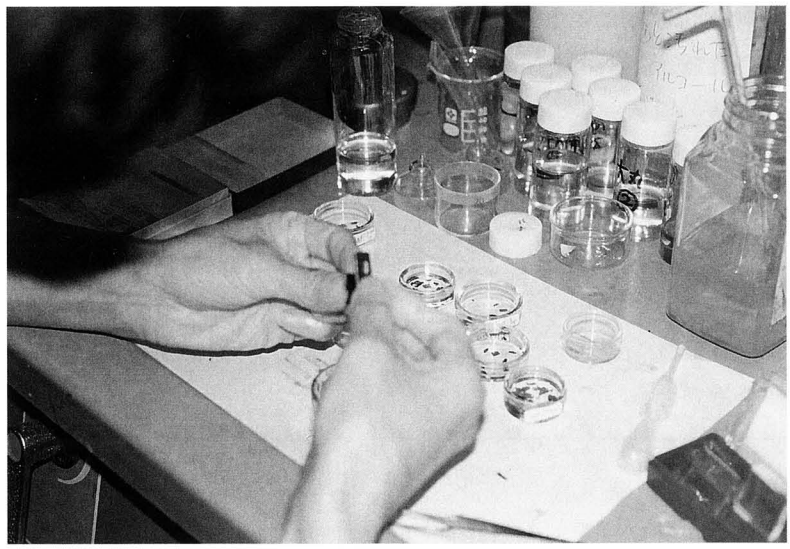
用途：建築、土木、船、彫刻、漆器、家具等

参考文献

島地　謙･伊東隆夫『遺跡出土の製品総覧』雄山閣出版（1988）

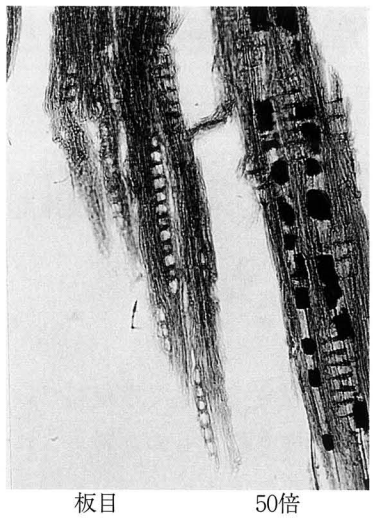
島地　謙･伊東隆夫『図説 木材組織』(株)地球社（1996）

（平成11年3月31日付）

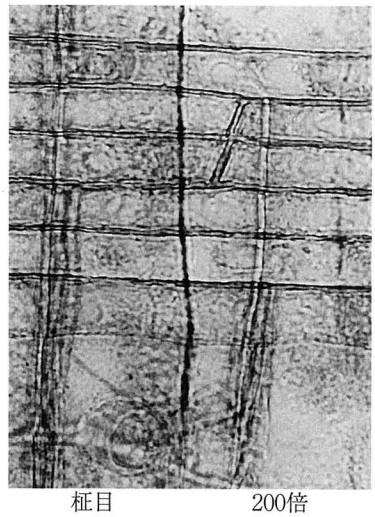


第62図　徒手による切片作製

木口　30倍

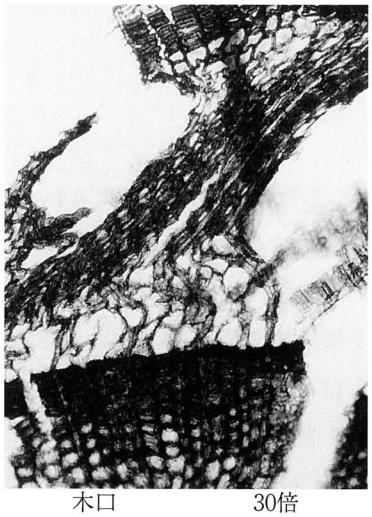


板目　50倍

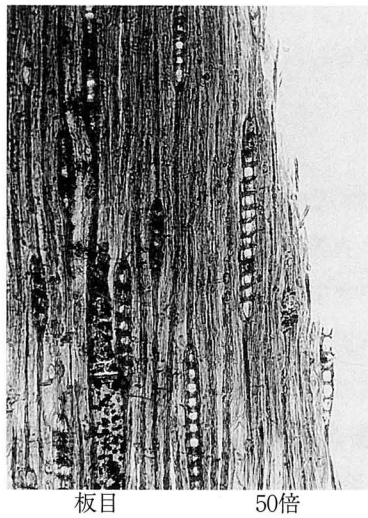


柾目　200倍

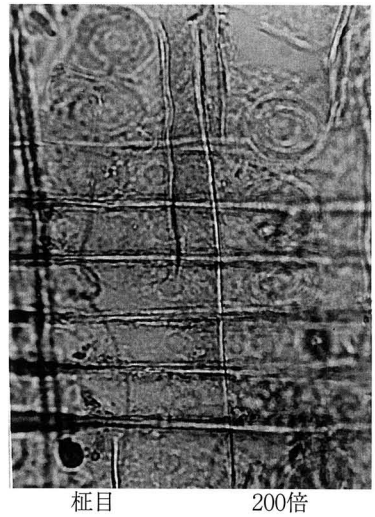
1・曲物Aスギ



木口　30倍

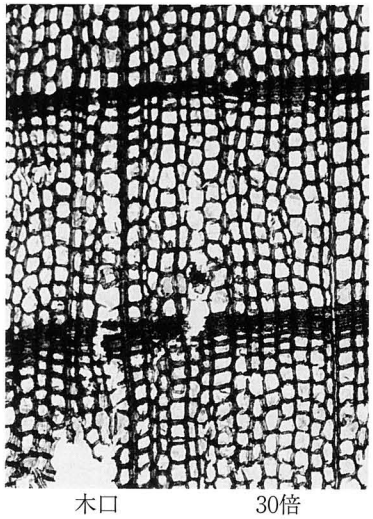


板目　50倍

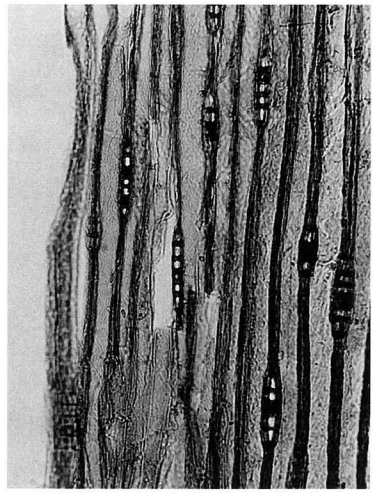


柾目　200倍

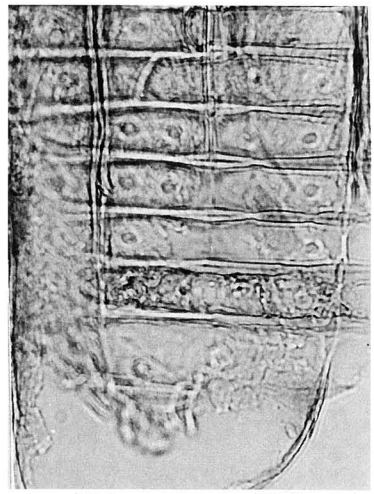
2・曲物Bスギ



木口　30倍



板目　50倍



柾目　200倍

3・曲物Cヒノキ

第63図　曲物A・B・Cの木材組織

第Ⅸ章　調査の成果と課題

船ケ谷遺跡３次調査地では、縄文時代～弥生時代の自然流路、中世の溝･柵列･掘立柱建物･井戸･土坑の集落関連遺構を多数検出した。とりわけ、中世の集落関連遺構は松山平野北西部では稀少な資料である。

１．土　層

第Ⅶ層以下の土層は、砂礫、砂質土、粘質土の順で堆積していた。これらの土層は、性質と堆積から、ある程度水量のある流路によって形成されたものと考えられる。かつての石手川は、現在の流れとは大きく異なり、城北の北から堀江･和気方面へ流下し地溝性の低地帯を形成していたことから、第Ⅶ層以下がかつての石手川の沖積作用で形成されたものと考えられる。第Ⅶ層上面は、Ⅱ区では北東から南西方向へ緩傾斜している。Ⅱ区南壁では、第Ⅶ層が急角度で傾斜しており、調査地の南が谷状に近い地形を呈していたことが考えられる。

２．縄文時代～弥生時代

ＳＲ201下層とＳＲ301は、土層の状況から水流は少なく、湿地状によどんでいたものと考えられる。既往の調査結果（船ヶ谷遺跡、同２次調査地）を踏まえるならば、本調査地を含めた船ヶ谷遺跡一帯は、縄文時代晩期において、水流が少ない湿地状の環境であったことがうかがえる。

遺物には縄文時代晩期の土器と石器、弥生土器が出土している。縄文晩期の深鉢と浅鉢は、船ヶ谷遺跡出土品と同形態を示す。石器には打製石鏃、礫石錘、敲石、石器素材がある。打製石鏃は基部の抉りが浅い凹基無茎式と、平基無茎式がある。前者は平面形態が五角形状を呈しており、いわゆる「五角形鏃」の範疇に分類される。礫石錘は長軸両端に紐掛け用の抉りが作出されている。石器素材は自然面が残置せず、剥片剥離が進行した石核である。器種構成に着目すると、大陸系磨製石器はなく、縄文系の石器で占められ、これは船ヶ谷遺跡と同傾向である。船ヶ谷遺跡の器種構成は礫石錘、敲石、スクレイパーが多数を占め、これらに石鍬、石斧類、砥石、石棒が伴う。船ヶ谷遺跡の主体石器は礫石錘と敲石であり、これらは本調査で出土しており、共通する。石器の数量は、船ヶ谷遺跡218点に対して、本調査はわずかに６点と少ない。本資料は、数は少ないものの、船ヶ谷遺跡出土石器と器種構成に共通するものがあり、縄文時代晩期の石器資料の一例として注目されるものである。

３．中　世

〔1〕掘立柱建物

掘立柱建物をⅡ区とⅢ区で比較検討する。

Ⅱ区には総柱建物１棟（掘立202）と側柱のみの建物５棟（掘立204～208）がある。規模は掘立202が最大で、7.9×3.1～3.5mを測る。建物に近接して井戸（ＳＥ201）が構築される。掘立205と206は南北棟で、規模は5.3×2.7mを測る。柱穴に根石や詰め石を伴うものが多く、柱の沈下を防ぐためと理解される。柱の沈下の要因として、地盤の軟弱化と上屋（屋根）の重厚化が考えられる。地盤は堅くしまった粘質土であるから、柱穴の根石や詰め石は上屋の構造と関係するものと考えられる。次に、

掘立204を検討する。規模は4.0～4.1×1.5mを測る。付帯施設の炉（ＳＫ202）から土鍋が出土した。土鍋は外面に煤が付着している。さらに炉の埋土に焼土と炭化物が伴っていることから、掘立204が炊事にかかわる建物（廚）と考えられる。他の建物（掘立207と208）は、規模が3.6～4.7×2.1～2.9mを測り、柱穴に根石や詰め石を伴わない。上屋の簡易な建物と想定される。これらから、Ⅱ区の建物は三群に分類される。１群は掘立202である。総柱構造の中規模な建物で、柱穴に石を伴わない。また井戸に近接して構築されている。２群は掘立204～206である。側柱で構成される小規模な建物で、柱穴に石が伴う。廚か、廚に近接して構築されている。３群は掘立207と208である。側柱で構成される小規模な建物で、柱穴に石を伴わない。

Ⅲ区には２棟の建物がある。掘立301と302は側柱で構成される小規模な建物で、柱穴に石を伴わない。掘立302はＳＥ304の付帯施設と考えられる。Ⅲ区の２棟は３群に該当する。

『一遍聖絵』に代表される中世に描かれた絵巻物をみると、規模が比較的小さく、側柱で構成される建物の多くが、壁をもたず、板や草で屋根を葺いた簡易な建物である。検出した６棟の掘立柱建物は、このような構造の建物と考えられる。柱穴の石の有無を積極的に評価し、２群は板葺き、３群は草葺きの屋根と想定しておく。

〔2〕井戸

Ⅱ・Ⅲ区からは、５基の井戸が検出された。Ⅱ区の井戸ＳＥ201は、掘立202に近接して検出された。平面形は楕円形を呈し、上部には石組みをもち、下部には曲物が伴う構造である。曲物の遺存が悪いため、曲物の構造は判然としない。Ⅲ区の井戸はＳＥ301～304である。平面形態は円形・楕円形・不整形を呈している。素掘りで二段掘り状を呈し、下部に曲物が伴う。

Ⅱ区とⅢ区の井戸には、共通点と相違点がみられる。共通点は、井戸が二段掘り構造で、下部に曲物が伴うことである。相違点は、石組みの有無である。ＳＥ201は上部に石組みが伴う構造である。さらに、他の遺構の配置をみると、ＳＥ201は、中規模で総柱構造の掘立202に近接して構築されている。一方、素掘りの井戸群は上部に石組みを伴わない。

〔3〕出土遺物

遺物は遺構からの出土が少なく、遺構の中には遺物が伴わないものが多い。とりわけ、掘立と柵列には共伴遺物が少なく、遺構の時期特定を困難にしている。遺構に伴う遺物の多くは、ＳＤ201から出土したものである。そのほとんどが破片資料であり、完形に復元されたものは少ない。出土遺物には土師器・須恵器・鉄器・石器・木器がある。土器は日常的に使われる土師器の皿・坏・三足付き羽釜・土鍋が多い。土師器の皿と坏は、外底に回転糸切り離しの痕跡がみられる。須恵器には東播系こね鉢がある。東播系こね鉢には14世紀前半の年代観が与えられている（森田1995）。木器は、ＳＥ301出土の曲物が特筆される。曲物Ａ・Ｂはスギ、Ｃはヒノキが用いられていた。曲物Ｂ・Ｃは容器からの転用品の可能性が考えられ、当時の木製品に対する再利用を示す一例といえる。

〔4〕集落の構造

Ⅱ区で検出された遺構の配置状況から、集落域が溝によって区画されていることが読みとれる。ＳＤ204は集落域の南限を示している区画溝である。集落は東西の溝（ＳＤ201）と南北の溝（ＳＤ202と203）により小さく区画される。区画溝は、埋土の堆積状況から、恒常的に水は流れていないと理解される。ただし、ＳＤ202がＳＥ201に接続することから多少の排水効果を担っていたと考えられる。区画された敷地に掘立柱建物、井戸、柵列、土坑、性格不明遺構が整然と配置されている。

Ⅲ区では、南北方向の柵列ＳＡ301が検出された。ＳＡ301の東には、４基の素掘りの井戸が規則的に配置されている。これらの井戸がすべて同時併存であったかは判然としない。地下水脈に沿って井戸が構築されていった結果とも想定される。

〔5〕集落の景観

現在の地表面は北から南へ緩やかに傾斜しており、調査地の北には微高地が広がっている。中世遺構の分布状況から、調査地北に広がる微高地に該期の集落が展開する可能性がある。さらに、土層堆積状況から、Ⅰ区は中世段階まで河川の影響を受ける不安定な土地環境であった。Ⅱ区北半部とⅢ区は微高地状を呈し、中世段階には安定した土地環境であったために集落域として土地利用が図られたものと考えられる。

遺物は、日常的に使われた土師器の皿・坏・三足付き羽釜・土鍋が多く、貿易陶磁器は少ない。中国銭や石硯の出土はない。出土遺物と検出遺構から、集落の中心となる大型建物が営まれた屋敷跡が調査地周辺に存在したとは考え難い。さらに、積極的に出土遺物を評価するならば、本調査地が一般民衆のきわめて農村的な性格をもつ集落の一部である可能性が高いと考えられる。

以上、船ヶ谷遺跡３次調査の成果を報告した。既往の調査では、松山平野北西部（和気地区）における中世集落は不明な部分が多かった。本調査によって中世集落の資料が提示できた意義は大きい。得られた調査記録から試みた中世集落のモデルは、今後に実施される周辺地域の調査で検証していただきたい。

〔参考文献〕

田崎博之　1996「愛媛県の石器組成の変遷」『農耕開始期の石器組成』国立歴史民族博物館資料調査報告書７
中野良一　1988「愛媛県における古代末から中世の土器様相」『中近世土器の基礎研究Ⅳ』
宮本一夫編 1989『鷹子・樽味遺跡の調査』 愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅰ
田崎博之編 1993『樽味遺跡Ⅱ－樽味遺跡２次調査報告－』 愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ
栗田茂敏編 1993『石井幼稚園遺跡』 松山市文化財調査報告書第45集
森田　稔　1995「中世須恵器」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会

写真図版

写真図版例言

1．遺構の撮影は、調査担当及び大西朋子がおこない、高所作業車を利用した。

使用機材：

カメラ	トヨフィールド45A	レンズ	スーパーアンギュロン　90㎜他
	アサヒペンタックス67		ペンタックス67　55㎜他
	ニコンニューＦＭ２		ズームニッコール　28～85㎜
フィルム	プラスＸパン・ネオパンＳＳ・エクタクロームＥＰＰ		

2．遺物の撮影は、大西がおこなった。

使用機材：

カメラ	トヨ／ビュー45Ｇ	レンズ	ジンマーＳ240㎜
ストロボ	コメット／ＣＡ－32・ＣＢ2400（バンク使用）		
スタンド他	トヨ／無影撮影台・ウエイトスタンド101		
フィルム	プラスＸパン		

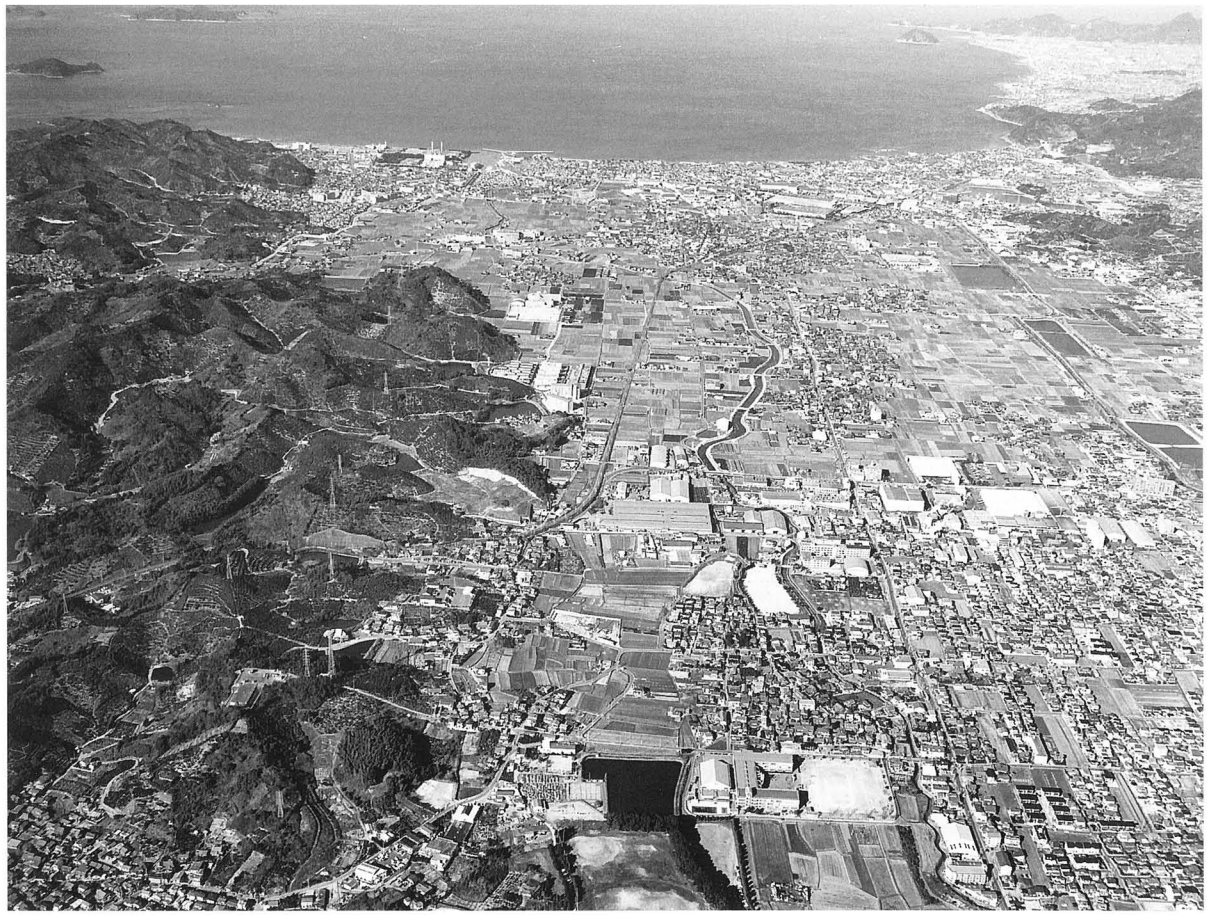
3．白黒写真の現像と焼き付けは、一部を除いて大西がおこなった。

使用機材：

引伸機	ラッキー450ＭＤ	レンズ	エル・ニッコール135㎜
	ラッキー90ＭＤ		エル・ニッコール50㎜
印画紙	インフォールドマルチグレードⅣＲＣ		
フィルム現像剤	コダックＤ-76・ＨＣ110		

［参考］『埋文写真研究』Ｖｏｌ.１～９

（大西朋子）

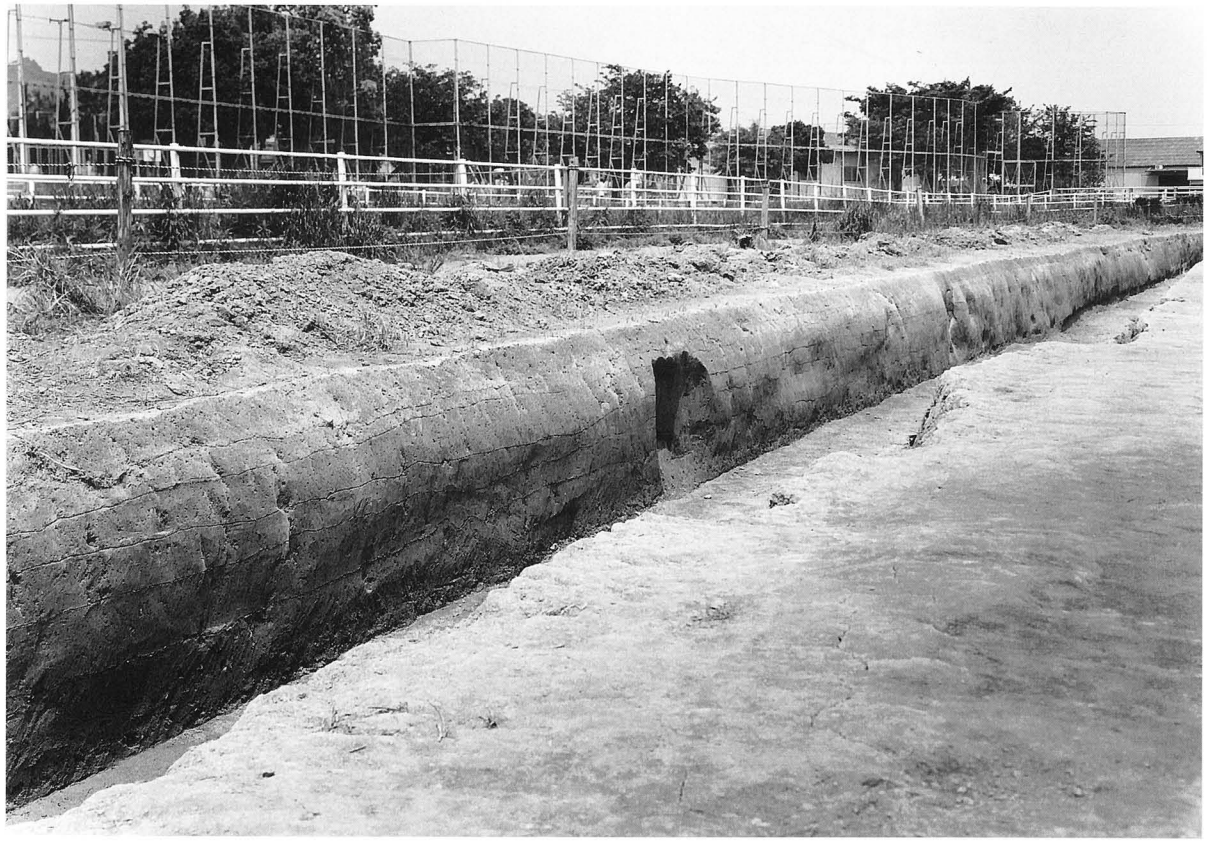


1．調査地遠景（南西上空より）

2．調査前（南東より）

図版二

1．Ⅰ区完堀状況（南東より）



2．Ⅰ区西壁（南東より）

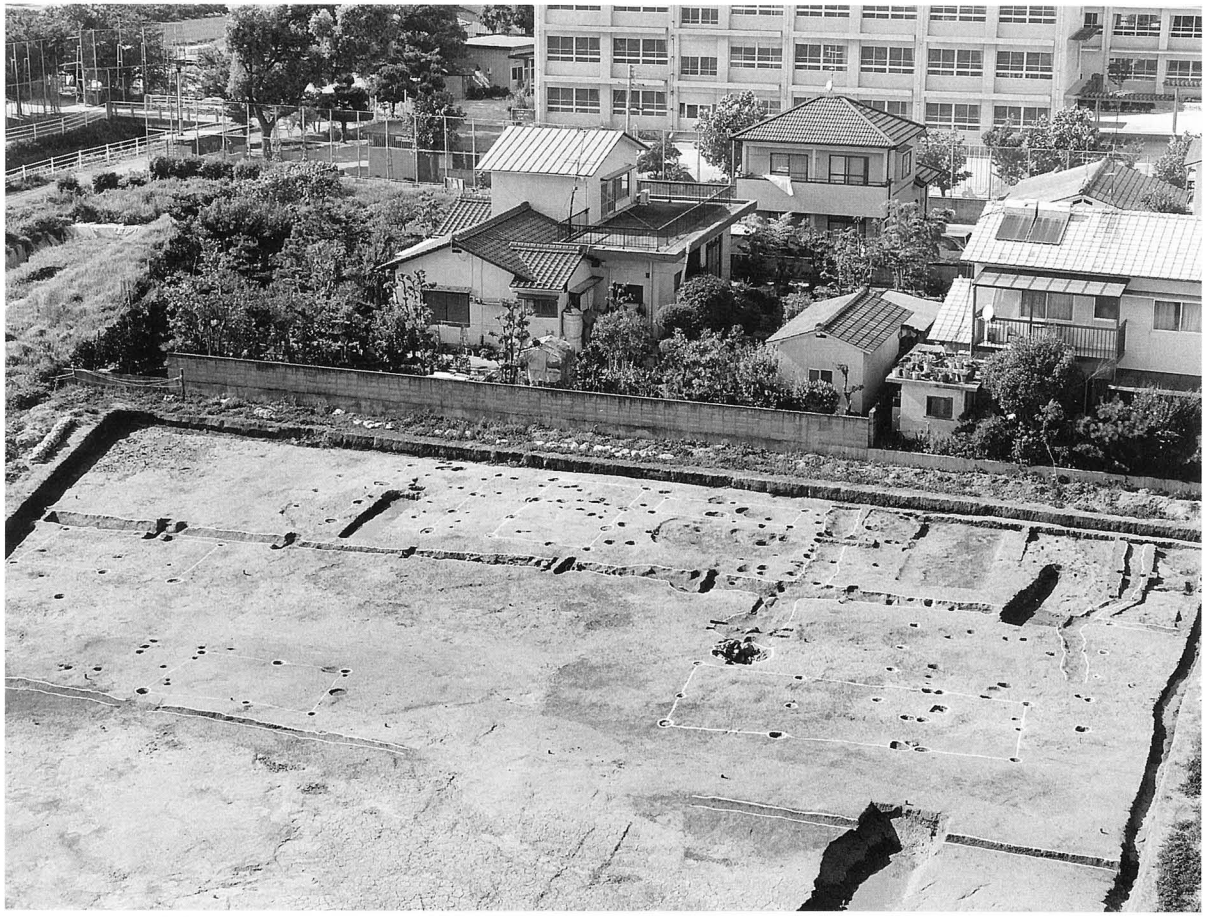
1．Ⅱ区完堀状況（南東より）

2．SR201南北ベルト（西より）

図版四

1．SR201における中層・下層遺物出土状況（北より）

2．SR201完堀状況（北東より）

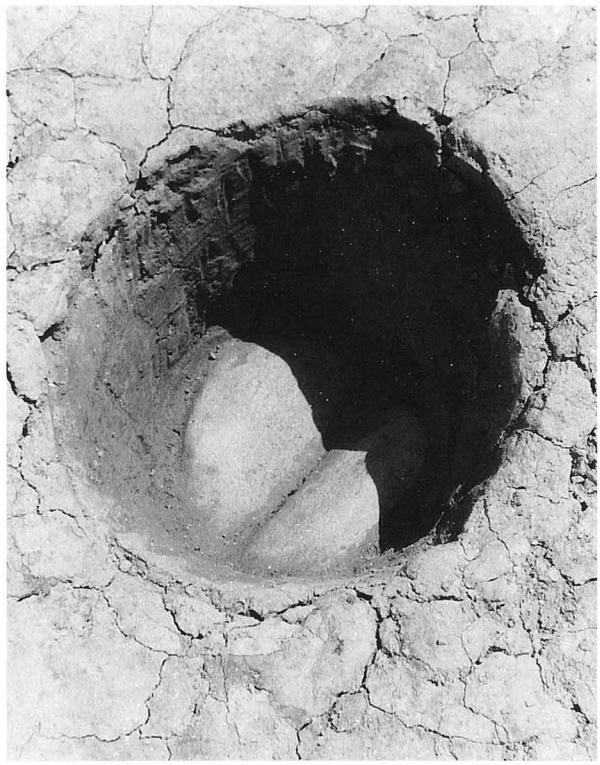


1．Ⅱ区北半部における中世紀期の遺構完堀状況（南より）

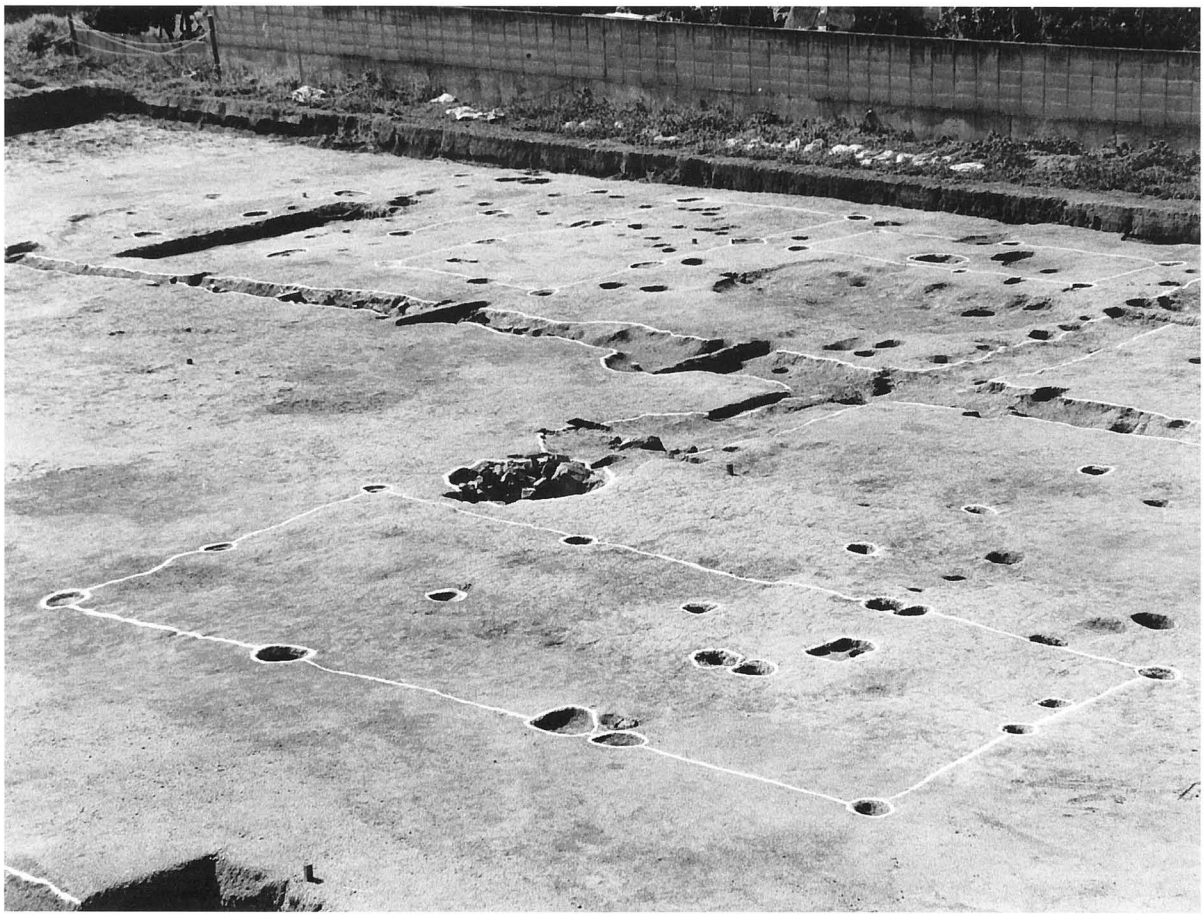
2．掘立204・炉（SK202）における土鍋出土状況（西より）

1．Ⅱ区北西部掘立柱建物群検出状況（西より）

2．掘立206・土坑（SK204）における大甕出土状況（南より）



3．掘立 206を構成するSP251の根石検出状況（北より）



1．掘立202・SE201・SD201・SD202の配置（南東より）

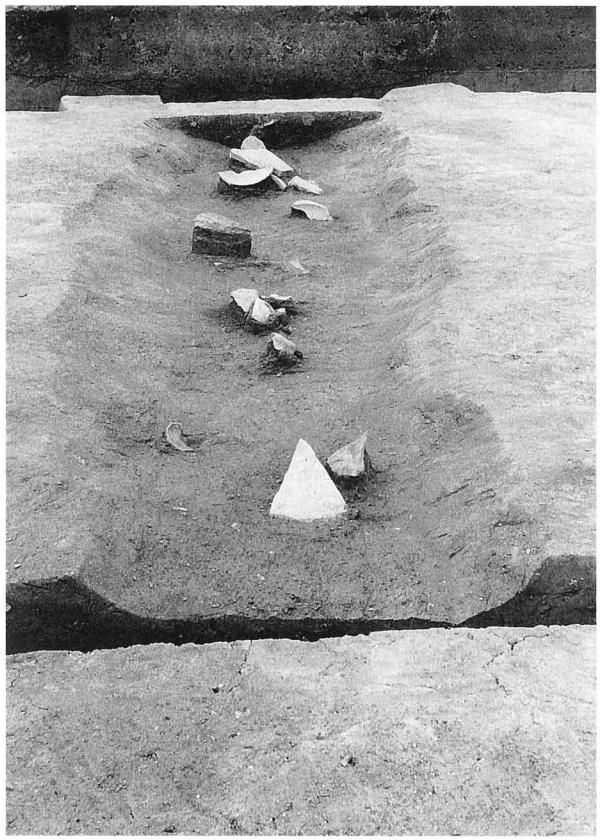
2．SE201検出状況（南より）

図版八

1．SE201完掘状況（南より）

2．SE201貿易陶磁器出土状況（西より）

3．SE201の構造（東より）

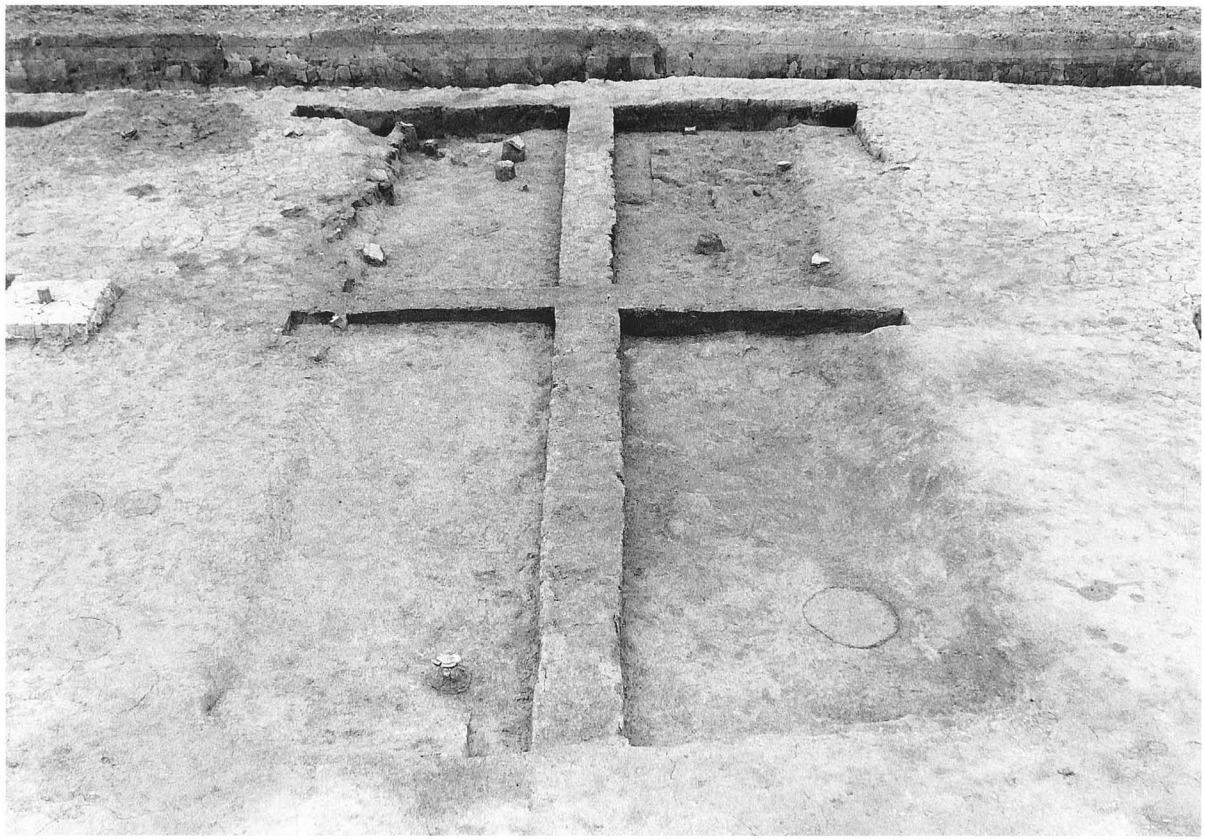


1．SD201遺物出土状況（東より）

2．SD201遺物出土状況（南西より）

3．SD203遺物出土状況遠景（南西より）

4．SD203遺物出土状況近景（南より）



1．SX201 完掘状況（南より）

2．SP231 遺物出土状況（南東より）

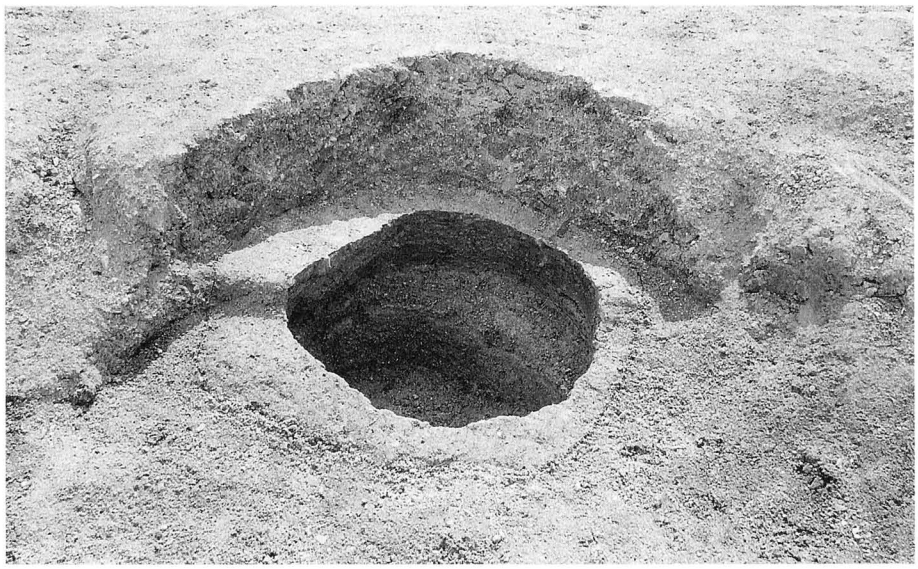
3．SP231 炭化材検出状況（南より）

1．Ⅲ区完掘状況（南西より）

1．SE301曲物出土状況（南より）

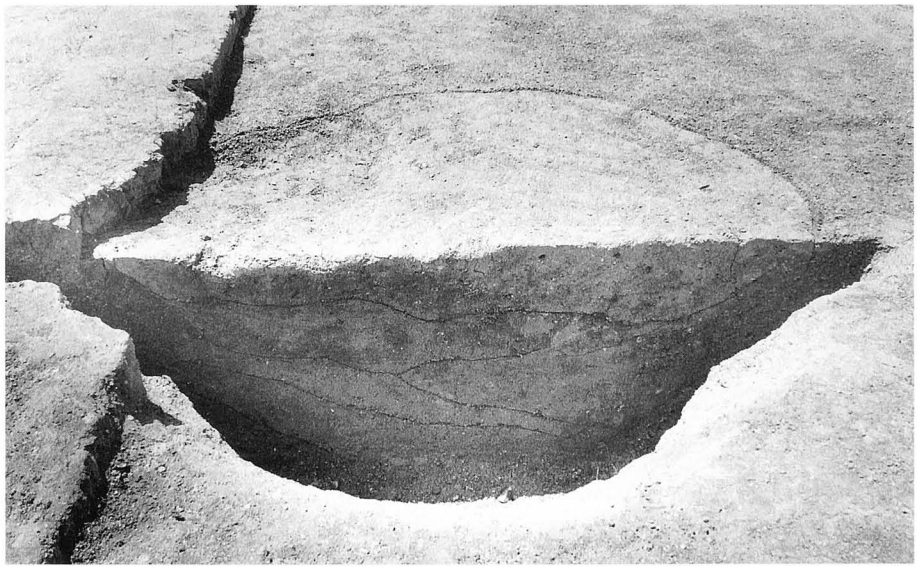
2．SE301 完掘状況（西より）

3．SE301断面土層（西より）

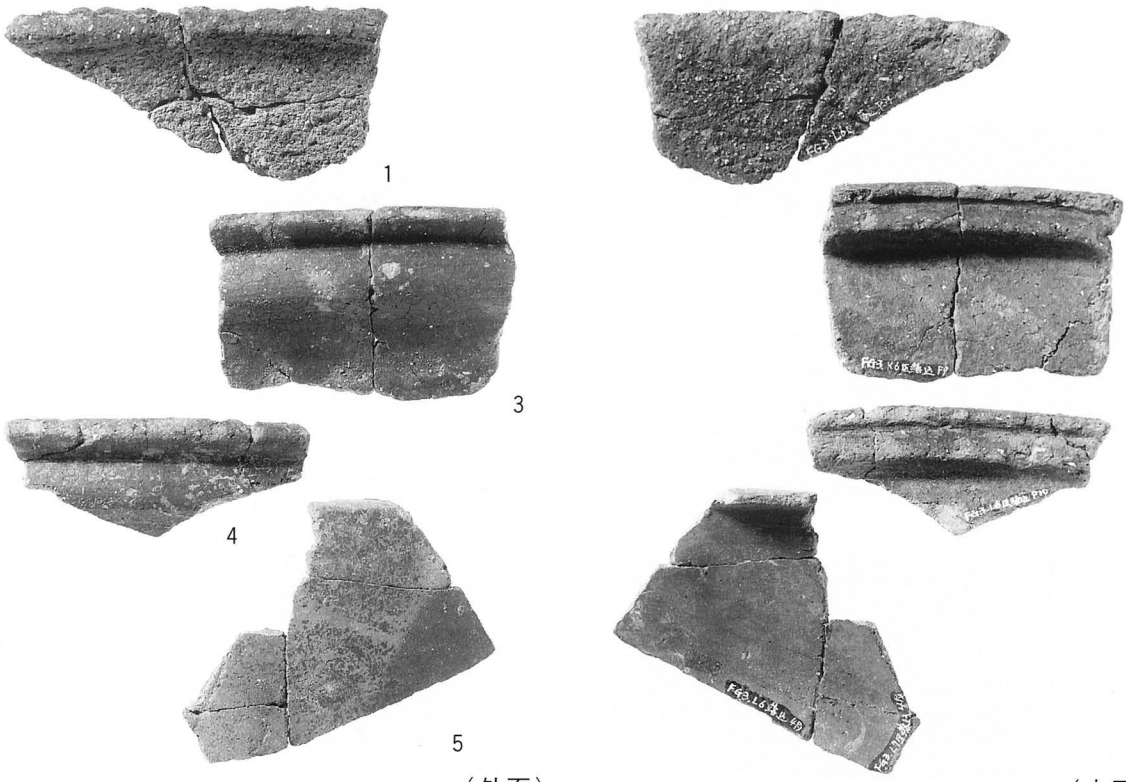


1．SE302完掘状況（西より）

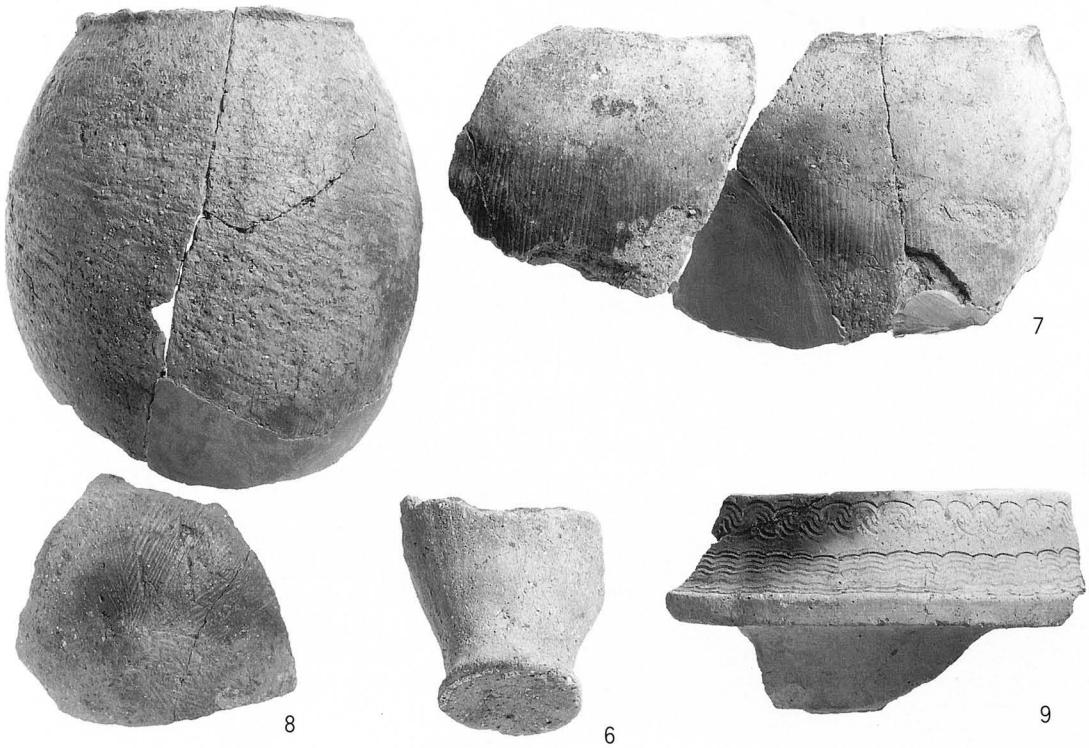
2．SE303完掘状況（東より）



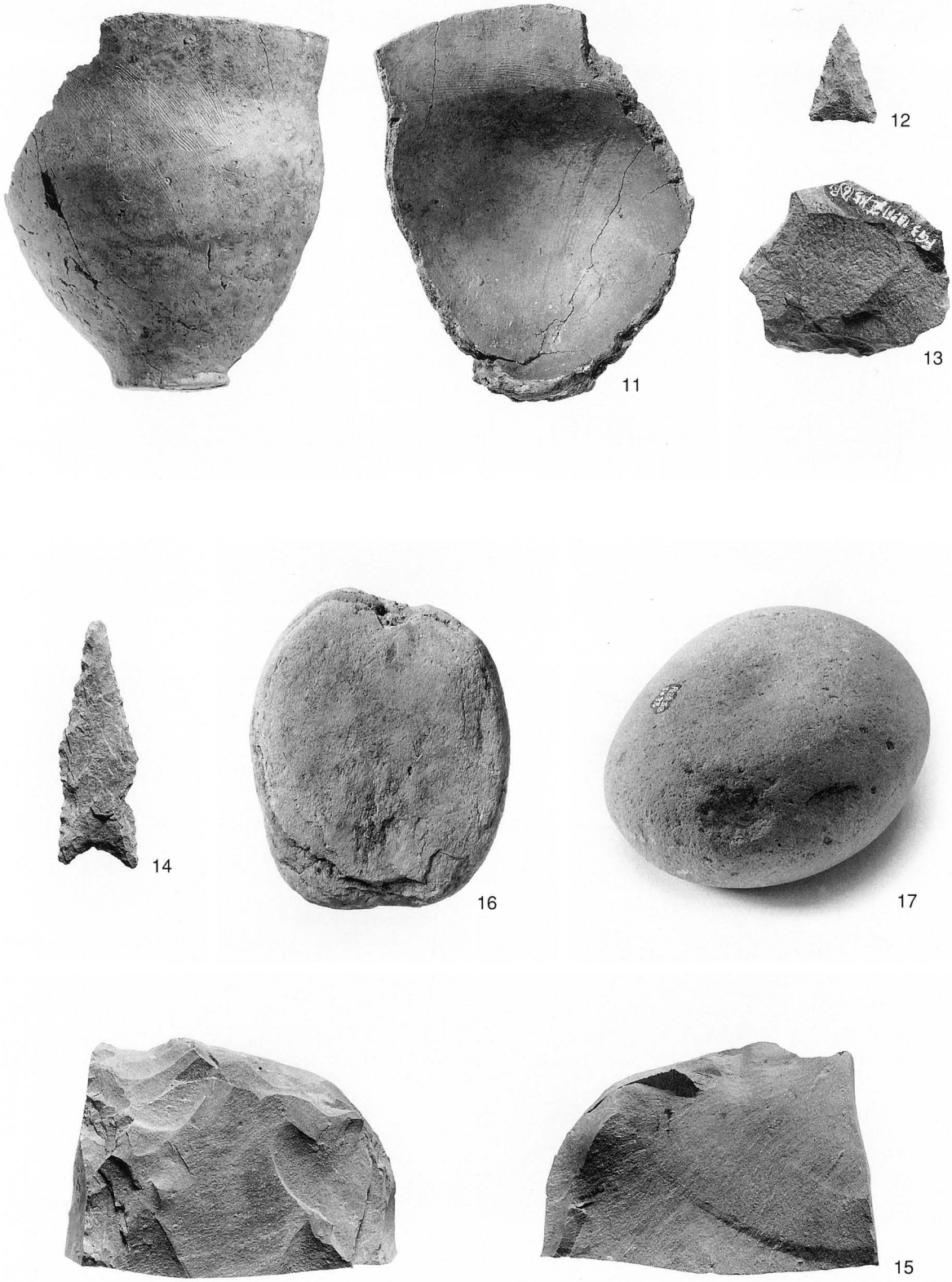
3．SE303断面土層（東より）



（外面）　（内面）

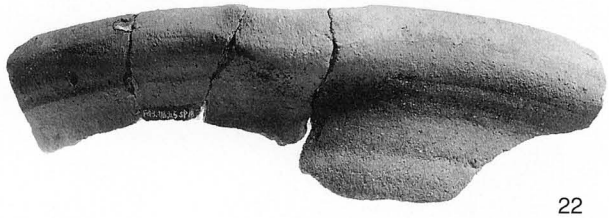


1．SR201 出土遺物①



1．SR201出土遺物②（11～13）・SR301 出土遺物（14～17）

19

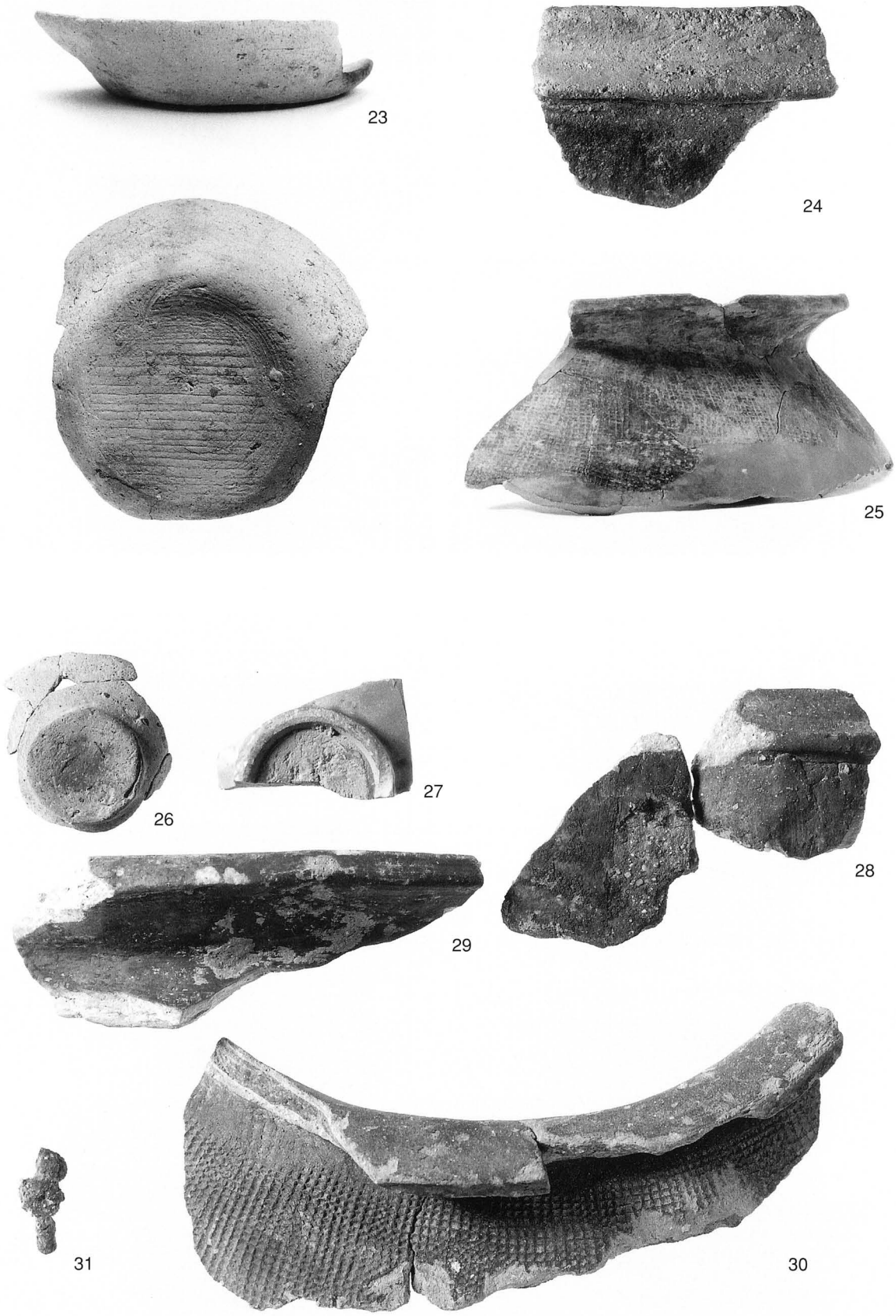


22

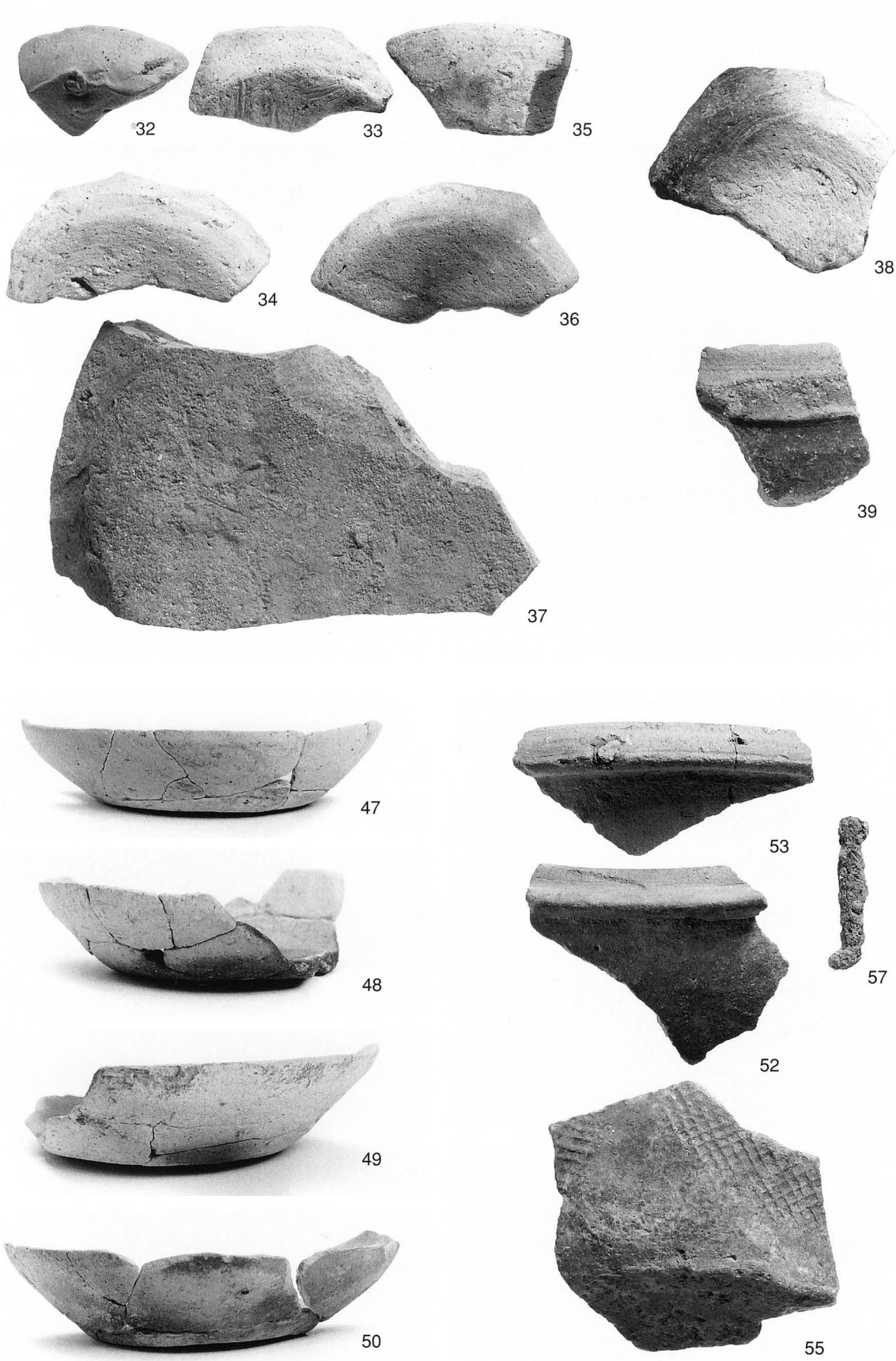
21

20

1．掘立204出土遺物（19）・SK202出土遺物（20）・掘立205出土遺物（21・22）



1．掘立206出土遺物（23）・SK204出土遺物（24・25）・SE201出土遺物（26～31）



1．SD201 出土遺物①

54

58

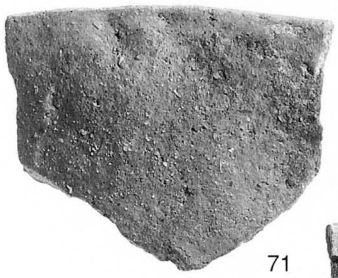
62

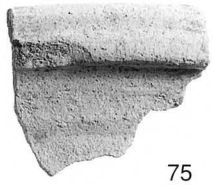
64

65

68

1．SD201出土遺物②（54・58）・SD202出土遺物（62・64）・SD203出土遺物（65・68）


71


75

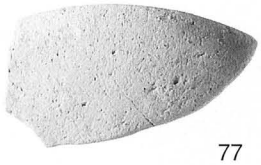
72

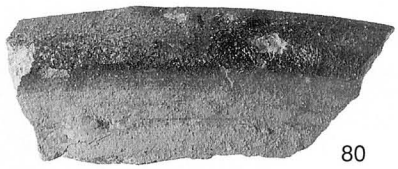
82

84

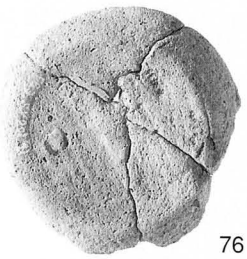
83

85


77


80

79


76

78

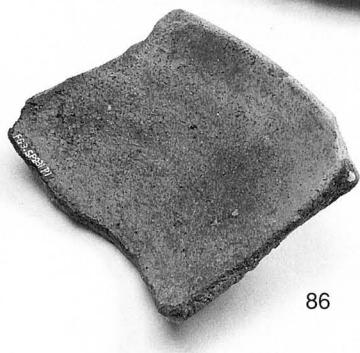
81

1．SK201 出土遺物（71・72）・SK203 出土遺物（75）・SX201 出土遺物（76～85）

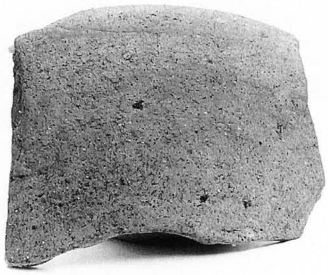
89

88

87

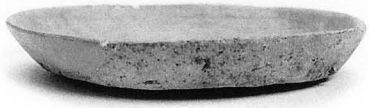


86



86

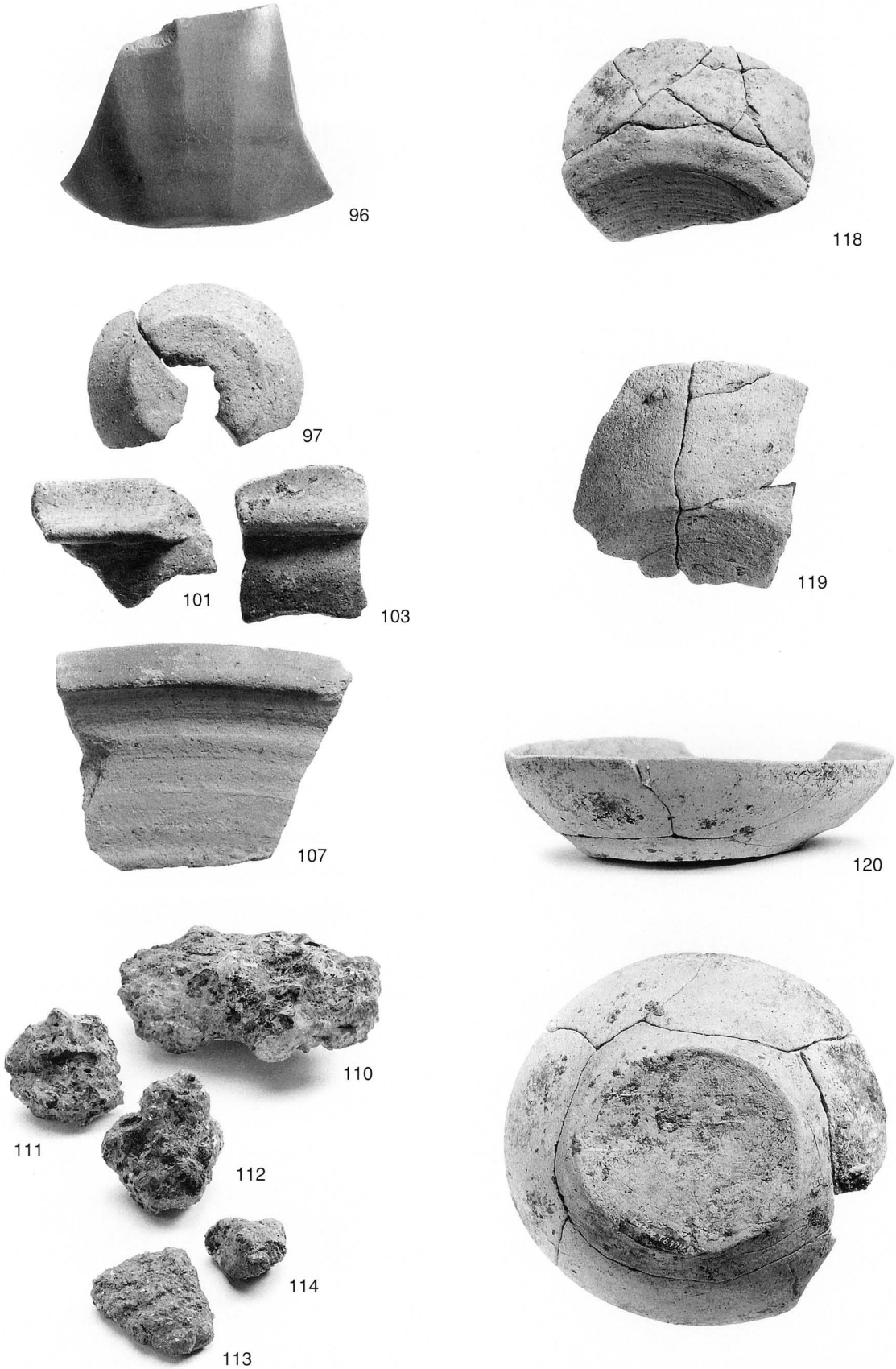
88



87

89

1．SP231 出土遺物



1．Ⅰ区包含層出土遺物（96）・Ⅱ区包含層出土遺物（97～114）・Ⅲ区包含層出土遺物（118～120）

報告書抄録

ふりがな	ふながたにいせき
書名	船ヶ谷遺跡
副書名	3次調査地
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第73集
編著者名	加島次郎・山本健一・大西朋子
編集機関	松山市教育委員会・㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
所在地	市教委：〒790-0003　松山市三番町6丁目6－1　TEL 089-948-6605 埋　文：〒791-8032　松山市南斎院町乙67－6　TEL 089-923-6363
発行年月日	西暦　1999年9月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
ふながたに 船ヶ谷3次調査地	まつやましあんじょうじまち 松山市安城寺町	38201		33° 52′ 05″	132° 44′ 33″	19980401～ 19980831	5,730	店舗建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
船ヶ谷3次調査地	集落	縄文 弥生 中世	自然流路 掘立柱建物址 井戸、溝、棚列 土坑など	縄文土器、石器、 弥生土器、土師器、 須恵器、瓦器、貿易 陶磁器など	曲物を伴う中世の井戸

松山市文化財調査報告書　第73集

船ヶ谷遺跡 －３次調査地－

平成11年９月30日　発行

編　集　松山市教育委員会
〒790-0003　松山市三番町６丁目６－１
ＴＥＬ(089)９４８－６６０５

発　行　財団法人　松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター
〒791-8032　松山市南斎院町乙67番地６
ＴＥＬ(089)９２３－６３６３

印　刷　原印刷株式会社
〒791-8014　松山市山越４丁目８－15
ＴＥＬ(089)９２４－８８２３